
東方起源獄

バイアティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方起源獄

【Nコード】

N2917Q

【作者名】

バイアティス

【あらすじ】

起源の生命。

生命の誕生。

争いの起源。

自然の摂理。

星の起源種として生まれたその存在たちは、人と妖怪たちが織り成す歴史にどのように干渉するのか。

作者の気紛れ小説です。ほとんど行き当たりばったりで書いていくので更新は不定期となります。感想もらえると更新が早くなったり？

序章 起源・炎獄（前書き）

一話一話は短いです。

作風も行き当たりばったりなので安定せず。

東方原作キャラはまだ出てこないので注意！

序章 起源・炎獄

闘争の始まりは何時だ？

知性ある生命^{モノ}が誕生した時か？

否である。

生存競争や弱肉強食、自然淘汰を争いの一つと定義に当て嵌めるならば、あるいは、争いを生存競争や弱肉強食、自然淘汰の一つと定義するなら、争いは自然の摂理。

それに知性の有無はもとより、感情の有無すら必要ない。

争いは生命の義務である。

ならば闘争の始まり、その起源とは、最初の生命が生まれた時である。

では、最初の生命とは何だ？

”コレ”が持つ知識には、この惑星に誕生した最初の生命とは、生命とも呼べるか分からない一個単位の細胞であるとしている。あるいは細胞を有さない極々微小な細菌やウイルスであるとも、はたまたこの惑星の外から飛来したナニかが最初の生命であるとしている。

どちらにしたところで、”コレ”が有する知識の中には、最初の生命についての仔細な情報など微塵もなく、導き出した最初の生命の定義にしても単細胞生物と呼ばれる生命・生物として認識するには弱すぎる活動を有するものであるという答え。

だが”コレ”は思うのだ。”アレ”は何なのだろうと。

先に述べたが最初の生命と定義する単細胞生物らも、それが生命として活動しうるには、活動するのに支障のない場が必須。

しかし此処は違う。

”コレ”が形のない意識だけの目で見える光景は、通常生命と定義されるものが生存することなど到底不可能な星の原初の姿。

湧きあがる溶岩が赤黒い血液のように不定形の行進を続け、空には塵や水蒸気で出来上がった分厚くどす黒い雲が覆い尽くす。

未だ大地すらも形作られていない、生命が存在することを許されない紅の地平。

星の始まりの姿——灼熱暗黒の炎獄世界だ。

先に”コレ”が持つ知識から定義した生命。その基準から考えるなら、今のこの世界に生命など存在するはずはない。
ないのだが、

（では……アレはナンなのか——）

”コレ”の目の前には、れっきとした生命が存在していた。
最もその姿は”コレ”が持つ知識のいずれにも該当しない未知のものであったが。

それは流れる莫大な質量と熱量の溶岩をもともせず佇む巨大なナニか。

その生命は”コレ”の持つ知識の中にある巨大建造物に匹敵する巨軀を持つ四脚。その全身は灼熱世界の中にあっても一際威圧感のある刺々しい赤黒の甲殻に覆われ、その顔には豪壮な二本の牙が生えている。

”コレ”の知識の中でその禍々しくも力に満ち溢れた姿に当ては

まるモノが一つだけ。

”コレ”の認識では空想上の生命とされながらも、この星で発生した文明のほぼ全てに何らかの形で関与する強壮なる存在——
即ち、”龍”あるいは”竜”と呼ばれたモノだ。

（そんなモノが、存在するはずが——）

ない——、と思いかけ”コレ”は否定の思いを胸中に抱いた。
存在するのだから、あれは存在するのだ。この世界において”アレ”は生命として誕生したのだ。

その存在を否定することは出来ないのだ、と。

”コレ”の考えや思いなど”アレ”には届かないだろう。”コレ”の存在に気付いているかも不明だ。
だが”アレ”の姿を目に焼き付ける、最初の生命のその姿を。この始まりの地獄の中で一匹の生命を。

彼の炎獄界の王は”コレ”の視線など気にもせず一際巨大な咆哮をあげる。

一匹だけの起源種は、孤独のままに雄たけびを続ける。
激しく燃えたつ己が灼熱の性、そのままに。

序章 起源・炎獄（後書き）

見た目はまるっきりアカムさんですけどね（お）

序章 起源・水獄

.....

.....、ああ

.....

.....幾度

.....

.....幾度、星は廻つただ
ろつか。

”コレ”の認識では刹那のようで永遠のよう。
意識だけははつきりとしているが、目の前の光景は一変していた。

灼熱の溶岩と分厚い雲に覆われていた世界は、大気そのものの温度が原初に比べて大分低くなったのだろう。血管のように星を巡っていた溶岩は大部分が冷えて凝固し、天上の雲からは”コレ”が見たことがないほどの莫大な量と勢いの雨と風が降り注ぐ。

なるほど——と、”コレ”は思う。

灼熱の支配する炎獄の世界と比べれば、なるほど大分”らしく”
なってきた。

生命が誕生する土壌となるに相応しい——と、単純に思えるが、真実は違う。

いかに灼熱から脱し、生命起源の基となる水が星を満たそうと、これでは生命は生まれない。

なぜならその水は、海は……生命を生み出さない原初の死海。

生命の基準には適さない無数の毒と吹き出す瘴気が支配する、真にして偽たる蒼の地平。

猛毒有害の大海を孕んだ、濁り湧き立つ水獄世界。

（されど、炎獄の”アレ”と同様に……）

”ソレ”は其処にいたのだ。

”コレ”の意識は、一度も動かしていない。だが、”ソレ”は唐突に現れた。

生命の誕生と呼ぶにはあつさりとしたものだ。

だが、”コレ”の認識は、まあそんなものかという思いだけだが。

”ソレ”と表わした生命は、一言で言い表すならば巨大な”蛇”であろう。

最もその躯体は”アレ”と称した炎獄世界の生命と比肩してもなお巨大・長大と言えよう。

有害猛毒と”コレ”が言った高温の海水を意にも解さない、滑らかな蒼黒の鱗に覆われた蛇身。その身には一見すれば翼とも思える巨大な四対のヒレを持つ水獄の主。

炎獄の王に匹敵する生命の力に満ち満ちた起源生命。
だがそれだけではない。

（いやはや……勇壮なものだ）

”コレ”が思わず呟いた光景は、”ソレ”がその長大な蛇身をくねらせ擦じらせながら、その巨大なヒレをたなびかせ、猛毒の海から雷降り注ぐ空へと舞い踊る光景。

その姿に”コレ”は炎獄の主以上に”龍”という呼称が似合うな、と”ソレ”を思う。

水獄の具現たる蛇龍は、甲高い咆哮をあげて莫大な水と風と雷を引き連れて踊り続ける。

”コレ”の視線など気付きもせず、誕生の歡喜を全身で表現する。

そして――

序章 起源・水獄（後書き）

モンスターコレクションの漫画にのみ登場する上位龍・ハイドラゴン。水の上位龍ヴェバルさんがモデルかも？

……モンハン関係ねえ。

序章 起源・閻獄

炎獄と水獄。

灼熱と蒼濁。

灼熱が支配する世界で誕生したのは、煮え滾り流動する紅蓮の大地の王。

蒼濁の海と空の世界で誕生したのは、猛毒有害に狂喜う死海と荒天の主。

”コレ”が定義する”アレ”と”ソレ”と呼ぶ原初の生命。
世界が最初に産み落とした、”コレ”の知る歴史には存在しなかったはずのモノ。

だが誕生した以上は生命であり、星の子である。
存在は否定できない。

この世界ではそれが誕生することは最初から決まっていたことだからだ。

では……最初の生命たるモノたちを観察する”コレ”とは何なのだろうか？

”コレ”は”生命なのだろうか？

答えは――

時は巡る。

時は巡る。巡る。

時は巡る。巡る。巡る。

その強大なる四肢にて大地を踏みしめ、灼熱の溶岩を従えるは炎獄の竜。

その強壮なる四翼にて曇天を舞い踊り、死海と雷鳴を従えるは水獄の龍。

その出会いは必然なのだ。

”コレ”が観察せずともいずれば出会ったいただろう。
原初より生まれたその二つの生命。

己とは異なる存在。

姿・色・形・属性・事象・現象……………全てが異なる両者。

ゆえに——その闘争は必然なのだ。

炎獄の王はその巨軀とは裏腹に俊敏な動作で天舞う蛇身を噛み砕こうと、その四肢にて大地を蹴り砕き豪壮なる牙と全身の大棘にて襲い行く。

対する水獄の王はその長大な身体を器用にくねらせ、地を往く赤黒の竜へと死海的大海嘯を、あるいは天の風雷を叩きつけまいと迎え撃つ。

だが原初たる存在はどちらも屈しない。
炎獄の王は焰によって傷を埋め、水獄の主は死海によって再生する。

堂々巡りの激闘。

一撃一撃が星へと巨大な傷跡を残し、互いの攻防によって生じる波動が更なる破壊を生み出す。

そして――

（――生まれる）

竜と龍がぶつかり合うその都度、生じる波動は”コレ”をこの世界へと生み出すための”器”を作り上げていく。

最初の生命の闘争を観察する、”コレ”とは生命か？
否である。

”コレ”とは生命ではない。正確には、これから生命となるのだ。

（そう――”コレ”は誕生などしていない。”これから”誕生するのだ――！）

互いが互いを否定し合う⇨互いが互いを肯定し合う。
闘争こそが世界に定められた不変の理論。
自然の生み出す絶対の――

（そう、それは生命に架せられた宿命）

出会ってしまった二匹の起源。
それは必然の邂逅。
起源と起源の闘争。

この星が刻む、最初の闘争。

異なる生命の対立こそが”進化”の求める答えであるからこそ――

ゆえに”コレ”はこうして誕生する。

生存競争、弱肉強食、自然淘汰……生命に宿命さだめられた自然の絶対
摂理たる闘争本能。

それこそが”コレ”の起源であるならば――

――その身体は炎獄と水獄と比較してもなお同格。堅牢な甲殻
と蝙蝠とも猛禽とも似つかない一対の大翼、三又の尾。不揃いの角
を生やす三つ首。

（”コレ”は、否……”我”は――）

――その身に帯びるは赤でも黒でも蒼でもない。だがその身は
それら全ての色を宿す混沌色。

そうだ……”我”はいま生命として誕生するのだ。

”コレ”ではない、”我”として。

炎獄と水獄と並び立つ原初世界の起源生命として。

――炎獄と水獄も気付いただろう。己らと並びたつ彼のもの存
在を。

ならば定義しよう。

”我”という存在を定義づける、その現象・事象の名は……。

—— 畏れるな。怖がるな。それは生命の根源たる真理・摂理の
申し子なれば。

「我は”闘争”、自然の摂理。生命の紡ぐ絶対なる法則。司るは”
あらゆる争い”であるならば、我は”我”のことを闘獄世界と定義
する——！」

ここに、最後の起源生命たる”我”—— 生命が織り成す闘争
を従えるモノが世界に誕生した。
歴史はここに、始めの軋みをあげ始める。

序章 起源・闘獄（後書き）

キングギドラってかカイザーさんのほうだったり（笑）

序章 闘争起源・前（前書き）

戦闘シーンがくるかと思ったか？

まだなんだよ……

序章 闘争起源・前

視点・炎獄

己は己の生命の始まりを憶えている。

己以外の何物も存在しない、灼熱の溶岩と分厚い雲で閉ざされた
暗黒の世界。それが己の始まりであり、己の棲まう世界。

そう、炎獄だ。

己以外の何物も生存を許さぬ、己が愛する熱と暗黒と孤独が支配
する世界。

だのに何だ？ この今の世界は……

（氣に入らんのお……）

己が炎獄の世界こそが正しく原初であり、この星は永劫そのまま
で良い。

だと云うのに——、この生温く己の身にうつとおしく纏わり
つく液体の何と煩わしいことが——！

己の世界を変えたものは何だ？

己の炎獄を奪ったのは何だ？

それから己は、世界を巡りまわった。己の世界を奪った何かを捜

す為に。

何度この星が廻ったのか。刻一刻と、愛する灼熱世界が冷えていく。

ああ……熱が、赤が、暗黒が消えていく。

だが全てが消失する前に、己は間に合った。そう己は間に合ったのだ。

己の眼前には、己以外の生命。己以上の長身をくねらせる青黒い鱗で覆われ空を舞う生命体。

ああ……お前か。

お前が元凶か。

ようやく見つけた許さない。

燃やして。砕いて。焼いて。潰して……その目障りな器ごと滅してやろう。

この身の内に燃え盛る煉獄を持って——！！！！

視点・水獄

ああ……歓喜だ。

俺は歓喜しているぞ。俺はこの世界に誕生したことに歓喜している。

俺の生命を育んだのは、俺以外の存在を拒む愛しい俺の水と天。

青黒く世界を染める水獄だ。

だが――

（気に入らん）

俺のこの美しい蒼たちを拒むように、赤黒く流動する地が俺の目の前に広がっている。

俺の蒼たちと赤はぶつかり合って互いに激しい反応を起こしている。

それは俺の視覚の届く範囲、いたる所で起きている。

超高熱の溶岩は、俺の蒼によって冷やされ赤黒い表面をただ硬いだけの固形物へと変貌させている。

その反応の結果を見るに、俺の蒼の方が優れていると言わざるをえんだろうが、しかし気に入らん。

何が気に入らんのか？

決まっているだろう。俺の愛する蒼に刃向かうその存在が気に入らんのだ。

ならば俺は——、この見苦しい、暑苦しい灼熱の大地をこの蒼にて清めよう。

それから暫くの間、俺はこの荒れ狂う天を舞いながら世界の全てを蒼で染めるべく、蒼を降り注がせた。

それは天よりの水の矢としてだけでなく、いまや世界のほぼ全てを包んだ俺の海を壁のようにそびえ立たせた大海嘯も使ってた。

星が幾度か廻った。

数えるのも面倒なので正確な数字は知らんが、結構な数を回転したようだ。

その甲斐もあつたか、いまや世界は蒼がほとんどを占める俺好みの世界になった。

美しい。

ああ……なんと美しいのか、俺の世界は美しい。

だが——俺のそんな歡喜に水を差す、超高熱を孕んだ大咆哮。

天舞う俺が地を見降ろせば、そこには俺以外の生命。

ああ……なんだ、まだあつたのか。

（はは——）

俺以外の生命——ただの染め残しが。

あのデカい赤黒いのを蒼で染めてやれば、今度こそ完璧に俺の世界が……水獄が生まれでる。

なら染めてやろう。沈めてやろう。俺の蒼にて冷えて散れ。

さあ、蒼に包まれて……俺の世界の糧となれ……！！

視点・闘獄

まあ、そんなやり取りがあったのだろうと。

実際のところは知らないが、大まかには間違っではないだろう。

両者ともに原初の世界から生まれた最初の生命だ。互いに違う性質で両極端なのだから、出会う前からこんな感じであろうし、出会ったならば”あのように”なる。

が、過程などどうでもいい。二者の対峙、この原初の世界にあつて最初の闘争は我を産み落とした。その結果こそが全てだ。

その結果——我は生まれた。

炎獄でも水獄でもない。むしろ場という概念とは違う。最初の闘争というその事象が我の始まり。

我は生まれたのだ。

では——闘争として生まれた我はこの二者に対して何をするべきか？

まあ……

「決まっている。闘争こそが我ならば、行つことは闘争に相違ない」

赤黒の竜と蒼黒の龍も我に気付いたか、互いを牽制し合いながらも、我に視線をよこす。

貴様は”何だ”と、言葉にならぬ雄叫びにて問う。

ああ……忘れていた。

これをやらねば締まらんし、なにより我がしたい。

我は三つある首を代表して中央の一つにてそれを行う。

我が定義する闘争の基本として——まず我を知らしめること。

「名乗ろつか我が起源獄の兄弟たち。我はあまねく闘争の具現、一番始めの争いの形態。我は我を闘獄と定義する。」

序章 闘争起源・後（前書き）

戦闘シーンむずい。

しかも表現がくどい。

なんだろうこの怪獣大戦争？東方だよな？ そんなお話です。

序章 闘争起源・後

我は我の生命初の名乗りを上げる。

闘獄世界……闘獄。闘争の起源の名だ。

そんな我の名乗りに対してか、赤黒い甲殻の竜は蒼黒に先んじて咆哮をあげる。

笑っている——と我は感じている。

咆哮に混じってその姿に似つかわしい豪快な笑いが、言葉とは違う振動となって伝わる。

言葉を扱う声帯の形態が違うのだ。当然言葉らしい言葉などない。だが、我には解る。

同じ起源種という点では我と炎獄は同じなのだ、なら解らないほうがおかしい。

その咆哮には笑いと共に別の意も込められていた。

そうこのような——

（ガハッハハハハハ！！　なんだ主は！　主もワシの同類か！！

その名乗りとやらは知らんが、主の好きなように呼べばいいさ！！　なにせワシはワシを呼ぶ他の生命など知らなんだからなあっ！！

ガハハハハハハ！！！！）

「ふむ……では 炎^{エン} とでも呼ばせていただく。炎獄……では名なのか場なのかはつきりしないがゆえ」

いやはや実に豪快。その姿形に真に似つかわしいと言えよう。思わずノリで名付けてしまったが、まあどのみち呼び名がなければ

ば面倒なのだからそれはそれでいいだろう。

（名など知らんが好きにしろおっ！！！！　あとついでに……主も燃えろおっ！！！！）

……こいつ実はただ暴れただけなのではないか？　属性が…性質が…うんぬんなど関係なしに。

とは言えた。

炎は起源の火そのものである以上、その性質は単純明快。

赤い竜はその名の示す通り、炎の塊を作り出しそれを我に放ってくる。

炎弾は単発のものだが大弾だ。しかもただの炎ではなく溶岩。

「が、こんなもの避けるのは容易いぞ？」

（ガハハ！　なら……これはどうだああっ！！！！）

一際大きく吼えると、赤黒いその甲殻の隙間から赤い光が漏れ……瞬間、眩いほどの閃光と爆音と共に弾ける。

大地が裂ける音、大気が燃える音。

我の目を一瞬眩ませた光が収まった後には——炎獄の世界が生まれていた。

（これぞワシの世界！　ワシの棲む世界！！　ワシの為の憩い場よ！！！！）

「なるほど…… 炎獄界を生み出す程度の能力 —— と言ったところか？」

原初の時代の最初に見た光景、そのままの姿で世界が炎獄へと変貌していた。灼熱と暗黒が支配するあの頃の世界の姿に。

我ながら良い名を付けたものだ。

いやまあ、見たままの現象だな。

……はて —— ？

いま我は ○○程度の能力 と言ったか？

（ふむ…… 我、否” コレ” の持つ知識の中にあつたな。そうか…… この世界は” 東方” か）

我の中の知識、” コレ” の知識にあるとある遊戯の記憶。

だが、その遊戯の中に炎獄や水獄といった存在はいないはず。なにより —— 我も存在してなどいないはずだが…… ？

（ガッハッハ！！ 余所見か余裕か燃やすぞゴラァっあああああ！！！！）

怒声とともに放たれるのは先程放った大弾とは違う。

その口内には揺らめく超高温の赤い灼光。

咆哮とともに放たれるのは自身の器すら包み込むほどの極太の熱

線であり、さらに咆哮によって灼熱の大地そのものを抉りとり、加速をつけて放ってくる。

熱線に加えて溶岩そのものを弾にする……大味だが威力は計り知れない。

「まともに相手をするだけ損か」

熱線は単純に横にずれることで対処し、溶岩流は大きなものは我が三つ首それぞれから放つ黒い光線で破壊した。

威力は上々。なんとなく意識せず使ったが、ふむ……こんなこともできるか我が器。

さて主な脅威は去ったが終わったわけではない。

大弾は砕いたとはいえ注意すべきはむしろ細やかに砕けた欠片のほう。たとえそれが欠片でも超高温の塊であることに変わりはないゆえに取るべき行動は回避だ。

「とは言え……まあ当たったところで熱いだけなのだろうが」

そう、熱いだけだ。

まだ我は己の身の耐久性や強度を理解しきっていないが正直なところ、この程度の小さな塊では、我が身には小石（とは言え焼け爛れた高温の塊だ）が当たった程度でしかない。それではダメージとは呼ばないだろう

溶岩流を完全に回避しきり空中で体勢を取り直し――

（貴様の定義では、名とは俺を指す唯一の言の葉のことか。ならば美しき蒼の主たる俺は、俺のことを水スイと呼ぶことにしよう）

「ぬうあつ……!？」

そんな甲高い咆哮と思念と共に、絶妙なタイミングで雷の束が我の身を焦がした。

ああ……影が薄くて忘れそうだったが、狙ったか水獄の。こちらを見下ろすほど天高く舞う蛇身が雷を纏い佇んでいた。

（俺はその赤黒とは違う。貴様が俺やあれと同類なら全力で排除する。蒼の為に）

水と自らを名付けた龍はそう宣言し、蒼黒い光を全身に纏わせ始める。

蒼の光は徐々に強く、それに伴って荒天はその激しさを増し大地に雷と水の矢を降り注ぐ。だがそれだけでは終わらない。

その光が猛毒の死海までおよぶと、それは逆巻き渦巻き、圧倒的な巨大さを持って生まれる。

「竜巻……」

生み出されたのは竜巻だけではない。

先程まで灼々と焼け爛れていた炎獄の大地を侵食するように、死海の蒼たる水獄が世界を満たし始めていた。

（これぞ俺の美しき蒼。俺の世界のあるべき姿）

「――、炎に習い 水獄界を生み出す程度の能力 とでも定義するのでしょうか？」

世界を死の海へと、荒々しい荒天の吹き荒ぶ水獄へと変貌させる能力。

成程、散々美しいと連呼し自慢するだけのことはある。その世界は水にとつてのみ優しく他には厳しい世界だが、その蒼黒く艶やかな色は確かに美しい。

（異論なし。貴様もあそこの暑苦しい奴と一緒に、俺の美しい蒼に染めてやろう）

（グアアッハッハッハ！！！！ 戯れるな蒼いヒヨロヒヨロがあっ！！！！ 燃やし尽くして俺の世界の肥やしにしてくれらああっ！！！！）

炎はより激しく燃え盛り、水はより慌ただしく荒れ始める。

溶岩流、雷雨、熱線、竜巻、地殻破碎、大海嘯———ありとあらゆる起源獄。

雨あられなど生温いと言える規模のそれらを回避するのは、不可能。

炎や水も我だけでなく、互いが互いを激しく侵す。

無論、我もまたやられるだけではない。

三つ首の全てから混沌とした色の波動を放ち、両者を撃つ。

だが……徐々に、徐々に我の器が削られていく。

終わりを見せないその大災禍。大災厄。大々災害。大々天災。

そして———

((これで……………終わ (りああああがああつ!!!!!!!!) (れ
……))

「なにげに息ぴったりだな貴様ら——っ!!!!!!!!」

この闘争中で最も輝く赤と青の波動の波濤。

「——、ぬうああああがあがああつあがつ!!
!!!!!!!!」

たった一撃。

たったの一撃で (傷ついていたとは言え) 我の身が砕け散る。星
の未来で生まれ出でるどんな生命よりも強靱であるはずの器が燃や
され、侵され、蹂躪される。

(ああ——)

流石、流石は我の同類。

起源という星の記憶から生まれた、星の申し子。生命基準から逸
脱した最初の生命。

なんと雄大で勇壮なことか。

なんと強大で凶悪なことか。

そして——なんと誇らしいことか。

ゆえに——ゆえに我もそれに敬意を示そう。
我が誇らしき起源の兄弟たちへの、先達への敬愛の念を込めて。
お教えしよう、お見せしよう——我の能力を。

「ありとあらゆる闘争を司る程度の能力」

闘争そのものである我。

その能力は単純明快。

闘争を活力として闘争が在る限り存在し続け、闘争を続ける限りは決して滅びず、闘争において決して力尽きることがない。

……重複している気がするが。しかしこれが我の能力であり本質だ。

もったかみ砕いて説明すれば、闘えば闘うほど強くなり、長引けば長引くほど癒え、拡大すればするほど成長するというのが我。

言うなればだ——

「——こと闘争において、我、無敵なり」

（ガッハッハハハハ！！！！復活しおったわ！！）

（俺の蒼に吞まれても染まらない……美しくないぞ貴様）

炎と水が言った通り、我の器は闘争前の状態——完全に再生していた。

否、ただの再生ではない。

我が四肢はより太く硬く、我が翼はより強くしなやかに、我が頭

脳はより明晰明瞭に。

我は強くなっている。

闘う前より。力がより満ちている。

「で、如何にする？ 闘争を続けるならば何時までも付き合っぞ？」

引くか続けるか？

我の言葉と共に、竜たちは咆哮をあげ己の世界を拡大させる。

炎獄はさらに赤く紅く緋く朱く——世界を炎の色に染める。

水獄はさらに青く蒼く碧く藍く——世界を水の色に染める。

（（是非もなし！……！））

「そうか、では————続きを始めようか！」

闘争は自然の摂理。

闘争は自然の真理。

ゆえに、これはこれで”良い”のだ。

とおいとおい、おおむかし。

まだ、カミさまやどつぶつ、にんげんやようかいもウまれていな

かったジダイのおはなし。

このホシには、とってもオオきなアカいリュウとアオいリュウがイマした。

アカいリュウとアオいリュウはずっとずっとハナれてクラシてましたが、あるヒ、ササイなコトでケンカをハジメてしまいました。

そのケンカはすんごくハゲしくて、ホシがぐらぐらとふるえるほどでした。

そしてまっクロなのかまっシロなのかワカンないサンボンくびのリュウがナンだかトチュウでケンカにサンカ。

ミツドモエのオオゲンカになりました。

アカいリュウもアオいリュウもとってもつよかったのですが、サンボンくびはちーとでした。

それから、なんだかかんたあつて、なかなかおりして。
いまのセカイがウまれました。
そんな、おはなし。まる。

「チルノちゃん、なにしてるの?」

「あ、大ちゃん!」

「……それって絵本?」

「そうよ! あたいが書いたの! 凄いでしょ?」

「ふわーチルノちゃん凄い！ 絵本なんて書けるんだあ」

「ふふん！ あたいつてばやっぱり天才ね！」

「凄い凄い！ でも——こんなお話聞いたことないけど？」

「おかーさんに聞いた」

「チルノちゃんのお母さんって物知りなんだねー」

「おかーさんは凄い！ ……そだ、大ちゃん今から暇？」

「うん」

「じゃさ、今から一緒に遊ぼー」

「絵本はもういいの？」

「もう飽きた」

「……えーと、じゃあなにして遊ぼつか？」

「決まってるじゃない！」

「「弾幕ごっこよ（だね）！」「」」

幻想郷縁起なキャラ解説（前書き）

呼んでそのままキャラ紹介。

幻想郷縁起のようなノリで書いてます。

出てない設定も混ぜてますが、まあ未来でのお話といつことず。

幻想郷縁起なキャラ解説

一匹怪獣大戦争、起源の闘争

闘獄世界 T o g o k u - S e k a i

種族：????

能力：あらゆる闘争を司る程度の能力

危険度：極高

人間友好度：最高

遭遇頻度：極高

主な活動場所：世界中（ 1 ）

普段は幻想郷にほとんどいない人（怪獣？）。見た目は巨大な三首の龍（竜）である。

非常に長く生きているらしく、竹林の薬師曰く私たちの寿命と比べるほうが間違いであるらしい。

能力は あらゆる闘争を司る程度の能力

広義で 闘争 に分類されるあらゆる行為に関与できるらしい。

本人（？）は自分の肉体強化にほとんど能力を割いているが、そんなことしなくても十分強い。

意図的に戦争を引き起こすことも出来るらしく、外の世界で起きた大きな戦争や月面戦争にも関わっているらしい。

非常に応用の効く能力であり、外の世界では戦争や闘いの神として信仰されている（ 2 ）

幻想郷では特に鬼の間で重宝されている。主に対戦相手を用意し

てくれるから。

他にも運動競技や受験戦争もカバーする辺り実に都合がいい。

基本的には温和でも冷酷でもない中庸な性格だが、間違っても彼を怒らせないほうがいいだろう。彼を怒らせるということは歴史が記憶する闘争の全てを相手にすることになるのだから（3）

ただ、弾幕ごっこは苦手なようだ（4）。

「し、ししょーってば……さいきょーね。」

——何故かぐつたりした氷の妖精

「いやー兄ちゃんの連れてくる人間は強いのはっかで嬉しいねえ」

——呑んだくれの小さな鬼

「いやほら、私も一応は戦神だけど、あの方はちょっと苦手ですねえ」

……」

——妖怪の山の神社の神様

「弾幕ごっこなら勝てるわね」

——紅白の巫女

- 1 戦争・闘争がある場所なら何処にでもいる。
- 2 曰く、こんなはずではなかった。
- 3 昔彼を怒らせた魔法使いがいるらしい。
- 4 さすがにごっこ遊びまでは範囲外だそうだ。

怒れる起源の炎、地獄の灼熱動力炉

炎獄世界 Engoku - Sekai

種族：????

能力：炎獄界を生まだす程度の能力

危険度：極高

人間友好度：普

遭遇頻度：低

主な活動場所：火山地帯、地底深く、地獄（ 1 ）

火山地帯や地底の奥底にすることが多い、棘々した赤黒い巨龍（竜）。

非常に長く生きているらしく、妖怪の賢者曰く「私はあそこまで歳くつてないわ」

起源の古い自然の権化——つまりは妖精の同類である。

能力は 炎獄界を生まだす程度の能力

昔棲んでいた環境を自分の周囲に生み出すという能力らしい。一度使つと当人は無事だが周りは消し炭になる。

焦熱地獄とどっちが熱いのだろう……と思つていたら昔は焦熱地獄をやつていたらしい（ 2 ）

豪快な性格かつ頭が空っぽなせいか子供に懐かれやすい（ 3 ）。

小妖怪からも慕われているあたり人望はあるようだ。

水の竜とは仲が悪いらしく事あるごとに喧嘩している。

弾幕ごっこは苦手。

「背中の上でお肉が焼けるよー」

—— 無駄に楽しそうな地獄の鴉

「もう二度と地獄に来ないでほしいです」

—— 楽園の裁判長

「やめて来ないで紅葉が燃えちゃうー!!」

—— 秋の神様（姉）

「ナイフが刺さるところか融けるなんて反則じゃない？」

—— 紅魔館の瀟洒で完璧な従者

- 1 今は地獄から追い出されたい。
- 2 旧地獄か新地獄かは知らない。
- 3 子供たちのためにわざわざ火力を落としてくれる。

毒のある海、荒々しい曇天

水獄世界 S u i g o k u - S e k a i

種族：????

能力：水獄界を生みだす程度有能力

危険度：極高

人間友好度：低

遭遇頻度：普

主な活動場所：空の上、湖の底、海（ 1 ）

空や湖に棲んでいる長身の蒼黒い巨龍（ 2 ）

例によって例の如く非常に長く生きているらしく、里のお寺の魔法使い曰く「あの、わたしそんなに老けて見えます?」

能力は 水獄界を生み出す程度の能力

昔棲んでいた環境を自分の周囲に生み出すという能力らしい。なんでも天候を雨模様にしたり、海までも創ってしまうそうだ。

ただし天候は嵐のほうがよくぽどマシな程度に荒れ、海は猛毒なのだそう。

芸術品を集めるのが趣味らしく、大昔の像や装飾品、外の世界の絵画や書物などを集めるためちよくちよく結界を抜け出している（

3）

わりと気ままに幻想郷を回遊しているが、妖怪の山の天狗たちからは苦手意識を持たれているようだ（ 4 ）

火の竜とは仲が悪いらしく、事あるごとに喧嘩している。
弾幕は芸術と言い張る。

「一度弾幕について語り合ってみたいわね」

——七色の人形使い

「花が枯れるから相手したくないわ」

——笑顔が怖い四季のフラワーマスター

「コンパロコンパロ」

——毒のあるお人形

「今度外の魔道書見つけたら見せて欲しいぜ」

――黒白の魔法使い

1 幻想郷には海がないため関係ないだろう。

2 幻想郷で語られる龍神と姿かたちが似ているが、関係があるのだろうか？

3 毎度結界を修復させられて隙間妖怪の式が泣いていた。

4 流石の天狗もその日は飛べないらしい。

第一章 原始の鼓動（前書き）

既におかしな歴史。おかしな生物。

今回は、モンハンにいたなーとか考えるとわりとイメージわくかも？
星の回転数がおかしい？ 知らんよ。

感想が来たから張り切ってしまった。

第一章 原始の鼓動

幾億回星が廻ったのか。

この表現も少々くどいと言わざるを得ないが、時間という概念がまだ大多数に知られていない以上、時を具体的に表現するのは無粋。

炎と水との闘争から幾億回か星が廻った。

あの闘争を境に世界は急速に変化していた。

灼熱の大地は表面上は静まり地下深くへと潜り去り、死海の猛毒はなりを潜め荒天は晴れ陽光が射す。

高温だった星の表面温度がほどよく下がった頃には、我らとは発生プロセスは違うものの、新しい生命が生まれ始めていた。言ってしまうえば単細胞生物という奴だが。

こいつらについては割愛させてもらおう。

何故か？ なぜうようよ動く程度しか出来ん奴らのことなぞ説明しなければならぬ？

さて……次に登場したのは植物やらなにやらだが、こいつらについても同様の理由で割愛だ。

ではどのような生命を語るのか？

それは単細胞生物や植物が登場してから、何十億回以上も星が回転した後には登場した連中。

それは我らとよく似た姿をしていた。

我らほどの頑強さや特異な能力こそ持ち得ていないが、今のこの星の環境に最も適応し、食物連鎖の上位を占めていった種族――

――恐竜だ。

恐竜が生まれ繁栄していった世界。いわゆる恐竜時代という奴だ

な。

まあ最も今の世界で繁栄していたのは原初の虫や植物だったが、能動的な活動力を最も誇っていたのは連中であつたのだ。

ただ……最近になっておかしなことに気付いた。

と言うのもだ、我の中の知識と矛盾した生命が多いような気がするのだ。

恐竜というのはもっと原始的な捕食活動をばかりしていたと、我の中の知識ではそう思っていたのだがあれは……実際に見たときの衝撃はなかなかに計りしれん。言うなればショック！ な状態だ。

では記憶を、遡ろう――

星の巡りがおおそ十億回転ちよつとぐらい前の頃。

最初に生まれた連中はまだ良かった。普通に四足歩行し、陸上や水中でのどかに普通の食物連鎖を成り立たせていた。実に普通。普通過ぎてつまらんほどに。

まあ一部、火ブレスとか水ブレスとか吹き出したりと、今考えるところとあかしな連中もいたが、それでもまだ自然の生命だった（はず）

星の巡りがだいたい五億回転くらい前の頃。

大型の肉食性の連中が現れた。我の持つ知識から、この頃に改めて恐竜と種族名を定めて観察を続ける。この頃には大型のものは陸上では二足・四足。水中では水に似た姿を持つものが増えてきた。

中には翼を獲得して大空を飛びまわるものも現れ始め、生息領域

がさらに拡大していたようだ。その頃の記憶とえば、よく翼竜が空中回遊している水に目障りとはかりに射ち落とされている光景が思い出される。

思えば……この時代に翼竜なんてもう誕生してるんだっけ程度には考えておくんだったか？ いやそれぞれの出現時期なんぞ我は知らんが。

ブレスを吐く連中については見て見ぬふりをしていた。

星の巡りが、まあたぶん百万ぐらいの単位の頃。

小型の恐竜が増えてきた。

小柄な体格を活かした俊敏性と、数十匹単位での集団を作っている。

それはいい。

単体では大型種に敵わないのだから、群れを作って行動するのは理にかなっている。

ただ――

ひゃっはー！ 獲物は捕食だ！！　と言わんばかりに大型の肉食恐竜に飛び掛り集団リンチ。

↓ 舐めんなチビども！！　怒る大型恐竜が炎ブレスを連発して反撃する。

↓ だが数には勝てなかった様子。ごちそうさまでしたー。

と、そんな光景を目にした。

どうにも、大型の連中は奇妙な進化を遂げているようだ。あそこまで露骨に火なぞ吹かれるようになるとは。まあ結局喰われたが。

しかしはて……こんなに早く小型種は繁栄していたのだったか？

星の巡りがおよそ十万万回単位くらい前か。

ひゃっはー獲物がやってきましたぜ！ よし捕食だ！陣形を作れい！！ 他の連中より大きな個体……群れのボスなのだろう個体が先頭に立ち指示を出している。

↓ ああん？ ここをわいの縄張りやって知つとんのかゴラあ！ 獲物はどうやら翼竜のようだ。まずこの時点からおかしい。小型種が翼竜を狙うか普通？

↓ 空を制するのは貴様らだけではない！ と言っていたのかは知らんが、ボスが強力な脚力でジャンプし、空中を飛びまわり優位に立って油断していた翼竜へ蹴り一つ。落ちる。

↓ ひゃっは！ かこめかこめー！！ 落下地点に陣取っていた他の連中が落ちた翼竜をリンチ。うまうまごちそうさまでしたー。

「待て」

明らかに常識的におかしなものを見た気がする。

「解せぬ」

何故に恐竜が地上10メートル以上もジャンプする。しかも垂直飛び。加えて蹴り。

他にもおかしな点はあった。

狩りはいいのだ、狩りは。

だが陣形？　なぜそんなものを使える？

知能が高いどころのレベルではない。恐竜の域を超えている。いやまあ、いまさらだが。

小が大を制し、集団が個を制す。もはや大型恐竜は頂点の立場から転落していた。

他人事とは呼べんな。いや大の立場として。

この奇妙な進化はまったくもって理解しがたい。だが、闘獄世界としての私の意見からすれば喜ばしい。これぞまさしく弱肉強食。食物連鎖。あるべき正しい自然のサイクル。

それが本来辿るべき歴史からどれだけ外れていようと、これは正しいのだ。

そして……現在に至るわけだが。

「お頭ー！　獲物がきましたぜ！」　「大物でさあー！」

（ガッハハッハ！！　野郎どもとつとと支度しなあつー！！）

「今夜は翼竜鍋かねえ」　「焼き肉も捨てがたし」

狩りの描写？　あっさり終わったから無いな。
ひゃっはー！　……翼こりこりお肉うまうまー。翼竜南無ー。こんな感じだが？

さて——とうとう小型恐竜が二足直立歩行して普通に会話し始めたぞ。まあ言語は知らんが自動翻訳で我大助かり。

手にはなにやら槍つばいのやら斧つばいのやらを持ちだして、他の恐竜の皮やら鱗やらから作ったのだろう原始的だが文化的な服やら装飾品やらを身にまといている。

あと翼竜鍋ってなんだ？ 美味しいのか？ と言いか鍋なんてあるのか？ いやむしろ一部がもう摘み食いしてるんだが？

……流石にここまで来ると我でも危機感を覚える。
幾らなんでも進化速度が速すぎる気がする。

あと、どうでもいいが物凄く聞き覚えのある声——と言いか
鳴き声が聞こえていたが。

「お頭とは——」

（ガッハッハッハ！！　ワシだぁ闘獄の！！）

「やはり、炎か」

大体予想通りだが、炎だった。

お頭か……つばいっちゃぱいが。うん……似合いすぎだ。お頭（笑）

で？　なにがあった？

（だいぶ昔に生意気にもワシに襲いかかってきよったのおお！
適当に蹴散らしてたらこうなっておったわい！！）

どこのチンピラだ兄弟？

絡まれてぶっ飛ばして部下を作る……王道と言えば王道だが。
しかし随分と久しぶりだ。

水は何だかんだいって大体空を見れば居ることが多かったが、炎は普段は地下か火山地帯しか居ないからな……久しぶり過ぎて思わず話しこんでしまった。

……で、気付けば直立二足歩行の小型恐竜——面倒だから今後は竜人と呼ぼう——に囲まれていた。我の事を警戒してか、手には武器を持ち一定の距離を保っている。

さすがにすぐに襲いかかるような能無しではないようだ。

「——、お頭っ！！ そちらの御方はご友人ですかい！？」

（ワシの兄弟じゃあ！！ 今夜は歓迎会じゃあ準備せいつ！！）

「へえ兄弟！？ そ、そいつは失礼しやした！」 「野郎ども！
今夜は宴じゃあ！」 「「「だらっしやああ！！！」」」

「さささ、此方へ。あてらの巢までご案内いたしやす」

随分と物解りがいいな。

まあ炎の部下（？）だと言うなら、あれの特異性は理解しているのだろう。なら炎を普通に会話する我との関係性は限られてくる、と。

そこまで一瞬で分析したかは知らんが、やはり大分知能は高いようだ。

（ガッハッハ！！ 久し振りだからなあ、歓迎しよう！！ 盛大になあ！！！！）

相変わらずの豪快な笑い声……と言う名の咆哮。それに合わせて甲殻の隙間からちりちりと火柱が……おい部下が近くにいますぞ？
これは流石にどうかと、ふと竜人を見やる。

「はい？ 如何されましたかな？」

燃えてないどころか、普通に話しかけてきた。
いや、正確には火の粉が竜人を避けるように散っていた。
炎が何かしたわけではあるまい。あれにこのような絶妙なコントロールなど出来るわけがない。絶対に。

ましてや……よく見れば竜人全てが大なり小なりの淡い光で表皮を覆っていた。どうもあれで防いでいるようだ。これは――

「これは……こ奴ら能力を持っているのか？」

おそらく、否、十中八九そうなのだろうが。

竜人の巣まで着いて行くその片手間に、さり気なく一番近くの竜人の性質を調べてみる。

能力は闘争に関連するからな、こんな技能も身につけたのだ。
…決して、思いつきと言うわけではないぞ。

ふん……我は誰に言い訳しておるのか。

「なにか不手際でもありましたかの？」

「……否、なんでもない」

いかにいかに。感じがいいなこ奴ら。

さて——どんな能力を持っているのやら……。

——、
気を扱う程度の能力

……うむ——誰か紅い中華な小娘を呼んで来い。ああ……い

やまだ生まれてはいないのか、この世界では。

しかしこれはどういう事なのか？

やれやれ……全くもって、おかしい事になっているようだ。

第一章 原始の宴・虚無よりの胎動（前書き）

まあ別に話が進んでるわけでもなく。

どんどん東方から離れてないか、と言わないで。
恐竜時代はさくつと終わる予定……のはず。

第一章 原始の宴・虚無よりの胎動

活発に活動する火山地帯。

活火山の連なる山脈の一つ——一際大きな火山の中腹に彼らの巢はあった。

「到着いたしやした、ここがあつしらの巢でやす」

「ほう……これは」

そこは巢、などという単語に相応しくないほど整っていた。もはや集落と呼んだほうが適切であろうと思うほどに。

もつとも並みの生物では暮らすことなど出来ないほどに、そこは同時に苛烈な場所でもあった。

何故ならばそこは火山の中に造られた巨大な空洞。

すぐそばには溶岩の流れる紅の河があり、生える植物はみな有毒。空気すら高温であり水の気の一切が存在しない。

紅河の民——そう彼ら竜人は自らの事を呼んだ。

この雄大に流れる紅色の溶岩流に居を構える一族なのだと。

「まあ、炎獄のお頭にお仕えしてゐるって意味もあるんですけどね」

「さよか」

だが、よくもまあこんな場所に巢を作ろうなどと考えたものだ。外敵の侵入はなかるうが、逆に自分たちの生活も苦しそうなものだがな。

と、言うかだ。

炎の世話が一番面倒そうなものだが。なんだ、まあ色々とだ。

「苦勞してそうなものだなあ」

「なにをおっしゃいやすか！ あつしら一族がこうして生活してられるのはあの方が居てこそなんですぜ！？」

ほう……

「頭のおかげでありますよ。あの方がこの燃える河の流れを操って、あつしらが棲みやすいようにって巨大な穴まで造っちまったんださ」

「もちろんそれだけじゃありやせんぜ！ お頭がこの巢の近くに陣取ってくれてるおかげで、巨大で凶暴な連中もビビって近づいてきやしません！」

「お頭はあたしらの守り神みたいなもんなんですよ！」

意外だ……

「炎も炎で、色々と考えているのだな」

起源の兄弟に対して失礼な物言いか。兄弟だから別に構うまい？
しかし竜人の炎に対する信頼は非常に高いようだ。

そう、我が思う以上に彼らは炎に対して忠誠に近い感情を有している……気がする。

「さささー!! 宴の用意が出来やしたよー!!」

「翼竜鍋も用意いたしやすぜー!!」

「あるのか……」

さあ—— 原始の宴の始まりだ。

酒は、まだこの時代はない。

皆、思い思いに狩猟で狩った獲物の肉を喰らい、談笑し、中には踊りを披露する者もいる。

溶岩の赤い薄明かりが照らす洞窟内は、今を生きる生命の賛歌が溢れている。

その様子は実に生き活きとしている。

この弱肉強食の時代には考えられないほどに、否、生きるか死ぬかの時代ゆえに皆、楽しむ時は盛大に楽しむのだろうか。

我はと言えば、炎と共に竜人の輪から外れた場所で語り合っていた。

我らの巨体では炎だけならともかく、我と揃ってでは狭く苦しうてしょうがない。

久方ぶりの兄弟の会話は、思ったより弾んでいた。

まあ炎のほうから積極的に話してくるのだが。我はもっぱら聞き手役だ。

もつともその内容と言えば、どここの火山が一番良かったとか、最近はどこも水っ気が多くて気に入らないとか、最近火力が上がって来たとか——そんな取るに足らない話ばかり。

が、まあそろそろ別の話題を振らねば飽きる。我が。

「でだ——炎よ。問うが、何故に彼らと共にいるのだ？ お前は群れるのは嫌いなのだとばかり考えていたのだが」

なにせかつての起源闘争の後でさえ、我や水とつるむことなく自らは炎獄の世界に閉じこもっていたのだから。我は水とは何度か合っているが、炎とはあの闘争以来ほぼ合っていない。

てつきり、独りでいるほうが好きなのかと思っていたのだが……。

（ガハハハ！！ 気に入ったからよおお！！）

「気に入った？」

（ガッハッハハハ！！！ おうよ！ なにせあいつら……まあ今のじゃなく随分と前の連中の話だがよお、さっきも言ったが生意気にもワシに挑みかかってきてよお、そんなときゃあ容赦なく蹴散らしてやったんだがよ、なんか知らんが目の敵にされてなあ！！）

ほう……目に浮かぶようではないかその光景。

だが、よく挑もうなどと考えたものだ。体格差は言うまでもないが、明らかに他の恐竜なぞとは一線を隔す炎という存在に。

勇敢を通り越して、もはや蛮勇にしか感じられねがね。

（ガッハッハ！！ 言つな言つな！ ま、それから何回か何十回か

忘れたがよお、蹴散らしても蹴散らしても諦めないのよこいつらがまた！！ しかも闘るたんびに色々と仕掛けてきおってなあ！！）

これがまた楽しくてなあ！！ と、豪快に笑いながら大型竜の肉を喰らう炎。

よくもまあ…… 思った以上に気が長かったようだな炎は。

我の中では一度襲いかかられたら一族全員皆殺しみたいな印象があつたのだから？

（言ってくれおるなお主は！！ まあ何だかんだで闘ってるうちに、連中ワシの炎を何か知らんが防げるようになってきてのお、で、最終的にはわしの器に傷を入れられるまでになったのよ！！！！）

一際楽しそうに笑う炎。

よほど愉快だったのだろう。まあ当然か、炎獄の世界で生まれ、我ら起源の兄弟以外に己らと並び立つものはなかったのだ。

それが炎にはとても愉快で、喜ばしいことだったのだろう。

だが我にはそれ以外に気になる言葉があつたのだが。

（炎を防げるように…… 進化の結果手に入れたのか？ あるいは元から能力を開かせる素養を持っていた？）

気を操る程度の能力、竜人の全員が持ち開花させている能力。進化か進歩か、どうやって彼らは能力を持つようになったのか。あるいは、

（炎と—— 我ら起源種と関わった結果、能力を得たのだとしたら？）

確かめてみたいところではあるが、あいにくとそのように都合の

良い連中と我は関わったことはない。

第一やってみてそれが徒労だった場合を考えると面倒ゆえ。

こんな時ばかりは、炎の考え無しな頭が羨ましくなる。

これが水だったならば、己の苦労を気にすることなく淡々と実行するのだろうか、な。

（ガッハツハ！ まさかあんな小さい連中にワシが傷つけられるなんて思ってもいなかったからの！

気になってしまっただけなあ、思わず連中に着いていってみたいと思っただけよ！ で、まあ色々ワシや連中が暮らしやすいようにやってたつー感じだわな！！）

なんと強引な。

（ま、こんなところかのワシと連中との出会いっつーのは！！ しかしだ、連中の気質はワシと合っておったみたいでなあ、ついつい長い間こうして一緒にいるわけだが……主も嫌いではなからうよ！ そういう連中は！！）

「ふむ、確かにな」

闘争を自然のものとし、闘争を生きる手段とし、必死に生き闘い続け死ぬ。

それを本能とし、さらに文明とすることを実行する種族。

ああ……確かに、嫌いではないな。

（ガッハツハツハツハ！！ それになあ——独りはもう飽きてしまっただけなあ）

「ああ、それは——」

語るまい。

語れまいさ。

炎のことを独りでいることが好きなのだろうと、我らのほうから会いに行こうともしなかったのは我らだ。炎の心を理解せずに勝手に放っておいたのは我ら。

なにも語れんわな我には。

（ガッハッハッハッハ！！　おかげで今は飽きぬ日々が続いておるわい！！）

「———そうか」

まあ、やっぱり何も考えていないのかもしれないが。

それに炎が自ら解決しているのだ、それについて今更我がなにか語るのは無粋。

「とは言えだ———」

ああ、とは言え———知識だけの酒が、いまは無性に恋しいな……。

あ………翼竜鍋喰い損ねた……。

虚空。

虚無。

深淵なる宙。

瞬く星々の輝きすらも呑みこまんとする絶対の暗黒領域。

久遠の彼方より、災いの影が一つ。

それは巨大であつた。途方もなく巨大であつた。

それは星になれなかつた星。

それはかつて星であつた星。

生命を失つた、星の亡骸。

幾億も重なりあう星の墓標。

それは” ■ ■ ■ ■ ■ ”、星の屍骸を纏うもの。

星宙の海広くとも” ■ ■ ■ ■ ■ ”以上に虚で無であるものは無

し。

” ■ ■ ■ ■ ■ ”は目指していた。

” ■ ■ ■ ■ ■ ”はただ目指していた。

” ■ ■ ■ ■ ■ ”はただただ目指していた。

それは——ただひたすらに、”星”を目指していた。

理由は忘れた。

なにかとても重要なことだっただろうか、あるいは特に大した理由でもなかったのかもしれない。

だが、それでも”星”を目指すことは” ■ ■ ■ ■ ■ ”にとっては至上命題。生命の証だったのだ。

星を目指して、目指す星を求めて、彷徨い続けた。

彷徨って、彷徨って、彷徨い続けて……

そうして彷徨い続けて幾星霜、幾千幾万幾億の銀河を渡って来た
だろうか。

もはや時すらも忘却の彼方に。
だがそれでも”■■■■■”は求め彷徨い続けている。

”■■■■■”は求め探し続けている。

そうして見つけたのだ。
まばらな色の星だ。

青いような赤いような、緑のような鈍色のような。
若い若い——”■■■■■”よりも若い星。

”彼女「星」こそ、”■■■■■”が求める星だろうか。

ああ、きっとそうだろう。

ああ、きっとそうなのだろう。

今度こそ間違いなく、今度こそ”■■■■■”が目指し求め続
ける星なのだろう。

ああ、されど

——その大地に纏わりつく一切の生命は不要なり。

ゆえに——宇宙　よ我が意のままに。　宇宙　よ我が命に従え。

” ■ ■ ■ ■ ■ ” に応えて動き出すのは星の亡骸。
大なる凶星と従属せし死せる星々。
その数は数え切れないほどに。

宇宙　よ” ■ ■ ■ ■ ■ ” の意のままに、星の命を蹂躪せよ。

しかる後、” ■ ■ ■ ■ ■ ” は訪れよう。

星の命の終わりを告げるために。

外章 それは幻想の大地を駆け抜ける一迅の

（前書き）

うん、なぜか本編じゃなく外伝なんだ。
しかもこのタイミングで。

美鈴がメイン……かな？

あと地味にオリキャラでます。

外章 それは幻想の大地を駆け抜ける一迅の――

「頑張るねえ」

幻想郷の一角には霧の湖と呼ばれる場所がある。

その名前の通り、常に霧に覆われており、酷い時には一寸先の視界すらおぼつかないほどの霧が発生する湖だ。

そんな湖だが意外と人の行き来は多い。

釣りを楽しんだり、散策を試みたり……色々と楽しみ方がある。

まあ、妖怪の存在を畏れなければの話ではあるが。

ちなみに、僕も例外の一人だ。

「ふっ！ はっ！ せいっ！」

そんな霧の湖周辺の妖怪を畏れないものが此所に一人。

紅の髪に緑色の服、特徴的な龍の字のバッジを付けた帽子をかぶった、一人の女性。

見るもの全てを魅了するかのような、流れる拳の舞。

外の世界の大大陸で脈々と受け継がれる、ある流派の型だそうだ。そんな彼女に僕は声をかける。

「美鈴姉……まだかい？」

「しっ！ ……もう少しだけ……てあ！ 待っててね……ちえいっ！……」

「……………」

彼女——紅・美鈴は、こうなると長い。

この間はちょっと、という言葉に騙されて一時間以上も待たされた。

「本当にっ……………！ あとちょっと……………だから……………っ！！」

「はあ……………わかったわかった。好きなだけやるといいよ」

まあ、彼女には基本逆らえないし、逆らう気もない。
日頃の恩もあるし、なにより今の彼女はとても生き活きとして
いる。

門番なんて仕事をしてるから身体がなまってストレスでも抱えて
るんだろうか？

いや、どっちかって言えば黒白の魔法使いが原因かな？

ん？ …… ああ、名乗るのが遅れたね。

僕の名前は雷火。一迅・いちじん・らいか雷火と言う。

なあに、ただのしがない妖怪さ。いや……………妖獣かな？ ま、ど
ちでもいいよね。

結局、彼女の練武が終わるのを待っていたら、時刻は昼をとうに
過ぎていた。

なんやかんや言って今日は結局三時間も待たされた。

「美鈴姉が誘ったんだろうに」

「あはは……ごめんなさい」

謝ればすむ問題じゃない。

と言いたいけれど、まあいいさ。この後は好きなだけ僕に付き合ってもらうんだから。

……あ、でもお昼ご飯が先ね。

「それじゃあ、そろそろやりましょうか」

「そだね」

やりあう。鬭り合う。

これが僕が美鈴姉に誘われた理由。

朝から随分と待たされたんだ、思う存分暴れさせてもらうよ？

「ええ、好きなように。そもそも手加減なんてしてたら、修行になりませんしね」

「まあ美鈴姉相手に手加減なんて出来ないけどねー」

事実だ。

彼女は弾幕ごっここそ苦手だが、自らの領域である徒手空拳においては無類の強さを持つ。

まあ……僕も弾幕よりそっちが得意なわけだけど？

「それじゃあ——」

「——いくよ——」

始まりの合図はない。

これまで何度も繰り返してきた。
相手の呼吸も熟知しているほどに。

「しいっ！！！」

剛拳。そう呼ぶのが相応しいその一撃は当たれば巨岩ですら粉碎
しかない凶悪な拳。

でも僕はそれを畏れない。

畏れる必要がないから。

「遅いよ」

いかに一撃の威力が大きくとも、回避してしまえばそれまで。

当たらない拳なんて畏れる理由はどこにもない。

美鈴姉もそれは分っているようで、最初の一撃がかわされたのを
確認する前の、次の一撃を繰り返してくる。

「おっとつと」

拳撃と蹴り技の乱舞だ。

並みの妖怪なら仮に最初の一撃をかわせても、次で葬られていた
だろう。

それだけの速度と威力を持って美鈴姉は僕に攻め入ってくる。
でも、それでも――

「当たらないわね、流石にこの程度じゃ……」

「当然だよ」

どんな一撃も僕には当たらない。掠りもしない。

別になにか特別な技術や能力を使っているわけじゃあない。ただ単に、遅いだけ。

僕の中から見れば、美鈴姉の一撃一撃は軽く余裕を持ってかわせる程度の速度だ。

なぜなら僕は――

「雷獣だからね」

「雷の速度の思考加速と回避能力……相変わらず馬鹿にしてるわよね？」

「種族的な特徴だものですか？」

そこからは、千日手。

ぶつちやけ予想はしてたんだ。これまで何度もやってきたから。

美鈴姉の攻撃は、その全てが僕には当たらない。雷の速度で移動し続ける僕を捉えるには、彼女の速度は遅すぎる。

けど逆に、僕の一撃も彼女には当たらない。

正確には当たるけれども有効打にならない。いかに雷の速度で攻撃しようとも、彼女は己の能力で自身の肌の表面にセンサーのようなものを張り、的確に僕の一撃を迎撃する。

美鈴姉は僕のことを反則的と言うけれど、そんな僕の攻撃を完璧に防ぎきる美鈴姉も大概だと思うのは、きっと僕だけじゃあないはずだ。

そして――

「じゃ、今日はこれで最後にしようか？」

「そうね。わたしも次で最後。代わりにとっておきを見せてあげる」

楽しみだよ――僕はその言葉を美鈴姉に飛ばして加速する。

雷の速度。光の速度。この身を雷そのものへ。

これが僕の本日最後の一撃。

「雷迅　一迅雷火」

スペルカードルールに則って――ってわけじゃないけど、僕が最も信頼する、僕の名前を与えたその技を繰り出す。

内容は簡単。

僕の最大速度……最大雷速で突進するだけの技。けど当然のことながら。

「……しい!!」

簡単にかわされた。

美鈴姉程の強者ならこの一撃は簡単に回避できるだろう。なにせ直進するだけだから。

だけど、

「まず、一撃！」

「最初の一撃は、ね」

余裕を持つて回避できるのは最初の一撃だけだ。

直進した先の木を雷で焼き払って……僕は”諦めることなく”強引に進路を変えて、もう一度美鈴姉のもとへ。

「次、いくよ!!」

「……………!!」

またも外れた。

今度は空へと飛び出してしまった。一瞬で雲を突き抜けて、それでも僕は”諦めず”に地上へ向けてまた突進を再開する。

「三撃目……だよ!!」

「くう……!!」

今度は掠った。でも掠るだけでも痛いよね？ なにせこの速度、加えて雷の熱量だもの。

まだ終わらない。

まだまだ終わらない。

四撃、五撃、六撃、七撃……………数えきれないほどの必殺の往復。

「はあ、はあ、はあ……」

「流石は美鈴姉、よく耐えるね」

満身創痍といった様子——だが、そもそもこれだけの攻撃を繰り返して、まだ直撃を食らわない彼女にこそ恐怖を覚える。

だから、焦ってしまったのかな僕は？

「次で最後だよ！！ 美鈴姉え！！！！！」

狙うは胴体。

一撃で、彼女の戦闘力を奪いさるために、避けようがない機動で彼女目掛けて本日最大の雷を纏って突進する。

どうやっても避けられない。小細工なしの最大攻撃。だからこそ

「だからこそ、貴女も避けれない——！！！！！」

美鈴姉にぶつかるその瞬間、目の前に壁が出現した。

虹色の壁だ。

それは美鈴姉の 気を操る程度の能力 で生み出されたのだろう、虹色の気の奔流。

普段ならぶつかった所で精々が少し痛いですむ程度。

けど今の僕は雷速で、

「—— う いったあ ああああ あああい！！！！？？？」

速度×質量＝破壊力…… まあ気の壁に質量があるのかなんて知らないけどさ、現に僕の意識は一瞬途切れて……………

「捉えたわよ？」

「—— ふえ？」

――、撃符「大鵬拳」！！！！

気付いたら僕はお空の星になってました。まる。

「それじゃ、今日はここまで！」

「……………うーん」

僕はぼんやり気味の脳みそで今にもぶっ倒れそうなのに、朗らかにそう美鈴姉は笑う。

元気あるなあ……。

美鈴姉はもう起き上がって軽く身体を伸ばしている。

気を操る程度の能力　で身体の気の流れを操って回復したようだ。

僕の雷で火傷した傷もすでにかさぶた程度になっている。

そのかさぶたすら無くなったところに、彼女はまたストレッチだとはかりに型の舞いを踊る。

休む時間すらも惜しいのだと、そう言わんばかりに。

普段、仕事場や人里では見せないが、美鈴姉の強さへの欲求は人一倍強い。

僕が初めて彼女に出会った時も、この霧の湖で一人修練していた。

どこか張り詰めたような表情で。
なんだか放っておけなくてさ、話しかけたんだよね！。

「あはは……まさか見た目こんな可愛い女の子に、辛くないの？
って聞かれるとは思いませんでした」

「まあまあ」

でもさー

「今だって十分強いのに、そこまで頑張る理由が？」

「あります」

思い出すのは幼き日々より寝物語に紡がれた、紅河の一族の昔語り。

いまなお色褪せぬ黎明の時代。

遙か過去の原始世界を駆け抜けて、生死をかけた闘争を常とした時。

炎の加護と共にあつた誇らしきその歴史。

外より堕ちたる禍津星の降臨。

そして……、一族の罪。

わたしたちは——にげたのだ。

「わたしたちの宿命なんですよ。強くなることは」

よわさはつみだ。つよくなることは、わたしたちがかした、わたしたちへのばつなのだ。

今度こそ、炎獄の御方と肩を並べて闘えるように。

今度こそ、御方の足手まといにならないために。

今度こそ、共にかつて約束した勝利の美酒を味わう為に。

美鈴姉の顔はどこか遠くを——ここじゃない何処かを幻視しているようで——放っておいたら、どこかに行ってしまうそうで——

「あ、でも勘違いしないでね！？ 確かに強く在るべしっていうのは一族の悲願でもあるけど、私自身の願いでもあるんだから！」

「へえ初耳。美鈴姉の願いつて？」

それは……と言いつつ淀む美鈴姉。

そこで口籠らなくても……気になるから言っちゃいなよー。

そして——、笑わないでね？ と念を押す美鈴姉。その顔はなんだか赤い。

「その、ね——夢なんだ。物語に出てくる赤い炎の竜と一緒に闘うのが」

まさしくそれは夢だ。

お話しの中の英雄に憧れる行為。なんとも乙女ちつくな想い。
お伽噺に焦がれる気持ちは、でも、僕は馬鹿にはしない。

「笑わないよ、美鈴姉がその夢のためにどれだけ修練を重ねてるの
かも知ってるからね」

「ふふ……ありがとう雷火」

それに……

「その願いはもうすぐ叶うよ。僕が保証する。約束するよ、僕の能
力にかけて」

「雷火の能力…… 諦めない程度の能力 の持ち主に言われると心
強いですね」

あ、なんかその顔信じてないって表情だ。
嘘じゃないんだけどなあ。

「あはは、ごめんごめん！ でも……嬉しいよ。ありがとう雷火」

「……はあ、許してあげるよ」

「えへへ」

それじゃ少し早いですがお茶にしましょうか？

僕はミルクティー。熱くない奴ね。

はいはい、猫舌ね相変わらず。

——そんな幻想郷の昼下がりに。

そして逢魔ヶ時。

外の世界風に言い直せば、午後十八時。

昼と夜との境目であり、「誰そ、彼」という意味を持つ。

まあ言ってしまうえば「薄暗がりで見えなくて、目の前に居るのが誰だかわからん状態」ってこと。

「げっ……」

ただまあ、僕は妖怪であり夜目も利く。

なので僕の目の前の人物が誰なのか、すぐに気付いた。
特徴的な青い髪の毛と青い服、氷の羽をもった少女。

「あーライカだ！ 弾幕ごっこしようよー！」

苦手な人（妖精）が来た。

「や」

「拒否は認めない。いいからやるの！」

本当に勘弁してください。

今日は疲れてるんです……建前上は。

「なにさーあたいと闘るのが嫌なの……？」

ご明察。

や、本当に嫌なんですよ。

彼女——氷の妖精チルノことチル姉と闘うのは。

「ふふん、わかった！ ライカはあたいと闘うのが怖いのね！ あ
たいつてばさいきょーだからー！」

おっしゃる通り。

最強の部分は同意しないけど——正直、チル姉と闘りあつて
勝てるつもりは僕にはない。

一体何処の世界に、雷の速度に対応できる妖精がいると？

一体何処の世界に、雷の一撃を氷で反射する妖精がいると？

……て言うか、チル姉は明らかに妖精じゃない別のナニかだろう
！？

「しゅぎょーのたまものよー！」

「父さま……余計なことを」

ああ……美鈴姉、約束は果たせないかもしれない。

もしも僕が氷漬けで転がってたら放っておいてください。
恥ずかしくて顔向けできないから。

「さあ！ いくよ、ライカー！」

「……………はい」

——そして翌朝、氷漬けで転がる一人の少女がそこには転がっていた。

僕は妖怪、一迅・雷火。

幻想郷の大地を駆け抜ける、一迅の雷。

僕は雷獣、一迅・雷火。

闘争起源の一人娘。

これは諦めを認めない僕の、幻想郷の日常。

それは、星宙からの降臨者と、起源なる者との最初の闘争から紡がれる、捻じれ狂った歴史の幻想物語——

外章 それは幻想の大地を駆け抜ける一迅の――（後書き）

ちなみに美鈴のとおきつてのは、雷火のスペカ攻略法のことだ
ったり。わかりづらいよ！

それと、一つ聞きたいんだが……スサノオとヘラクレス、みんなど
っちの話が見たい？

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・前（前書き）

遅くなってしまった。

前の宴からの急展開。間に何があったのか——それは個人の自由。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・前

終わりはいつでも唐突に訪れるものだ。そう、それは理不尽なまでに唐突にだ。

どれだけ続けたくても。

どれだけ続けたくても。

その理不尽は許しはしない。

どれだけ続けたくても、続けられないものがある。

どれだけ続けたくても、続かせないものがある。

歴史はそんな理不尽の繰り返しだ。

それは”過去”も”未来”も”現在”も全て等しく。

歴史も生命も文明も、全て理不尽によって悩み傷つき生き続ける。生命は生み出し、奪われ続けるのが本性だ。

”こんははずでは”という想いⅡ思いとは裏腹に、終わらないものなど有りはしない。

そんな度し難いほどの理不尽こそが、この世界の真理なのだから。それは生命もまた然り。

我は、終わりを享受することに異議はない。

我は星の記憶により生まれたのだから。

我らは、終わりを是Ⅱ否とすることに意味を見出さない。

我らは星の終わりと共に消え去る定めなのだから。

だが――

「それがこの星の意思」生命と何ら関わりを持たぬ、余所者によつてもたらされる物であるならば、我は否定するぞ」

満天の星宙より舞い落ちるは、幾億千万の星の骸たち。

我が目に映るのは、荒廃する星の姿。

それは星の至るところに傷痕を残す、星の外よりの害悪。

大地を傷つけ、海を穢して、空を焼いて、生命を奪う。

いまやこの星は降り注ぐ悪意の星のよつて、荒廃せし極寒の世界へと変貌しつつあった。

「これが自然のものであったなら、まだ諦めもついたらう」

だが違う。

この身は星の意思の代行。自然の権化。闘争の化身。

我が知覚は既存の生命の枠を遥かに超越するがゆえに、”彼の者”の意思をはつきりと認識している。

その意思は即ち、”純粹” ”無垢”、ゆえの”悪意”だ。

「この星の歴史は、生命は、全てこの星の者が決めるべきこと。」

貴様”のような余所者が奪うなど、我は決して認めん」

我が起源の兄弟たちも同じことを思っているはず。

大地に現る炎の地獄からは焰の熱線が、荒ぶる天と海から水獄の意思たる雷と水流の弾幕が、星の骸たちを撃ち滅ぼし砕いている。

ああ……この理不尽さは何時からだったか？

これは、未だ、”闘争”ではない。

視点・炎

宙よりの害悪が大地に降り注ぐ。

焰を纏う溶岩を、直接ぶつけて粉碎する。

宙よりの害悪が大地に降り注ぐ。

近場の火山から直接、火柱を撃ち放って破碎する。

宙よりの害悪が大地に降り注ぐ。

そろそろ面倒になってきたので、ともかく撃ち落としていく。

（飽きるのおお……）

炎獄は焼き尽くす。

炎獄は燃やし尽くす。

それは本懐だ。それは本能だ。それが本性なのだ。だがそれでも飽きは来る。

（流石に、毎日毎日同じことをやってれば、そうなるじゃろうなあ……）

あの日。

あの紅河で兄弟と子分らと宴を催した日。

あれは何時のことだったか？

覚えていない。

少なくとも、星が五十回は軽く廻っただろうが。

あの日。

この器が生命としてなった日。

幾億回も星の回転を遡ったあの日から、自分は随分と変わったと思う。

昔の己なら、今のこの状況をどうしていたか？

やることは変わっていないのだろうと思うが、かつてと今では随分と違うだろう。

そう、意思が違う。

いまや世界はかつての炎獄とよく似た世界となった。

大地は原初に近く、空は荒れ果て暗黒へ。世界を照らすのは天の火ではなく、己の纏う赤き焰のみ。

起源の兄弟たちと出会う前なら、それでもまあ良しとしていたかもしれない。

（じゃが、違うよなあ……これは）

この世界は優しくない。

かつての自分の世界も、まあ水や闘獄に言わせれば優しくはないだろう。だが、己は己なりに想いはあった。

かつての己なら自らの炎獄の世界以外を認めることはなかったかもしれない。

だが兄弟たちと出会い、他者と触れ合うという楽しみを見出し、孤独を畏れるようになって……自分は自分が怖くなった。

大地の奥底へ引きこもり続けた。

それが紅河の民と出会い、闘い・闘い・闘い続けて、一緒に行動するようになって……こんな生活も悪くないと思え始めた。

己の世界は相変わらず優しくない。

だが想いはある。

今のこの世界とは違う。こんな世界は認めない。

なにより――

（守るって言うってしまったたからのお……）

星を襲う未曾有の災害。

宙より降り注ぐ害悪を落とすのに、紅河の民たちでは力が無さ過ぎた。足りなさすぎた。

己はそれを真っ正直に告げ、彼らもそれを認めた。

足手纏いだと、そう告げたのだ。

まあ……いまにして思えば、他に言い方はあったかもしれないが、生憎と己にそこまでの語録はない。他の兄弟と比べて頭が空っぽなのは自覚しているのだし。

彼らはもう己の傍にはいない。

この害悪なる星の被害の少ない場所——そんな所があるかはわからん——が、そこまで逃げると言った。

彼らは普段見せないほど憔悴した表情で、今にも崩れ落ちそうである……だから、別れの際に、お前たちはワシが守ってやるわい！——と啖呵を切ってしまった。

（一度言った言葉は戻せんからのお……なにより約束もあるんじゃない）

闘獄と一緒に宴をしたあの日。

兄弟から話だけ聞いた”酒”とか言うもの。

なんでも凄く旨くて心が幸福になるような、そんな物凄く旨い飲み物があるんだとか。

——次に合うときゃあ、その”酒”とやらで飲み明かしやしようやお頭——！！

——ガッハッハハッハ——！！　　いいのお——！！　それは楽しそうじゃあ——！！

——お頭が満足できるようなものを、必ず造りやす——！！
だから、約束ですぜ——！！　必ずまた会いましょう——！！

約束がある、誓ったことがある。
それだけで、自分は闘える。

（闘獄のに言わせれば——守るために闘うのも、また自然なことで……とか言うんじゃないだろうかのお……）

同意しよう。

己は守るために、かつての炎獄の世界を生み出そう。
約束のために、誓いの為に。

ああ……だから——（”てめえ”はワシが焼いて燃やして消し炭にしてやろうや……！……！）

炎獄の赤き焰は天宙へと舞い上がり、劫火絢爛なる光にて、悪意を焼き滅ぼす。

視点・水

——ん

大地から眩いほどの赤い光が立ち昇り、瞬間天が赤に染め上げられた。

その光は、俺の意識をこの世界に引き戻す。

（ふん……炎の奴か）

れていたわけだが――、

（ふん……今ので一万と八千、五百六十五個。流星は俺だ。しっかりと把握している）

思考するのを忘れていたと言う発言に嘘はない。ただ単に俺の頭脳は思考する余地などなくとも優秀であるというのを改めて証明したに過ぎない。

事の起こりが何時のことだったか、しっかりと記憶している。
この災害が引き起こされたのは、星の回転が六十三回と半分ほど前だ。

星の煌きの美しい夜だった。

この俺の優雅な回遊を彩る、そんな美しく静寂な夜。

そんな俺の優雅な楽しみを邪魔したのは。

純粹な”悪意”によって、この星を穢す意思。

空を悪に染めて降り注いだ骸なる星々。

（――星降る夜の悪意とでも名付けようか）

まあそんなことはどうでもいいが。

最初の夜は、落ちた星が小さかったこともあり大した被害も出なかった。

精々が大地に穴を穿ち、俺の海を波立たせた程度。

悪意の意思は気になるが、その時はそこまで気にも留めてはいな

かったのだ。

（それが俺の最大の過ちか）

見誤っていたとしか言いようがない。悔っていたとしか言いようがない。

降り注ぐ害悪は日に日に勢いを増していき、俺の愛する美しき青を――海を空を穢して染めていく。

それが俺自身の招いた過失である以上、俺は自身を許せない。

（俺は、許さない――絶対に）

俺には守るべき者はいない。

炎は守るべき者を見出したのだろうが、俺は違う。

闘獄は俺と同じだろうが、奴は俺とは違うものを見出している。

俺には誰もいない。

守るべき者などいない。

そんな者いない。

――孤独など考えたことなどなかった。俺は俺だけで完結しているのだから。

なら、俺が守るべきは、俺の愛する青だけで良い。

美しき青を穢すのならば、例え宙天よりの悪意だろうが、それすら青で染め尽くす。

（俺の青を穢すもの、その一切は消え去ればいい——）

愛すべき青を守るための闘争。

青の奔流はますます勢いを増していき——

（その穢れ諸共に、美しき青は……俺は”貴様”を染め潰してやろう——！！）

最大奔流・最大雷撃・最高の青を全天に広げて塗りつぶす。

……ああ、やはり俺の青は美しすぎる——。

（視点・”■■■■■■■■”）

”■■■■■■■■”は苛立っている。

星の生命の淘汰を開始して、既に約千と五百二十四時間ほどが経過している。

計算に狂いがあつた。

この星の生命は”■■■■■■■■”の意思に逆らっている。
逆らう程度の意思力と生命力を持ち得ている。

——面白くなし——！！

本来の計算では、もつと短い時間で——今の半分ほどで星の生命の九割方は間引くことが出来ていたはず。それがなんだこの様は。”■■■■■■■■”の繰る宇宙は悉くが焼き潰され撃ち落とされている。

——面白くなし！！！！

確かに”■■■■■■■■”の計算とて完璧ではない。だがこれほどのズレを見せるのは、”■■■■■■■■”にとっては不愉快極まりない。

例えそれが、”■■■■■■■■”とよく似た近似種がいる為だとしても。”■■■■■■■■”の定めた運命に抗うなど、無礼〓不敬〓愉快、極まりないではないか！！

——”■■■■■■■■”の決定に逆らうか、下等生命。吾が定めた運命に逆らうならば——

終わりの序を告げる破滅星が……

——”■■■■■■■■”が、そなたらに直接、絶望をくれてやろう——

星降る夜の悪意の主が……

——”■■■■■■■■”が名の下に、疾く滅びるがよし塵芥！！！！

動き出す——。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・中（前書き）

中編です。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・中

” ■ ■ ■ ■ ■ ” が名の下に、疾く滅びるがよし塵芥！……！！

天空よりもなお上空、遙か久遠の彼方から”その声”は聴こえてきた。

圧倒的な悪意と害意に満ち満ちた、その凶悪そのものと言っている意思力。

その声が聴こえると同時……これまで降り注いでいた星の骸達が止んだ。

そして、天が陰る。暗黒がより濃厚に満ちて逝く。

これは——これが——、

「これが本命か——！！」

天を陰らせたもの。それは星だ。

生命を感じさせることのない、星の骸。星の屍骸。星が堕ちてくる。

生命宿さぬ悪意に満ちた星が、堕ちてくる。

我は我らを巨大であると、これまで何度か形容してきた。

今のこの世界で我らと並ぶものはほぼ無し、と。
しかした……今堕ちてくるその星と比べるならば、我らのなんと
矮小なことか……！！

これまでの物とは比べ物にならない規模の大きさの星が、この世
界を崩し滅ぼすべく堕ちてくる。

絶対なる者の裁きであると言わんばかりの威容を持って、純粹な
悪意が降りたって来る。

「いかな——これはっ！！！」

規模が違う。桁が違う。次元が違う。

こんな物が大地に……この星に直接堕ちるようなことになれば、
間違いなく今在る生命は全て消し飛ぶ。

確実に、世界は滅びる。

確実に、生命は滅びる。

確実に、我らは滅びる。

「ああ———させんよ、そんなことはな」

だが、やることなど、最初から決まっている。

我は———我らは、星の子である。

星の記憶より生み出された、星の代行者である。
ならば、星〓親を守るもまた子の務め。

我は吼える。

我は吼える。

我はこの戦意に満ちし闘争の意思力を、我が咆哮に乗せて叫ぶ。

——
ルウオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!

大地を揺らす。天を揺らす。閃なる咆哮。

聴こえているか。

聴こえているだろう兄弟。

——
グラオオガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!

遙か南の大地から、鳴動を持って咆哮が返る。

圧巻とも言うべき、燃え盛る業火の如き大音声。

——
キュエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!

遠き東の空から、美麗とも呼べる咆哮が返る。

その透き通る水面の如き、しかし戦意猛らせる大音量。

「皆、最初から決めている」

物理法則すら無視するその鳴動。
その咆哮に乗せられているのは、衰える気配など微塵も感じさせ

ない戦意に満ちたものだ。

やはり兄弟。

動機は違えど、やることは皆同じであるか。
ならば、

「闘獄世界　たる力を魅せよう」

我は己の器に、　闘争を司る程度の能力　により更に強化をかける。

そして、能力をもう一度使用する。

その使い道は、闘争を司る我ゆえの力。

——闘争を、同じ戦を臨むものと、我が意思を合一せん。

遙か遠い地にいる兄弟と、意思を同調する。

闘争を臨むその意思を束ねる。

恐らく機会は一度きり、これを逃せば星は、生命は終わる。

「合わせろよ、兄弟」

（主の方がなああああ！！！！）

（貴様に言われるまでもない）

私の強いことだが、それで良い。
では始めよう。

星に終わりをもたらす星に終わりをもたらそう。

——、面白いやつて魅せよ。見せて魅せよ。

久遠の彼方から、そんな声が聴こえたような気がした。

南の地より猛り昇るは、赤い赤い、何処までも真つ赤で一途な紅蓮の閃光。

東の空より駆け巡るは、青い青い、渦巻き逆巻いて雷散らせし青黒い奔流。

我が放つは混沌色。蝕み、喰み、星に仇名す怨敵を飲み込む三撃一波の鬭争波動。

そして——もう一条の光が立ち昇る。

それは彼方なる北の地より。

真白きその閃光は、空を凍てつかせ、空間を凍らせ、一切悪を氷結せし白亜の鋭刃。

「——誰だ」

赤・青・白・混沌の四色の閃光は、余す所なく堕ちたる巨星へと放たれ——

——閃光と轟音。

——砕け破裂する巨星。

——舞い散る破片。

——弾け飛ぶ破片の中から”何か”が——

「軌道を変えただと——！！？」

巨星は砕けた。

だが、巨星の中に”何か”が。不吉な予感を過ぎらせる”何か”が。

本来墮ちるのであつただろう場所を大きく、それこそ物理法則など無視した機動で、その軌道を変化させ超高速で飛翔する。

——成程。吾の殻を砕くか。だが……計算の範囲内

だぞ塵芥よ。

嘲るその声色は、悪意と、そして何処か愉しげな……。

遠い遠い北の地。

悪意にして害意なる巨の星が、その殻を砕け散らしながら墮ちた場所。

途中で合流した炎と水と向かった、そこは極寒であつた。

ただ天の火からの光が遮られただけの影響ではないだろう。長ら

く続いた小さき害悪のもたらした、その異変の一つ。

海は凍てつき、大地は凍りつき、真白き風花が覆い尽くす。
一切の妥協を許さない、冷たく凍れる白い地獄。

（なんじゃあ……わしゃあ、こんな世界は好みじゃあないのおおお
ー！！）

（同意。だが、思い出す。あの懐かしき原初の世界を）

「む、確かに……似ているな」

似ている。

炎獄と水獄、世界に刻まれた記憶。起源なる世界。
今のこの光景は、なるほど似ている。

属性や性質の問題ではない。その本質がだ。

我らは進む。

ひたすらに進む。

進み続ける。

白い大地を昏い空を。

進み続けて幾ばくか。

巨大な”何か”が堕ちたのだろう場所には巨大な穴。その周囲は
白い結晶のような氷柱が無数に乱立し、大地は何か強大な力で圧迫
させられたように抉れ押しつぶされていた。

（何か居るな……）

（おう！ わかつとるわい！）

そこに、その”戦場”に、それは居た。
その”異形”が。

「——白きにして、巨なりか」

それは巨大であつた。単純に”大きさ”で比較すれば、我や炎、水と同格。しかし”高さ”で見るなら我らよりもなお巨大であつた。そのモノは異形であつた。その器は白磁の陶器の如き幾枚かの甲殻で覆われ、幾つかの節を持つ手足は、それ単体で一つの爪となるのだらう一対の大前爪と大脚爪。そして若干小さめの脚等で構成されている。

一際異彩を放つのは、巨大な一本の大角と顎門、そして感情の見いだせぬ一対の複眼。

我の持つ知識の中で最もその異形に近いと思われるのは甲蟲であろうか。否、近いと言うだけで、それは甲蟲とは呼べぬだらうか。

この凍てつく大地にあつてそびえ立つ生きた氷柱の如く。

しかし——違う。

これはあの悪意とは違うものだ。

我は本能的に悟る。これは我らと同じ存在だと。

あの悪意放つ星とは異なる。

凍てつく星が生み出した、起源なる種。

炎と水に倣うなら、氷獄世界Ⅱ氷 とでも呼ぶべきか？

だが、その新しい兄弟は——

「……………」

（なあ、おうい……こりゃあ、誰が……やりやがったんだらあああああああつ！……！！）

（……………無惨）

無惨な。或いは悲惨な。惨々な有り様であつた。

その白磁の甲殻はひび割れ焦げて、手足はその何本かが千切れ飛び、大角にも大きく亀裂が走り今にも折れてしまいそうな、そんな有り様であつた。

新しい兄弟。まだ生まれたての若い存在。

とは言え、我らと同じく星の起源たる存在。他に比類なき生命力と意思力を持ち合わせ産み落とされる存在。

それがこれ程までに……。

これをしたのは誰だ。

起源なる兄弟を、この様にしたのは誰だ。

元凶を、その根源を捜し――

「気付かぬか、塵芥。矮小なる身ではいた仕方ないか？」

――捜すまでもなかった。ああ、捜す必要などなかった。

”それ”は居た。

”そこ”に居た。

我らが気付いていなかっただけで……それは其処に……此所に居

ただ。最初から。

——それは、圧倒的絶対者たる至高の高みに在りしモノ。

”それ”は濃紺なる紫紺にして死紺。

その翼は天を覆い隠し、夜の闇よりなお昏き暗黒の宙。

その腕は生命の一切を抱くことなき、凶なる意思の顕れ。

己以外の一切を拒絶せんとする、刃の如き堅甲を鎧った赤にして青にして漆黒。

生命から温もりという概念を抜いたかのような、眸無き貌。

巨大などという表現では形容できない、長大などという表現では形作れない。”超絶”なる大きさ。我が見る世界の全天を覆い尽くす天隔禍津大星（アマカクスマガツオオホシ）

「——頭が高い、塵芥——」

その声ならぬ声、威圧的な意思力は”力”の顕現として我に圧し掛かる。

——重力——

「——ッ！！！！——」

たった一言。

そのたった一言で、私の身体は空から大地へと縫い付けられた。

我が器が軋むほどの、超重力の鉄槌。それが、我を落としめた一撃。

見れば、炎や水も同様に抗えぬその力で押しつぶされようとしていた。

（ガッハアッハハハ………舐めんなああっ！！）

（……………！！）

超重力に押しつぶされながらも、起き上がり、抗おうとする炎と水。

だが、

—— 歪曲 ——

（ゲガッハアハッ………！！！！！！）

（痛うつく……………！！！！）

先程同様にわずか一言。

そのたった一言で、炎の頑強な甲殻が、腕が、脚が「水の優美にたゆたう翼が、その滑らかな鱗が——捻じれ弾けて千切れ飛ぶ。無惨に千切れて、弾けて散って。

「——、炎！！ 水！！」

その光景を冷たく見下し、”奴”は冷たく言い放つ。

「吾は宣言したぞ——絶望を与えると」

その言葉は、我らの魂（ココロ）を蝕む、絶望。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・中（後書き）

白いののは外見のイメージはガ○ラ2のレ○オン。あるいは型月の水星の究極。

紫のは、知ってる人は知ってる。無限のファン○ジアの某ド○ゴンロ○ド。

大きい大きいと書いてますが、”奴”の全長は軽くk m単位ってことで。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・後（前書き）

わりとあっさり気味。

戦闘描写をもっと勉強したいものです。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・後

視点・ ” ■ ■ ■ ■ ■ ”

吾は飽いている。

吾は餓えている。

吾は渴いている。

「―― 重力 ――」

吾が一声、宣言しただけで潰れてしまった。

この惑星の中でも頭抜けた生命力と意思力を持った生命であると思っただけ。

高々、この星の標準重力の”二十倍足らず” 負荷を掛けたただけで潰れるとは。

吾が星墮としを防いだその意思力には、多少の期待はあったのだがな。

これほどまでに脆弱では、到底吾が望むほどのものはない、か。

……はて、吾が塵芥に期待するとは、これは異なことだな。塵は塵だと言っのに。

（ガッハアッハハハ………舐めんなああっ！！）

（……………！！）

「……………ほう」

三体の内、二体までが吾が重圧撃に逆らい起き上がらんとするか。
その意気は良し。
されど、虚しいものだな。
塵が何度起きたところで、塵は所詮塵に過ぎん。
だが、抗うならこうしてやろうか。

「——歪曲——」

吾は再度宣言せり。

特定空間を歪め、曲げて、捻じ切り、千切る。
兎戯にも等しきこの行為。なれど、汝が生命はどうなるか。

(ゲガッハアハッツ……………！！！！)

(痛うつく……………！！！！)

吾がたった一声で、その脆弱な甲殻が、腕が、脚が「無様にのた
うつ翼が、その青黒い鱗が——捻じれ弾けて千切れ飛ぶ。無惨
に千切れて、弾けて散る。

「——、炎！！ 水！！」

「吾は宣言したぞ——絶望を与えると」

吾の意に沿わぬもの、皆、滅び去れ。
全ては吾が計算通りに進むが良い。
その後で——ゆるりとこの星を観測するでしょう。

視点・闘獄

絶対者たるに必要なものは何か？

それは”力”である。

何物をも凌駕する圧倒的・超絶的な”力”。

己以外の全てを破壊し蹂躪し征服する。

それは”闘争”すらも意味を成さない、”暴”なる意。

「貴様らの生命としての力は、吾には遠く遙かに及ばぬよ」

純粹なる”力”の摂理。

我はその摂理を否定しない。全て事実であるのだから。

だが、否定はしないが理解はしたくない。

そんな存在が居ることを。

我が身が、その”力”に晒されることを。

「ガ、アアアアッ！！！」

畏れを、その恐怖を振り切るために、我は己の顎門から幾閃もの破壊の混沌を放つ。

何度も何度も何度も……！！！！

だが届かない。

我が力は届かない。

”闘争”ですらないこの闘争では、我が力は奴には届かない！！

「それで——満足したか？」

気付けば、奴はその身に何ら変化一つ見せずに、我を見下す。
その意思は絶対的に凶悪。

奴には”闘争”の意思がない。

あるのはただ、邪魔な虫ケラを踏みつぶすだけの”蹂躪”の思考のみ。

「所詮は塵芥だな、やはり」

「……虫どころか、塵扱いか……」

我が能力で自らを強化する。

さらに、さらに強く。さらに鋭く。奴に我が牙を届かせるために。
だが我が能力は……その力を”未だ”発揮しえない。

「では——まずは極低温の世界を魅せようか」

三度の宣言。

それによって引き起こされたのは、この氷獄の世界すらもなお凍てつかせる、物理法則を超えた極低温。物質の動きを”停止”させる、あらゆる生命の体験したことのない世界。

「これが氷獄というものだ。先の白き者も、塵にしては凍てつく世界を持つてはいたが……星の海の冷たさには遠く及ばぬ」

白き者——その言葉は新しい兄弟を指してのことか。

この凍れる大地で生まれた以上、その能力には予想はつく。だが、

それを持ってもなお上回る、紫紺なる脅威か。

（ぬあら……逆じゃあどうかあのおおおお……！！！！）

その言葉と共に、炎獄の世界が生み出される。

大地は燃えて湧き立つ溶岩に、超高温の灼熱が空気を焼き焦がす。
起源なる世界 炎獄世界 だ。

拮抗する。抵抗する。

その炎は凍てつく大地を瞬時に解かし、極低温の侵蝕を押し返す。
しかし勢いは大なれど、肝心の炎自身は、深い傷をその身に負ったままだった。

「炎よ、その傷は！？」

（ガッハハアハハ……再生、せんのおお……！！ どうにも、アレにやられた傷が治らんわい！！）

在り得ない……そう、在り得ないことだ。

星の子として生まれた我ら、星の上でなら生命起源として再生することが出来る。

それが、その”機能”が働かないなど……。

（余所見、禁物……！！！！）

「水……！！？」

天翔ける雷。

雷速をもつて紫紺の天へと突き進む。

その身は炎と同様に再生しない傷痕を残したまま、しかし折れる心などないと言わんばかりに真っ直ぐに進撃する。

雷の槍と形容できるほどの鋭さを持って、その悪意へと突き刺さ

斥力

（届かつ……！？）

「如何に鋭き刃とて、刺さらぬのなら意味はなし」

見えない壁に遮られるかのように、空中で静止する水。

その身体は徐々に後方に押し下げられていく。

見えざるその壁によってじりじりと。

そして水はその見えざる圧に耐え切れず、結局は地まで降り下ざるをえない。

「無理をし過ぎだぞ水！」

（ガハハハ！！ 届かんかったのおおお！！）

（俺には無用の心配だ！ 炎！ 貴様もその暑苦しい世界を解くなよ——）

——そこまで言おとしかけて、止まる。

世界は炎が生み出した灼熱なる大地。

だが、頭上にそれ以上の質量と熱と悪意を感じ、仰ぎ見る。
そこには変わらず、超越なる威圧を放ち続ける紫紺の悪意と――

「焔熱の獄というのは、こういうモノを指す。覚えておくがいい」

―― 太陽 ――

「これほどか……これほどまでに――!!」

大地に天なる火が出現する。

紫紺の化け物の掌に鎮座し、煌々と光放つ火球。

本来天にあるものとは規模こそ違うが同質のもの。

その真なる炎が、奴の掌の中に生み出されていた。

「では――魂の芯まで味わうといい」

墮とされる天の火。

それは圧倒的過ぎる閃光と熱波、衝撃を伴って炎獄の世界を破壊する。

その”暴力”に翻弄されて……炎は水は、そして我は何ら術なく
焼き尽くされていく。

五感が、世界が奪われていく。

……そして、我は気付いた。

五感を取り戻していく。

視界が開ける。

炎や水の姿はない。白い兄弟の姿も。死んではいないだろう。我がまだ”生きて”いるのだから。

しかし今この場に在るのは自身の姿のみ。それすらも、酷い有様で。

三つあった首はその一つを完全に焼き飛ばされ、甲殻は炭化し消し飛ばないほうが可笑しいくらい。翼は既にその役割を果たすことない。

完全な死に体。

瀕死などという表現すら生温い。

激痛など感じないほどに、重くのしかかる己の器。

起源生命ゆえに生き残れた。

だが、生き残れたからこそ我は思考する。そして推測する。そして解答に至る。

(そうか……これは、この能力の正体は——)

重力・空間歪曲・極低温・斥力そして……太陽。

これら複数多岐に渡る事象を自在に操り、支配するその力。

星すらも圧倒する超絶的な純粹な”力”と”生命”。

天を覆い尽くす、その夜の闇より昏いその紫紺の身体と、星の輝きとすら取れるその生命の形。

ああ……その能力の正体は——

「―― 宇宙 …… 貴様は、 宇宙 を操るのだな」

紫紺の天は、その眸なき貌でにやりと、愉快気に「不愉快そうに
嗤う。

「―― 如何にも。 吾は 宇宙 より生じる事象、森羅万象を支
配せり原初の莊嚴」

やはり―― 重力も空間歪曲も斥力も、まして太陽ですら、宇
宙という概念に内包されるもの。

星の子たる我らの再生が効かない理由は不明だが、恐らくその能
力に関係がある。

「吾が能力によく気付いた。 汝が初めてだぞ？ 大抵は、吾が能力
を知るまえに散っていくのだからな」

嘲り笑う声。

だがその声には僅かながらの関心と感心。
それはおおよそ、塵芥と呼んだ生命へ向けるものとは思えないも
のだ。

「面白いぞ賢き愚者。 脆弱だが頑強な意思持ちしモノ。 いいだろう。
貴様は吾が” 敵足るモノ ” だと認識しよう。 ゆえにもう良いぞ――
―― 吾が 宇宙 に抱かれて沈むがよい」

死の宣告。

恐らく誰もが、生命ある者なら誰しもがそう思うだろう。
恐怖と絶望。

だが違う。 違うのだ。 それは違う。

我は。そう我にとっては”違う”。
ああ……

「ああ漸く………我を”敵”と認識したか！！！」

叫び、咆哮し、歓喜せり！！

我は奴のその言葉を、ずっと”待つて”いた。
我は闘獄世界。

闘争を起源とする生命。
闘争という意味の顕れ、その概念そのもの。

我が能力は ありとあらゆる闘争を司る程度の能力
闘争にまつわるあらゆる事象に関与する。
されど我が能力の真価は――

「我が、そして我が敵対者が我を”敵”だと認識すること」

”敵”なき闘争などただの自己満足の独り舞台。

”敵”と”敵”という概念こそ、闘争の起源の由縁が一なれば。

”敵”という認識を持つて、我は真に力を奮う。

ゆえに改めて、我もまた宣言しよう。

「――闘争を始めようか」

視点・
” ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ”

「……………な、に？」

理解不能な事態だ。
痛み。

そう痛みを感じる。

永劫の時間を超えて来たこの器に、久しく”痛み”を感じる……！

「——慢心が過ぎたな」

声が聴こえた。

吾が能力を看破し、吾が”敵”と認識すると認めた三つ首の生命。
この痛みを与えた張本人。

「闘争とは、我なり」

声と共に我の身体に痛みが生じる。

見ればその場所には、なにか分らない、白い〓黒いなにかが牙の
ような形で突き刺さっていた。

「水の意趣返しと言うわけではないがな」

「斥力 ……！！！！」

「遅いわ！！！！」

宣言できない……！！

速い。

速いという言葉ですらも遅い。

ただ”速い”。

”この身”を縛る星の物理的法則などでは、最早追いつけない。

吾の宣言よりも速く、奴の”牙”が”爪”が、吾の身体へ傷を付ける。

吾が焰熱の獄にて焼滅させた、奴の器が再生している。

その三つ首はより強壮に、身体はより強固に、翼はさらに強靱に。吾が 宇宙 の概念は 星 の上位なり。ゆえに星の力による再生すらも阻害する吾が 宇宙 、その”暴威”による傷が再生している。

その身は今や完全に再生し、いまなおその”力”を”生命”を強大化させつつあった。

「ありえん……!!」

「闘争とは我だ。ゆえに我を”敵”と見なした貴様には我は倒せん。仮にそれが 宇宙 であっても!!」

吾が計算予測に乱れが生じた。

どこで狂った？

なにが原因だ？

奴の”生命”を”意思”を甘く見たからか？ 塵芥だと侮ったからか？ 奴の能力を計算に入れていなかったからか？

……いやさ、そんなことは、”どうでもいい”!!

[illegible]

ははは……愉快!!!

数多の星を臨みし吾を押し返すか！！
吾が器に牙を、爪を突き立てるか！！

吾に痛みを感じさせたか！！

愉快！
愉快！
愉快！

愉快！
愉快！
愉快！

ああ……実に”愉快”だ。本当に愉快だ。

ああ……もっと” 楽しみたい” なあ……。

ああ……だが、”この身”では勝てんなあ……。

ああ……なら、こうしようか……。

「愉快。ゆえにもっと、もっと」魅せよ。吾をもっともっと魅せて”みよ!!「

吾は飽いている。

吾は餓えている。

吾は渴いている。

星を望み、臨み、求め渴望する星を手にするため、吾が生命の慰めとなれ。

吾が退屈なる生命を潤す、活ける愛玩の贅となれ。

吾が永劫の生命を満たす至福の時間を生み出せ。

「ゆえに——時間を稼がせてもらおうか」

紫紺の悪意が去っていく。

異常な速度で、光すら歪めんと、星の世界へ還っていく。
能力を最大限に活性化させた我の視力を持っても追い切れぬほどの速さで。光の速度で。

だが、それで終わらない。

まだ、終わってはいない。

最後に星降る夜の悪意は最終局面を迎えた。

—— 流星 ——

星が降る。

夜が降りる。

天が堕ちてくる。

星の世界が降り注ぐ。

その久遠の彼方から、最後に聴こえたその声が、
我が魂におぞましく侵蝕する—— 否、

—— 吾が名は” ■ ■ ■ ■ ”、星の獄たる起源の莊嚴。次
に会間見える時、吾が名の故を知るがよし——

その意味を知ったのは、これより遙か遠き未来のこと。

数多の人と妖、強者と強者が織り成す、熾烈なる闘争。月面で迎えることとなる、異種族間同士の激烈なる闘争の場。

舞台は未来へ。

歴史は繰る狂る巡り来る。

第一章 原始の終焉Ⅱ 星降る夜の悪意・後（後書き）

とりあえず原始編は終了？

次回から東方キャラとかちよつとずつ出るかもです（まあその前に
現在幻想郷の番外とかやるだろうけど）

幻想郷縁起なキャラ解説#2（前書き）

キャラ解説第二弾。

氷獄さんが活躍されてませんが、こんな感じ。
やっぱり今回も未来設定があるのでご注意を。

幻想郷縁起なキャラ解説#2

地上の雷、諦めない雷娘

一迅・雷火 I t i j i n | R a i k a

種族：雷獣

能力：諦めない程度有能力

危険度：低

人間友好度：高

遭遇頻度：普通

主な活動場所：妖怪の山近辺、霧の湖

地上に在る稲光。雷獣の少女である。

よく妖怪の山や霧の湖で目撃されており、紅魔館の門番と修行をしている（1）

人里にも頻繁に現れており、比較的友好的な妖怪として認知されている。

虫妖怪の少女と並び、里の女子にも人気がある。かく言う私も彼女の写真を持っている（2）

能力は 諦めない程度の能力。諦めなければどんな無理難題も克服する……という能力らしいが曖昧である。本人が逆立ちしても出来ないものは出来ないらしいが。

ちなみに弹幕ごっこでは雷を使った弹幕を張るが、種族固有のものであり能力そのものとは関係ないらしい。弹幕ごっこの実力は門番並みにはあるようだ（3）

なお雷の速度で移動できるらしく、純粹な速さでは幻想郷最速。

それが原因がよく天狗の文屋に追い回されているのだとか（4）

三つ首の竜とは親子関係らしい。似ていない親子もいたものである。

氷妖精のことを姉と呼んでいるが、こちらの関係は不明である（5）

「んー妹みたいな感じですかね？ あ、弟みたいな感じも
——のんびり門番

「幻想郷最速の座は渡さないわ！」
——対抗心溢れる鴉天狗

「いや幻想郷最速は私たぜ！」
——更に対抗する普通の魔法使い

「娘……なのか？ あれはどちらかと言えば水の——」
——何か言いかける、ふらり旅道中の三つ首竜

- 1 弾幕ごっこだけでなく、格闘戦も得意な様子。
- 2 河童の技術と鴉天狗の実力は半端ない。
- 3 弾幕ごっこ基準だと何故か弱く感じる。
- 4 里の道具屋の黒白娘にも追い回されているようだ。
- 5 よく霧の湖周辺で凍らされたまま放置されている。

凍てつく地獄の第四層、おかーさん

氷獄世界 Hyogoku - Sekai

種族：??? 能力：氷獄界を生み出す程度の能力

危険度：極高

人間友好度：低

遭遇頻度：低

主な活動場所：凍土、雪山、地獄（１）

凍土や雪山の奥地にいることが多い、巨大な白い虫（？）

非常に長く生きているらしいが、炎の竜や水の竜たちと比べるとまだ若いらしい。具体的な数字は分らないが万単位だと妖精たちが騒いでいた。

ここ最近まで外の世界の別の地獄で仕事をしていたようだが、閻魔様の仰る地獄との違いはなんなのだろう？

能力は 氷獄界を生み出す程度の能力

昔棲んでいた環境を自分の周囲に生み出すという能力らしい。真夏日を真冬並みの気温に変えるくらいは簡単なようだ。ぜひ真夏日に来てもらいたいものである（２）

基本的に活動的ではないらしく、凍土地帯以外で行動している所は見られない。冬妖怪や氷妖精たちにとっても懐かれている様子。氷妖精におかーさんと呼ばれているようだが、本当に親子関係なのだろうか？

炎の竜や水の竜との関係は兄弟のようなものとか。基本的に仲は悪くない模様。

弾幕ごっこは以外なことに得意なのとか（３）

「んーなんでお母さんって呼ぶのかって？ ……お母さんはお母さんよね」

——季節外れの冬妖怪

「雪見酒って風情があっていいわよね」

——お菓子をもぐもぐする冥界のお嬢様

「幽々子様は雪見大福が食べたいだけなんじゃ……」

——冥界の従者

「あーうー……冬は苦手だよー」

——土着神の頂点

- 1 外の世界ではこきゅうとすと呼ぶ所らしい。
- 2 真夏日が真冬日に替わるだけのような気が。
- 3 相手の弾まで凍らせられるなら得意以前にルール違反である。

星宙からの来訪者、星降る夜の悪意

” ■ ■ ■ ■ ■ ” Ⅱ 星獄世界 Seigoku - Sekai

種族：？？？

能力：宇宙を操る程度有能力

危険度：極高

人間友好度：皆無

遭遇頻度：極低

主な活動場所：宇宙（ 1 ）

幻想郷に在住しているわけではないが、あえて書いておこうと思う。

その姿は天を覆い隠すほどに大きく、眸の無い貌の紫紺色の龍だとか。

神世よりも更に大昔に地上に降り立ったと伝えられおり、大昔に存在していた竜たちを絶滅まで追いやったとか。

外の世界でも最近この存在の調査が進められている（ 2 ）

能力は 宇宙を操る程度有能力

「宇」は「天地四方上下」、「宙」は「往古来今」（つまり過去・現在・未来、時間全体）を意味し、「宇宙」で時空（時間と空間）の全体を意味する。早い話が森羅万象に干渉する能力である。

第一次月面戦争でスキマ妖怪率いる妖怪軍団と月の住人達との戦争の際に目撃されており、大妖怪のほとんどがこの時に皆殺しにされている（ 3 ）

炎や水の竜、白い雪の虫、三つ首の竜等とは因縁がある模様。

妖怪たちの話を聞く限り、わりと頻繁に地上に来ているような気が（ 4 ）

「次は月の決戦兵器を御見舞いしてあげるわ」

—— 竹林の天才薬師

「利用されるだけで終わる女じゃありませんのよ？」

—— 珍しく真面目顔なスキマ妖怪

「最近、月を見るのが怖いよね……」

——月の光の妖精

「正体不明より、時に正体が明確なものの方が怖いってねえ」

——未確認幻想飛行少女

1 竹林のお姫様や薬師と関係はあるのだろうか？

2 せかんどいんぱくとやらがどうのこうの、と外の世界の本に書いてあった。

3 この時に参加した妖怪たちは何も言おうとしない。

4 ”天を覆い隠すほど”の大きさなのに見つからないということとは、今は小さいということなのだろうか？

幻想郷縁起なキャラ解説#2（後書き）

アンケートとは言いませんが、オリジナルキャラで出して欲しい種族（妖怪とか）募集です。

前回のヘラクレスさんのお話はまだまだですが、こっちはちよくちよく挟んでいきたい。

ちなみに現在出す予定なのが、付喪神と魔法使い。

外章 今月今夜Ⅱ 鬼と刀・前 (前書き)

予告通り番外。

時間系列は現在幻想郷よりも若干昔。

外章 今月今夜Ⅱ 鬼と刀・前

深い深い夜の闇。

暗い暗い森の中。

道なき道を行き、月明かりだけが唯一の光源。

静寂の中響くのは、たった一つの足音のみ。

行くは白の憲兵服を纏う一人の男。

逝くは妖蔓延る山奥へ。

小生は今ある目的を持って死地へ赴かんとしている。

下手をすれば、死に至るであろう行為をしようとしている。

無論、へまをするつもりなど毛頭ない。だが、確率的には大分低いものであろう。

だから———と言うわけではないのだが、もしこの夜の闇の中で、小生を見ているものがいるのであれば、是非聞いてもらいたい。小生が生きてきた、小生が歩んできたその道を。我が生命の証を。是非とも聞いてもらいたい。

「小生は器物である」

具体的には刀である。より細やかに言うならば、付喪神と呼ばれる存在である。

一振りの刀として鑄造されて約千年。

妖刀と断じられ、徳高き僧の法力にて封じられたのが今よりおよそ六百年前。

後に解放され、付喪神となりて外界を放浪すること二百と余年。
この幻想郷に流れ着いてより早云十年。

齡千年を越す刀の付喪神、銘は……忘れた。
我が制作者はたかが道具に銘を付けるのを良しとする人ではなかつたのであろう。

数多の人間の手に握られてからは、ただ 人斬り刀 と呼ばれた。
安直だが妥当なのだろうと当時の小生は思ったものだ。ただ人を斬るだけの刀。

しかし、だ。

付喪神として長い時を生きるのに、個体を示す名が……銘ではない名が必要とされた。

小生は、己の刀身を指してこう名乗ることとした。

薄き刃は羽の如く軽く、その波紋は陽炎の如く。

薄刃・陽炎（うすば・かげろう）と。

これまで小生は実に長い時を戦地で過ごしてきた。

外界にありし時はただの刀として多くの武士に振られ生命を刈り取り、人を妖怪を殺め続けその血をすすり続けてきた。

妖刀としての名が知れ渡ってきた頃ですら、小生を握り斬り続ける武士は後を絶たず……終いには人心を惑わす妖の刀だとして封印された。

実に濡れ衣だ。

その当時の小生はただの刀。自我こそある程度は持ち始めてはいたが、いかに曰く付きではあろうと、担い手を誑かすような真似は一切していない。

「いまさらと言えば、いまさらだがね」

僧の封印は長らく小生を縛り続けてきたが、その間はずっとずっと退屈だった。

そして——封印から解き放たれた時は、我が事ながら若かった。

あの時代……大陸や南蛮との交流が盛んに行われた時代。

小生は付喪神としてただの妖刀より昇華し、永き封印の鬱憤を晴らすかのように人を、あるいは妖を斬り続けた。

もつとも……やり過ぎたのであろう。

小生のことを殺（壊）そうと、あるいは己が手中に納めようと、多くの人間や妖怪たちに我が身を狙われ、追われ……そしてこの幻想郷の存在を知り移住した。

「ふふ、小生も白面者だったねえ」

自重するべきだったか……などとは死んでも思わない。

小生は刀である。器物なのである。

担い手を失って久しいとは言え、この身は一振りの刀剣なのだ。

まあ妖刀という肩書こそあれども。

何も斬らぬ刀など刀にあらず。

「道具は使われてこそ華。刀は斬ってこそ刀。使われぬ刀などに存在価値などない。そんなものは錆漬して仏像にでもなってしまう」

小生の自論である。

無論、世の中には一度も人を殺めたことのない刀も存在するには存在するだろう。

だが、小生から言わせればそんなもの刀である意味はない。最初から素直に包丁としてでも鑄造されておればよかったのだ。これに關しては、同じ刀として言わせてもらえるなら同情を禁じ得ない。

まあなんにしろ……小生は一切の後悔を抱くことなくこの地に居着いたわけだが。

ここは外の世界に比べれば、なるほど確かに妖怪に溢れている。

御蔭で退屈しない日々を送ることができた。

外の妖怪たち以上に原始的な闘争本能を持ったものたちもいれば、人以上の智を有する強大な存在も数多存在する理想郷。

人は妖怪を滅し、妖怪は人を食らう。

まさしく自然の摂理そのままに。

小生もその理——闘獄の理念・摂理のままだに、この幻想郷でも闘い続けた。

冥界に住まう半人半霊の老剣士 魂魄・妖忌。

彼とは実に楽しく闘りあえた。

我が同胞を見事に使いこなし、その剣技の冴えたるや器物であるこの身すらもヒヤリとしたものだ。

もつとも彼とはどちらかと言えば剣術の心構えについての会話をすることの方が多かった気もするがね。小生と同年代程度であろうに、爺臭く、それでいて未だに己は未熟だなどとほざく始末。

「刀そのものである小生の斬撃を悉く打ち破っておいて未熟とは……謙遜過ぎるのも考えものだ」と小生は思っただがね」

まあ本人が未熟だと言うのなら。そういうことにしておこうじゃ

ないか。

小生もその生涯修行とでも言うべき信念を見習いたいものだ。

そしてもう一人。

竹林に住む不死の少女 藤原・妹紅 と何度も闘った。

蓬萊の人の型なるその少女は不死身であつた。この世の中に不死身などという馬鹿げた素敵な存在がいることは知っていたが、まさか幻想郷にもいたとは。当時の小生はそんな感慨をもったものだ。

まあ小生が考えていたことと言えば、不死身と言う事は死なぬということか、という当然のことだった。そして、その少女の話を聞いた次の日には、興奮のままに闘り合いに行つたものさ。

久し振りに本当の意味での”死合”をしたくなつてねえ。妖忌とも確かに何度も闘り合つたが、彼とはどちらかと言えば殺し合いという仲じゃなかったからさ。

ふふふ、しかし今思えば猪過ぎた思考だったかな。

でもまあ仕方ないよねえ？

小生もだ年甲斐もなく嬉しくなつてしまつてね！！

「だってそうだろう？ 斬つても死なないなんて、夢のようじゃないか！ 何度でも何度でも切り刻めるなんて！！」

何度その肉を裂いても、何度その骨を断つても、何度その紅い血を啜つても！

死なぬ滅びぬその身体！

斬り臥せてもそのたびに黄泉帰り、さらに闘争心を増して立ち向かつて来る！！

飽きない。実に飽きない。
飽きることのない無限の闘争！！

くはは……とはいえ、流石に幾ら切り刻んでも死なぬその少女の
相手をするのも老骨（刀に骨などないだろうなどという無粋な問い
に応える気はないよ）には堪えるのでね。

ここ最近はず足の腱を切り、頸動脈を割いて死なぬ程度に動きを
御することで終いとしているが……ふふ、いやはや、その度にこち
らを睨むその形相ときたら……！

視線で人を殺すという例え話はよく聞ぐが、なるほどこう言つも
のを言うのかと実感したものだよ。

「もつとも、最近はず竹林の姫君にご執心なようだがねえ」

寂しいとは思わんよ。

所詮は器物の戯れでしかないのだから。
しかしだからこそ愉快！

「ああ、まことに——！」

素晴らしい……ああ掛け値無しに素晴らしい！
この幻想郷は、人妖は、全くもって素晴らしい！

「そうは思わないかい君も？」

「——拙者の気配に気付いていたか」

暗い森の中、木立の奥から声が聞える。

若い男の声。

「ふふ、最初からさ。小生は気配を読むのが得意でね。戦場に生きて来たからかな？」

「……………」

ゆらりと姿を現したのは、特徴的な山伏姿で手に刀を持った男。その頭には耳、そして臀部からは尻尾が生えている。どちらも見事に真っ白だ。

その特徴的な姿には覚えがある。
長い時を生きた老いた狼がなるとされる存在。この妖怪の山に棲む代表的な種。

「さつきから小生の独白を聞いてくれたのは白狼天狗くん、君だね？」

「……貴様は危険だ。山の秩序を乱す存在だ」

小生の問いには応えず、ゆらりと構える若い天狗。

ふふ、滾る滾る。嬉しいねえ、その戦意。

でも少しくらいは小生の人生を振り返っての独白に感想ぐらいは欲しいものだねえ。

「拙者は妖怪の山が哨戒番、白狼天狗 犬養・葉賢（いぬかい・ようれん）！ 早々に立ち去るがいい侵入者よ！！」

おやおや勇ましいことだ。

「ふふ、人の用件も聞かずに追い返すのかい此処の住人は？」

「聞かずともわかる事はある。ましてや貴様も言っていただろう。拙者は貴様の此処にいたるまでのあらましを聞いていた。故に、危険だと判断したのだ」

「ああ確かに。でもまあ待ちたまえよ。他人の話はもっと詳しく聞くものさ。まだ小生の生い立ちについても全部話していないんだ。是非とも最後まで付き合ってもらいたいと――」

「問答無用!!」

「おっと」

会話もそこに斬りかかれた。

血気盛んなのはいいが、いけないなあ。ああ、いけない。

「こらこら、いきなり人に斬りかかるだなんて……礼儀がなくなっているねえ最近の若い者は」

「問答無用だと言ったぞ拙者は!」

斬。斬。斬。斬。斬。

斬。斬。斬。斬。斬。

斬。斬。斬。斬。斬。

天狗としての、そして古き狼としての身体能力を生かした高速の斬撃。

並みの妖怪では対応することは難しいだろう。

もともと――、

「まあ小生が”並み”であればの話はあるが、ね」

「くっ……なぜ当たらん!?」

いやいや、いい腕をしているよ実際。

ここ最近はお先ばかりで腕の方がついていない輩が多いからねえ。

小生に真っ向切って啖呵を切るだけの、自信に見合う実力は相応にある、と。

「ああ、本来なら正々堂々、この身（刀）を交えて仕合いたいものなのだが」

「ならば——なにゆえ闘わない!?」

ああ当然の疑問だろうね。
だが残念。

この美しい、静寂の夜で闘うのは”一度”きり。
この身を振るう相手は”一人だけ”と決めているんでね。
それにだ——、

「ふふ悪いね。生憎と小生は、弱いもの虐めはしない主義なんだ」

「拙者を侮辱するか……!」

「侮辱……とは違うね。純然たる事実さ。君は弱い。君では何十回、何百回斬りかかってきても小生に一太刀も入れること叶わないだろうね」

悔しそうに唇を噛み締める。

分る。ああ分るとも、その気持ち。

己の力が届かない、届かせてもらえない。闘ってすらもらえない。屈辱だらう。ああ屈辱だらうとも！ 少なくとも小生なら悔しきと憤りでこの身を砕いてしまいかねないね！

……ま、それはさておき、

「では——名残り惜しいが、そろそろおさらばだ」

「くっ、このまま行かせるわけには………こちら哨戒中の犬養！
山への侵入者あり！！ 繰り返す侵入者あ——っ！？」

「おっといけないね」

声を張り上げ応援を呼ぶとする。だがいまさら遅い。

首筋に手刀を叩きこむ。意識を失い倒れ込む白狼天狗。

「ふふ、若い若い。あと五・六十年後くらいにもう一度闘り合ってみるのも面白いかな？」

その時は期待しているよ若い白狼天狗くん？

夜の闇はより一層深く。

山道もより一層険しくなってきた。

もはや語る相手もいなくなつて——（まあその相手を気絶させたのは小生だが）しまったが、なあに。ここまでずっと語り続けたんだ、最後までいこうじゃないか。

まあ実を言うと、もう語るべきことはそんなに残ってはいないのだけれどね。

これまでやってきた事なんて所詮、闘い続けるだけの刀生だったのだから。

だがそんな小生にも願い……と言つか名残りがある。

それは――

「小生には号がない」

最初に話した通り、小生の制作者は銘を付けてはくれなかった。それはいい。親を選ぶことが出来ないのは人も妖怪も、そして器物すら同じ事。

その事については恨むことなど何一つない。

小生が言いたい号とは、人で言う二つ名のようなものと考えてもらっていい。

名高い号を得た同類としては、そう…… 天下五剣 や 神世三

剣 のような大勲功を成したものや、他にも 雷切 や 祢々切丸 のように成した功績により銘を授けられたものもいる。

刀としてこの世に生を受けたのだ、己もまた名誉たるべき号が欲しい。

「だが、小生は認められることはなかった」

世に刀剣多くあれど小生ほど多くの人を、妖を斬り付けた器物など存在しないだろうに！ その功績は認められなかった。否、認められるどころか妖刀扱い。

ああいいだろう。世に悪名高き妖刀として生き続けるのもいいだろう。だがその号ですらも大妖刀 村正 には劣る始末！

「小生が欲しいのは、己を証明するこの世でたった一つの号なのだ」

何時かだったかこんな想いを抱くようになったのは、最初からなのか、付喪神となつてからか、それとも幻想郷に来た時か。

「何時からか」などもはやどうでもいいことだがね。それに、今宵その葛藤も、願望も報われるのだから」

そうこの葛藤は今宵報われる！

それが今日この日、この妖怪の山へ至つた理由。

小生が賜るに相応しい号を授けるであろう存在がいる場所。

この幻想郷にあつて、最も強なる猛者たちが集う場所 妖怪の山。

個人主義の気の強い妖怪たちの中にあつて数少ない、集団を主とする 天狗。そしてその天狗を統括し率いる、古き剛なる恐怖鬼。

だが小生の獲物は鬼の遣いつ走りの天狗たちや、剛とは言え無名の鬼共ではない。

「小生が狙う首は、ただ一つ——！」

妖怪の最強種族 鬼。鬼の中の鬼。

妖怪の山の頭領にして、鬼の大将。すなわち—— 鬼神！！

鬼の四天王と謳われる伊吹鬼や星熊の一角鬼にも魅力を感じるが、生憎と小生が闘り合おうとする鬼神は格が違う。

かつて天竺からこの日の本へ渡り来た古き存在。

日の本にも先住の鬼はあれども、その全てを余すことなく 力で搦じ伏せ従えて、鬼の大將と担がれた者。一説には起源なる神に列なる末裔とも聞く最強の鬼。

その鬼神と今宵殺し合う。自然、この身が震えてくる。恐怖か？武者震いか？

くく……小生にも理解し難いこの感情。

あえて言おう……これは歡喜！！

古よりの時代より小生ら刀剣が授かることを最大の名誉とすその号 鬼斬り。その鬼たちを束ねる鬼神を今宵この場にて断ち切る！この身に宿った生命の、器物としての己に刻む最高の栄光！！小生だけの号！！

この今月今夜——小生の銘に 鬼神斬り の名誉賜わらん！！！！

深い森に行く。

奥深い森に行く。

月の光に導かれるように、小生の足取りは軽く。

場が開けた。

その場所だけが不自然に、円形状の形で森が切り開かれている。まるで……ああ、まるで小生と件の鬼神のための”戦舞台”！！

その”戦舞台”の中央には一つの影。

小生と同じ白い色の着物を着崩した女性。

その衣から覗く肌は鬼という言葉に似つかわしくないほどに美しく艶やかだ。

その姿はこの夜の闇の中にあつてなお輝く白い月の如く。

だがその瞳はこれよりの戦に期待する強者の瞳。黄金の目。

その額には鬼神の名に相応しい、玉のように美しく、それでいて禍々しくもある一本の大角。

これが、最強にして最凶なる、美しき鬼の頭領　鬼神　！！！！

「なんと美しい……！」

ああその美しさはまさに月の如き静寂の美！　しかしてその本性は触れるもの皆焼き尽くす黄金なる熾烈の美か！

ふふ……小生は幸運だ。

これほどの相手とこれから闘えるとは！　これほどの相手を斬ることが出来るとは！

「嗚呼……この素晴らしき闘争を、心躍り我が身奮えるこの戦を！
小生が御神に捧げましょうぞ……！」

「ふふふ、永に続かん妾の信仰心、今こそ”魏怒羅大御神”に御見
せいたしまする……！！！」

互いに誓句の如き言葉を口にする。

それは己の信じる闘争の理念に通じる宣言。

小生は己が刀身を引き出し構え、鬼神はその白魚の如き手に長槍を構えた。

さあ、始めよう。

この美しき月夜の下で、闘争の宴を、己が生をぶつけ合おう……！！

「御首、頂戴!!!」

外章 今月今夜〃鬼と刀・前（後書き）

魏怒羅大御神ってなんぞとか言わないで（あ）

外章 今月今夜Ⅱ 鬼と刀・中 (前書き)

今回は鬼神視点のお話。

日曜日以内に終わらんかった。

話がぐだぐだで、要領を得ないのは仕様ですが。

外章 今月今夜「鬼と刀・中

妖怪の山。

それは幻想郷において最も剛なる種族 鬼 と、その下に従う妖怪集団 天狗 の領域。

彼らは、幻想郷においても一種独立した社会を形成し、おそらくはこの地に住まうどの種族よりも豊潤な環境にあるであろう。最も……弱者には厳しい環境ではあるうが。

”そこ”は妖怪の山の頂近く。
大きなとは言えないが、小さいとも言えない普通の屋敷。
その屋敷の一室に彼女はいた。

その手は白魚の如く、着崩した着物が妖艶な色香を放つ一人の女人。

その顔はほんのりと赤く、手に酒を並々と注いだ盃を持つ。
この妖怪の山に住まう者ならば知らぬ者はいない。
数多の強者統べる、玉の如き「禍々しき一本の角を持った異形。

「うゝむ良い月じゃ。季節外れの名月というのも、たまには良い」

ほどよく酔いも回った宵の刻。

妾は今宵の月を見ながら酒盃を呷る。

時節柄、月見酒は風流ではないのだがの。

じゃがやりたくなつたものはしょうがないじゃろ。

酒は呑める時に呑むのがなんぼじゃ。

妾は 巖木・藤姫（いわき・ふじひめ）

この妖怪の山の主にして、天狗と鬼たちを統べる鬼神じゃ。
他の者からは、 姫 や 御前 などと呼ばれておる。

「ほんとうに、綺麗な月夜じゃ。昔を思い出すのお」

この国に初めて訪れた時も、確か月が輝く綺麗な夜だったのを思い出す。

一体、何年くらい経つじやろうなあ妾がこの国へ渡ってきて。

妾はこの国の生まれではない。

妾が生まれたのは此処よりも遥かに西国。日ノ本の国人間からは天竺なぞと呼ばれておったところじゃ。

この国に来たころは、まだ至る所に神が存在し、同時に妖怪も多数存在していた。

妖怪は人を喰らい、人は妖怪を滅する。

鬼は人を攫い、人は鬼を退治する。

美しき連鎖。

古来より続く闘争の型。弱肉強食の理。

じゃが何時からじやろうなあ。

人が鬼を恐れなくなったのは。

まだ陰陽師どもがいた頃ですら、鬼退治の法と言えば真つ向切つての真剣勝負というのが主流だったんじゃが……あれじゃな、どこぞの武士だか坊っちゃんだか知らんが、酒で酔いつぶして寝とる間に首とる真似しでかしたあたりからかの？

「妾としては、そんな事で首を取られる方も悪いと思うがの」

弱い者が知恵を駆使して闘うのは当然じゃからの。

むしろ妾が信奉せし大神の理念からすれば、闘わぬ方が問題じゃ。正々堂々な方法じゃるが、悪辣で卑怯な手段じゃるが、勝ったもん勝ちが基本じゃしの。

妾も人と同じ立ち位置じゃったら、そのくらいの真似はするじゃろしな。

なんせ――

「妾は真つ向勝負は苦手じゃしなあ……」

「――お姫は本当に鬼とは思えない考えをするよねえ」

「うむ？　おお、萃香ではないか。どうしたこんな夜中に？」

誰もいないはずの部屋に霧が現れ、集い一つの形を成していく。

妾の何気ない呟きに声を返したのは小さな二本角の鬼。

妾の部下で、鬼の四天王　伊吹・萃香　じゃった。

「勇儀が、お姫が一人で酒飲みながらぶつぶつ喋ってるって言うてたから見に来た」

「なんじゃ妾は見世物かえ？」

性格悪いのお妾の部下は。

まあ良いわい。別に何時もの事じゃしの。
気にしない気にしない。

「や、たまには気にしようよ」

「別に妾の害になるわけでもなし」

「鬼神でしょお姫は。部下に馬鹿にされてるって周りに思われるのは癪じゃない？」

「別に好きで鬼神やつとるわけじゃないしの」

言っではなんだが、妾は好んでこの山の頭領なんぞやつとるわけではない。

話すと長くなるが、そうじゃな何百年前くらいから鬼の慣習に従って一（もちろん嘘じゃが）色々やんちゃしてての……気付いたら倒した妖怪がなぜか部下になっとった。

で、その中に鬼も何人かおって「あんたに仕えさせてくれ！」とか言われての。

まあ妾はそこら辺面倒じゃったんじゃが、別にいいかと思って放置しとったら結構大きな勢力になってしまつてな。気付いたらこの妖怪の山を拠点とした鬼の派閥が出来とった。

「鬼が強い者についていくのは当たり前だよ」

「じゃから面倒なんじゃて。ちょっと軽く捻っただけのお遊びでホイホイついてきおつてからに」

「お遊びねえ……私の記憶じゃ喜々として闘ってたような感じだったけど？」

「遊びでも全力でやるのが妾の流儀じゃよ」

はいはい——と、萃香は自前の瓢箪を傾けて酒を飲み始める。その姿はなんぞ親父臭くて、見た目との差がまるで釣り合っておらずつい笑みが零れてしまう。

「あー早よう冬にでもならんかのお……」

「なんで？」

「そりゃー雪が積もればわざわざ外に出る必要がなくなるからの。毎日酒飲み放題で自堕落し放題じゃ」

「……………」

なんじゃその顔は。文句でもあるのかの？
いいじゃないか冬！
冬に飲む酒も美味いぞ！

「お姫……大分酔ってるね？」

「かもしれんの」

なんじゃかの。誰かに言われんと酔つてると自覚できんあたり、大分飲んでおるかもしれんの。

さっきから独り言をぶつぶつ言ってみたり……恥ずかしいのお。

「あーあ、昔のお姫はそんなじゃなかったのになあ」

「昔は昔、今は今じゃ。時代の流れに取り残されてはいかんぞ萃香」

「？」

「——それは人と鬼の関係も？」

急に難しい話題を振ってくるのこの子鬼は。

まあ確かに、人と鬼との関係に関しては、随分昔と違うようになっ
てしまったがの。

それに関しては、取り残されておらんとはいえんわな。

「なんだやっぱりお姫だつて寂しいんじゃないか」

「……ふふ、かしれんのお」

「やっぱり。最近はおも鬼と闘うてことがなくなっちゃったもん
ね……」

寂しげに酒をあおる萃香。

こ奴は人一倍、人と鬼との関係を好んでおったからの。

人と真っ向から闘うことのないこの幻想郷では生き難いかのやは
り。

じゃが—————少しだけ言わせてもらいたい。

人と鬼との関係は闘うことだけではないと。

妾は人に対しては萃香たちとはちいとはかし違う感情を持つてお
るゆえ。

「どゆこと？」

「妾が、一部の人間たちに鬼としてだけでなく、鬼神……特に農
耕を司る神としても祭られておることはしっておるかの？」

「ああ……聞いたことがある……気がする」

どっちじゃ。ま、良い。

それは、この幻想郷に辿り着く前の話し。妖怪たちを率いる頭領などと言われる前の話じゃ。

妾は昔、この山よりも遙か北の山に棲んでおった。

天竺から一人、この国に来て初めての安住の地。

富士の山ほどではなかったが、その頂で毎日酒を飲んで疲れたら寝るという暮らし。

その日その日をのんびりと過ごしておった。

「それって今と別にな変わってないよね？」

「茶々を入れるでないよ」

ま、事実じゃが。

そんな生活を何年か続けた頃、山の麓に人が集まるようになった。最初は別に気にもとめておらんかった。

妾は鬼という種ではあれ、神の末裔でもあるからの。

人を取って喰う必要はなかったし、攫って遊ぶには人はあまりにも脆すぎた。

「それを言ったらほとんどの鬼がそうだけど？」

「妾と他の鬼とを比べる方が間違いじゃろ？」

「……ですよねー」

最初はただの好奇心じゃった。

お山を降りて人の暮らしぶりはどんなものなのかを、この目で見たくなつたのじゃ。理由？ 知らん忘れた。

人里……と言つてもほんとうに村とも呼べん規模の小さな集落。その日喰うものにも困るような貧しい生活。

別に可哀想だとか、同情したとかそういうわけではない。

ま、寂しかったんじゃろなあ。

ずっと一人じゃったし、鬼と言つても一つの生命。たまには普通に誰かと接してみたくもなるわ。

「手始めに農耕具を頑丈な鉄で作つてみたり、土壌を根こそぎひっくり返して耕し直してみたりの」

「お姫無駄に器用だもんねえ」

工作は好きでの。

ま、最初は村人に怖がられておつたが、なんじゃな人は遅しいの。妾が危険な存在ではなく、むしろ自分たちに益を齎してくれる存在だと知ってから、むしろ積極的になった。

妾を鬼さまなぞと呼び、より自分たちの村を発展させるべく、妾に助力を申し出るようになったり。

いや、積極的に成り過ぎた感があつたの。

気付いたらお山に棲む一本角の神様じゃとか呼ばれ始めて、年初めには山にお参りにくる人間まで現れ始めるようになってしまった。悪い気はせんのだが、まあ――、

「それが面倒になつて鬼の風習だとか慣習だとか適当な理由をでっちあげて放浪するようになったんじゃがな」

「お姫それを言ったらお終いだよ……」

言つな言つな。

ま、人と鬼との関係は、なにも殺し殺されというだけではないと言いたいんじゃない。

この幻想郷でもやろうと思えばやれるじゃろ。

まあ……部下の鬼たちが揃いも揃って脳筋ばかりじゃから無理じゃろが。

「鬼は——」

「本来そういうもんじゃと言いたいんじゃない？ わかつとるよ。妾が特殊なだけじゃ」

分つておるさ。

鬼は人の恐怖から生まれた存在。未知の存在に対する畏怖から生まれた妖怪じゃからの。

人に恐怖を与えるのを本能とする生命じゃ。

妾だつて一応は鬼じゃからの。それはわかつておる。

妾が人とあやつて接することが出来たのは、妾の生まれが神の末裔であるという事実ゆえじゃ。

普通の鬼にそれを求めるのは、間違いじゃろうしの。

「それに、なんだかんだ言つても、妾だつて戦自体が嫌いなわけではないしのお」

「そりゃそうだ。じゃなかったら私や勇儀、それに他の皆を従える

なんて出来なかつたろうしね」

そう——萃香を始めとする四天王や他の鬼、天狗たち。いずれも皆、妾がこの手で戦い落とし、本意ではないが部下とした。

「否定はせんよ。おかげで良い仲間を得たとも思っておる」

「そりゃ、ありがと」

「じゃが妾としては、一度くらいは田村麻呂と鈴鹿みたいな出会いを試みたいという想いもあったんじゃがなあ……」

「あ、それ無理」

「……どういう意味じゃ小娘」

とりあえず萃香は殴る。

ま、そんな風に過去の思い出に浸り、そろそろ酒も尽きようかという時分であつた。

突如として山の全域に、山の全妖怪に直接語りかけるような慌ただしい声が響く。

（——こちら哨戒中の犬養！ 山への侵入者あり！！ 繰り返す侵入者あ——っ！？） 繰

「なんじゃ……侵入者とは今時珍しく気骨のある者もおつたものじやの」

「ありやりや、どうするお姫？」

妾の耳に聞えてきたのは若い男の声。

話す内容から哨戒の白狼天狗なのじやろう……ああ、そう言えば聞いたことがあるな。最近新しく入った天狗に千里先までも声を届ける能力を持ったものがあると。恐らくはそ奴が今宵の担当者であつたのだろつなあ。運の無い事じゃ。

だが、侵入者とは面白い。

本当に、最近はこの山に乗り込んでくるような根性のあるものがまるでおらん。

まあ確かに天狗衆や配下の鬼たちがたむろするこの山に挑むのは、よほどの強者が命知らずの馬鹿かの二択ではあるのだがの。

それにしたつて弱腰な連中ばかりじゃ。

おかげで部下たちが退屈しっぱなしでだれて来ておる。

毎日毎日、酒を飲んで肉を食つて、飽きたら喧嘩するか寝るかして。

情けない。ああ情けない。

実に情けないの一言じゃの。

「いやいや、お姫が言えたもんじゃあないと思うけど」

「やかまし」

他人と比較するなぞ失礼じゃぞ。

他と競争することのない今の生活は樂じゃが、それは闘獄の理念から外れている。

いや、悪いことじゃとは思つたらんがね。

だが――、

「面倒じゃのお……萃香お前が行ってきておくれ」

「嫌」

即答じゃった。

清々しいほどに即答じゃった。

「……………一応聞いておくが、なんでじゃ？」

「たまにはお姫が動けば——？」

「妾、一応鬼神じゃぞ？」

「だから——？」

「いや、妾が一応一番偉いんじから、その……」

「お姫さー最近闘ってる？」

……………なにが言いたい小娘？

いや、そりゃ最近是天狗たちや鬼たちに戦はまかせっきりではあるが——

「……………太った？」

「——妾が出る！！邪魔をするでないぞ萃香！！」

「……いつてら——」

認めたくないものじゃな、若さゆえの過ちと言つものは……なに？ 使い方が違う？

知らんよ。そんな事はスキマにでも言っとくれ。

あ、あと萃香は後で生き埋めな。

「おっと……その前に、お祈りせんとな」

妾は部屋の奥に備え付けてある小さな神棚の前に座り直す。
それは鬼と言う種族からすれば異端とも思える行為。

「お姫は……本当に変な鬼だよね」

「まあ……普通は神に祈る鬼はおらんしな」

妾も素直にそう思う。

じゃから妾は異端なんじゃ。神に祈るといふ行為を実行する妾は鬼であつて神、神であつて鬼。

じゃが妾は鬼神である前に、一つの生命じゃ。抛り所ぐらいはあつて当然。

いや、少し違うかの？

「生きるという事は戦ふこと。戦ふという事は生きるといふ事。生命の常は戦ふ事。戦ふ事は生命の常。生命の義務とは戦い続けることとなれば、恐れるなかれ。あるがままに受け入れよ」

「されば闘獄の理、ここに在り——だっけ？」

「さよう。我が大神——”魏怒羅大御神”のお教えなれば」

「言いたいことはよく分かるけどね。私たち鬼が”それ”だもん」

”魏怒羅大御神”

妾が信仰する偉大なる闘争の御神。

三つの首で表現される、戦の理そのものを体現される御方。

そう。

妾たち鬼こそ、この御神のお教えを最も忠実に体現する種なれば。

妾は祈るのだ。信仰するのだ。

妾が祖たる闘獄の大君を。

信仰を。

揺らぐことなき信仰を。

ああ祈れ。

祈りの果てに我らが真の理想郷はこの地へ来る。

ああ祈れ。

祈りの果てに我らは真の理想郷へと至る。

祈り。祈りじゃ。

祈り祈りて、教えを守り……そして実践せよ。

妾の戦は鬼の本能に従わぬ。

妾の戦は全て信仰の御心に従うべし。

「ふふ、妾が異端視扱いされたのも納得ではあるうな」

「それがお姫でしょ？　だったら私はなににも言わないよ」

「ふふ、そなたは優しいの萃香」

信仰こそ我が根底。

信仰あれ。祈りあれ。

信仰するは我が偉大なる起源。

「ああ、今月今夜——　良き戦がありますよう」

祈りを終えて、手近においてある愛用の槍を持つ。

ただ頑丈さだけが売りの面白みのない普通の槍じゃ。

未だ見ぬ侵入者のことを想い——　ついつい笑みが零れてしま
う。

妾は今どんな顔をしているのかの？

ま、良い。どんな顔をしていたかは、後で萃香にでも聞くとしよ
うかの。

さて……行くか。

山を下り、森へ至る。

深い深い夜の闇、月明かりのみが照らす森を。

月の光に導かれるように、妾の足取りは軽く。

場が開けた。

その場所だけが不自然に、円形状の形で森が切り開かれている。
まるで……ああ、まるで妾と件の”侵入者”のための”戦舞台”

！！

その”戦舞台”に昇り来るは一つの影。

妾と同じ白い色をした、外の世界の服を纏った男。

まるで、一本の鋭利な刀に思える直立不動の姿。

その身から放たれる喜々とした感情は刃の如く。

その瞳は爛々と輝く強者〃狂者の色。

鬼神である妾の氣に押されるどころか流すように、飄々としていながら威風堂々とした佇まい。

稀に見る生粋の戦闘者。修羅の如き白い刀……！

「これは——祈りが届いたかのお……！」

これは予期しておらなんだ。

これほどの者とは思わなんだ。

この刺すような闘気は、並みの鬼すら凌駕しかねない！

これほどの者と闘えるとは！　これほどの者と”信仰”を交わすとは！

「ふふふ、永に続かん妾の信仰心、今こそ”魏怒羅大御神”に御見せいたしまする……！」

「嗚呼……この素晴らしき闘争を、心躍り我が身奮えるこの戦を！
小生が御神に捧げましょうぞ……！」

互いに誓句の如き言葉を口にする。

それは己の信じる闘争の理念に通じる宣言。

妾は改めて己が長槍を構えなおし、相手もどこからか刀を抜き出し身構える。

さあ、始めよう。

この美しき月夜の下で、闘争の宴を、己が生をぶつけ合おう!!

「——此処に闘獄の理を実践せん!!——」

外章 今月今夜Ⅱ 鬼と刀・中 (後書き)

元ネタは知ってる人は知っている。

まあ歴史ねつ造も入ってるので、時代がずれてはいますが。

外章 今月今夜Ⅱ 鬼と刀・後 (前書き)

戦闘描写もっと上手になりたいです。

視点がころころ変わるので面倒かも。

外章 今月今夜Ⅱ鬼と刀・後

妖怪の山の頂近く。

深い森の中にその場所があった。

円形状に切り開かれた空間。

天に輝く月の光を受けて、ぼんやり浮かび上がる幻想のような舞台。否、決闘場。

対峙するのは二つの異形。

一つは長身白衣の男。その手には己の背に匹敵する長さの大刀。

一つは有角妖艶なる女。その手には不釣り合いな無骨さの長槍。

今月今夜の決闘。

二人だけの”戦舞台”

視点・陽炎

「——御首、頂戴！——」

小生は己の本体とも言うべき大刀——長さ七尺一（約二百センチ）の大大刀だ——を振るい、鬼神の首を刈り取りに跳ぶ。わずか一歩で軽く大地を数十メートルは蹴り飛ばし、一気にその白く覗く首へと目掛けて刀身を下ろす。

小生本体の重量と、そして刀身を振るう速度から導き出されるのは、いかな怪異ですら一撃で斬り殺す必殺の剣。

そのはずであつたが——

——バギンッ！——

鉄と鉄とがぶつかり合うような、硬質な音が響く。

「む……！」

「ぬるいのお」

鬼神はその手に持つ長槍で迎撃するのではなく、その身に羽織る“着物”、その袖部分を振るって小生の一撃を横殴りに叩き落とすのだ！

ああ……確かに刀というものの性質上、横合いからの一撃には弱いもの。

だが……あの速度からの斬撃をこうも見事に、事もなげに潰すとは……ははは、面白い！！

「良い衣だね。まさか小生の斬撃を、そんな布の一振りで落とすなんて思わなかったよ」

「ほほほ……軽く振るっただけなのじゃがなあ。なに存外、大した一撃でなくて助かったぞ？ お気に入りなのでなこの着物は。傷が付いては目も当てられぬ」

くすくす——その美しくも妖艶な顔に笑みを浮かべて鬼神は笑う。

はっ……言ってくれるじゃないか。

余裕綽々——と言った風情で優雅に笑い続ける鬼神。

なら……その顔を今から驚愕に変えてあげよう。

「これから、たったの”一発”も君の攻撃に中らない事を、そして

君が小生の一撃をただの”一度”も回避できないことを、小生は宣言しよう」

「ほう……鬼の頭領たる妾に向かって、よくぞ吼えた……！」

小生の挑発ともとれる言葉に、鬼神は事も無げに応じた。

流石は鬼神と言うべきか。

その威風堂々たる佇まいは、なるほど敬意を払うに相応しい。

だが、その余裕は戦場では命取りにしなければならないことを教えてあげよう！

視点・藤姫

初手から妾の首を斬りに掛かるとはの……。

余裕綽々——などとあの男は思っているのだろうか、ちと違う。

実のところは冷や汗ものじゃ……あんな大業物で首なんぞ狙われ
ては鬼も案山子も違いなど無い。

威風堂々？ ああ……ま、一応は長という立場じゃなあ。見栄
くらい張らんと。

しっかし……”能力を使って”防いだはいいが、はてさてどうし
たものかの。

「まずは……これだ！」

妾の内心なぞ気にも止めず、男は一度距離をとり、小気味良い啖呵を切つて、刀をその場で振るう。

そんな距離から一体何を……そんな妾の疑念は直ぐに晴れる。

刀を振るう度に作り出されるおかしな風の流れ。見えざる驚異。

「翔けよ風斬——鷹爪刃——！！」

「鎌鼬か……？」

ちなみに妖怪の方ではない。

が、妖怪の鎌鼬が引き起こす現象に倣いその名が付けられた純粋な、それでいて魔性の剣技。

驚異的な技量と尋常ならざる速度から生み出される風の刃。

それが妾に向けて六度振られる。

その様子は確かに、その名の通り……獲物を狙う鷹の爪の如く。

「ほお……！綺麗な太刀筋じゃな。されど——回避出来ぬ、と言つほどではないぞ？」

確かに並みの妖怪なら細切れ、天狗でも一つだけならともかく、六つ全てを避けきるのは難しかろうが、鬼の身体能力を舐めてもらつては困る。

この程度の攻撃は感覚だけでも回避は可能。

トン——っと、軽く後ろに跳躍し、

「ああ、一つ言い忘れていたがね――」

男が何かを呟く。

妾はそんな言葉を聞く事なく風の刃を避け切って……

「閉じる」

「これは……!?!」

完全に避け切ったと思った刃が、その軌道を変えて妾を中心に集まってくる。

四方と天を完全に閉じるように迫る風の刃。
それはまるで檻のように。

「鷹の爪は獲物を逃がさない。鋭いその爪はそのまま獲物にとっての檻となるのさ」

そんな説明台詞なんぞ聞いてられるか！

妾は”能力”を発動させて――！！

ああ、そしてもう一つ――と、語りかけるように誇らしげにその言葉を吐く。

「小生の能力は、見極める程度の能力だ」

視点・陽炎

ふむ……直撃か。

奇をてらった攻撃かもしれないが、まあそれも戦の常。

流石の鬼神も四方と天上を刃で固められては抜け出せなかった。

もつとも、鬼神がそのように行動することは、小生は最初から”見極めて”いたのだからね。

小生の能力は、見極める程度の能力。

相手の行動——攻撃も防御も回避も、その全てを見極める事を可能とする。

まあ言ってしまうえば軽い未来予知の”ような”ものさ。

相手の行動……回避する先が予測出来てさえしまえば、攻撃を当てることなんて造作もない。

最初から計算づくさ。

けれど——、

「まさか、これで終わりじゃあないだろ？」

「——つたり前じゃあ——！」

土煙の中から怒声と共に鬼神が飛び出してくる。

その勢いのままに槍を突き出してくる——だが、小生の能力にとつてはこの攻撃も予測済み。

如何な攻撃をも瞬時に”見極め”その全てを回避してみせる。

小生は自らの宣言通りに、鬼神の攻撃その全てを回避しきつて魅せようじゃないか。

「なんだ……思ったより傷は深くないようだね」

「生憎との……体は頑丈なんじゃよ鬼だけに」

軽口を叩く鬼神。

成程、確かに頑丈だ。

見ればその着物は鷹爪刃で切り裂かれたのだろう、ぼろぼろになつてはいるが、その肉体には軽く擦り傷程度のものしか見当たらない。

血すらも流さないとは、厄介な肉体だよ鬼つてのは。

やれやれ……やはり小生の本体で攻撃するしか有効打は与えられないかい。

ま、もとよりそのつもりだがね。

「しつつかし——」

「ん？　なんだい？」

鬼神殿は何やら言いたいことがあるようだね？

ま、予想はつくけれど。

「見極める程度の能力……と言ったか？　実に戦向きの能力を持つておるの。戦向きして厄介過ぎる……と言つか卑怯過ぎるんじゃないかの！？」

ああ、言いたいことはよく分かる。
小生自身もそう思うさ。

「確かにそうだろうね。鬼神殿、君以外にも色々な妖怪や人間たちから言われたよ。卑怯過ぎるとね。いやはや……強すぎる、と言い直してもらいたいよ」

「じゃろうな。どれだけ攻撃しても回避する。逆にそなたの攻撃はほぼ必中。ああ、卑怯過ぎるくらいに強力な能力じゃよ。単純明快なものほど強いとはよく言うわ」

「然り然り……全く、小生の能力など、妖怪の賢者殿ほど応用性に優れているわけでもないのに面倒な話さ。それで——やる気を無くしてしまったかい？」

ま、それでは困るのだけれど。

こんな事でやる気を失ってしまっては、いざその首を取っても己の恥となるだけ。

気概の殺がれた鬼の首など、取っても汚名にはなれ名声とは成りえない。

だがそんな心配事は杞憂なようだ。
なぜなら、

「——はっ！ いやいや、面白い！ 逆にやる気が出てくるぞ
！！」

「ほお……」

珍しい。珍しい思考の持ち主だね。

大概の相手は小生の能力の仔細を聞けば、諦めてしまうことが多いのだけれど。

「鬼とはそんなものじゃっ!! 相手が強ければ強いほど燃える! 難儀な性格じゃが、それが鬼!!」

それに——、と鬼神殿はなにかを呟く。

「強い男は嫌いではないしの……てか始めてじゃないかの? 妾相手にここまでやれたのは?」

「——は、それは光栄だと言っべきだろうね」

これほどの美しい女人にそう言われるのは、刀と言えども男だ、嬉しくないわけがない。

件の鬼神……小生が己の号として相応しいと認めた相手からの言葉だからこそ、なお喜ばしい。

「ふふ……」

「はは……」

「ふふはははははははは——!!——!!」

気付けば——小生と鬼神は互いに笑っていた。

最も、その笑みは他者から見れば凄惨なものだったろうが。当事者でなければ分るまい。

ああ、分ってたまるかこの感情!

「ああ——愉快愉快!! ふふ、すっかりと名乗るが遅れてし

まったのお！！ 妾こそは妖怪の山が主にして鬼と天狗が頭領！！
巖木・藤姫である！！ 改めて、妾と死合う相手と認め歓迎し
ようぞ！！！！」

「実に光栄だが——だからこそ、ああ、まったくどうかしてい
たよ！！ 名乗るのを忘れるなんてねえ！！ 武人失格だ……故に
こそ、君が小生の最高の獲物だと認識して名乗ろう！！ 小生は薄
刃・陽炎！！ 千年を超えた大業刀である！！！！」

互いに名乗る。

戦の作法を失っていたのは互いに同じだ。
故にこれにて、愉快的談笑はお終いだ。

さあ続けよう。

あるのだろうか？

鬼神殿にはまだ、奥の手が。

まだ小生は、鬼神殿の——藤姫殿の”能力”を見ていない！
さあ、小生に魅せてくれ！

貴女の力を！

鬼神の力を！！

視点・藤姫

「ああ、見せてやろう！ 魅せてやろうさ！！」

活目せよ！

そして知るが良い！

鬼を——古き強者を束ねる鬼神の力を！
数千年を闘争に費やしたこの力を！
妾の”能力”を！！

「——参る！！」

「——来い！！」

そして、妾は己の能力を全力で始める！！
極限の”静”と”動”の力を！！

「——閃千 千手観音——」

彼奴は——陽炎はその刀を胸に構えた状態から、刹那という
言葉すら生温くなるほどの速度の斬撃を繰り出し始める。

千手観音という名のままに、千の斬撃が妾に向かう。
だが——妾はそれを”避ける”つもりはない。

「一撃じゃ——、一撃で決めるぞ」

全身の筋肉から力という力を抜く、完全な脱力状態。
極限の”静止”状態。

千の刃が迫ってくる……だが静の姿勢は崩れることはない。

静かに。

静かに。

静かにその姿勢のまま。消力の如く。

だが……妾の心はその熱い想いを解き放つ時を、今か今かと待ち続け――、

「――君の能力は、まさか――?!」

「お？ 見極めたのかの？ なら、理解出来るな。極限の”静”から生み出される、極限の”動”の一撃……回避不可能の一撃を!!」

そして、ついに弾ける。

完全な脱力、”静”の状態から、瞬きすら追いつかない高速の”動”へと。

溜めに溜めたこの想いを、火の山の如くにそなたにぶつけよう!!

――鬼神 光陰は矢の如く !!!

妾の手より繰り出されるのは、高速という言葉ではもはや追いつけない極限の”動”の力により突き出される槍の一撃。

如何に見極めようと、不可避なるこの一撃を超えられる者はいない!!

「――っ!!」

「これぞ、妾の能力……即ち、静と動を操る程度の能力」

槍は決して誤つことなく、陽炎を捉えた。

いつ攻撃したのか、否、いつ動いたのかも分からないほどの、超高速の一撃。

無音の世界に響いたのは、ただ一つの硬質な音。

白衣の男・陽炎は、満身創痍と言った有様であつた。

その真つ白だった服は血で染まり、己が刀を杖代わりに立つのがやっとといった風情。

だが、その戦意はまだ死んではない！

「ふふ…… たつた一撃……一撃、”防いでも” なお、これかい……
鬼神とは怖いものだ」

「そなたも、だ。まさか……妾の一撃を避けるのではなく、刃で”受け止める”とはのお」

「君と同じように、生憎と小生も頑丈なものでね……」

そう、陽炎は防いだのだ。

あの電光の如き槍の一撃を。

その大太刀の刃を持って、槍を防ぎ受け流したのだ。

藤姫によつて大業物と称された陽炎の本体たる刀。

千年にもおよぶ闘争によつて、その刀身は並みの刃金を上回る硬度を得ていた。

ゆえに、防げたのだ。

「ふ、ふふ、ふはは、あっはははは——！！！！」

互いに思わず笑いが零れる。

楽しい。

ああ、楽しい。

戦いがこれほど楽しいのは一体何時ぶりか。

「ああ……こんなに楽しい時間を何時までも過せたらどれだけ、幸せなことだろうね」

「同感じゃよ。何時までも、ああ何時までも……叶うならば戦い続けたいものだな」

だがそれは有り得ない。

終わりの無いものは無いのが、この世の常。

それは戦もまた同じ。どれだけ願おうとも何時かは終わる。

なら、せめてこの一時を思う存分楽しもう。

闘獄の理に則って、恨まず憎まず自然のままに、いまある戦を楽しもう。

勝敗の結果によらず。

もはやこの戦に、勝ちや負けなどどうでもいい——！！！！

「ゆえに、未練一つ残さぬよう、小生の最大の一撃で葬ろう——
——！！！」

「はっ！ なら妾もそれに応えよう！！ この熱い想いを！！ 余
す事無くそなたに贈ろう！！！」

極斬奥義 国士無双の斬 ！！！！

鬼神奥義 巖木山鬼神譚 ！！！！

二人の強者の最大の攻撃がぶつかり合う。
そして遂に、今月今夜の舞台は幕を閉じたのであった。

舞台の降りた決闘場。

二つの影は健在だが、違う点が一つだけ。

それは即ち、地に立つ者と、伏す者の違い。

今月今夜の決闘の、その勝者は——鬼神、巖木・藤姫であつた。

藤姫は、陽炎の傍に立ち、じっと見つめている。

藤姫もまた勝者でありながら、散々たる姿をさらしている。

その手にあつた長槍は半ば砕け折れて、そして鬼の証である角を、断ち切られていた。

だが、その表情は安らかで、むしろ喜ばしそうな顔である。

「……殺一（壊）らないのかい？」

「なんじゃ、殺して欲しいのかえ？」

「もちろん、嫌さ。けれど、それが闘獄の理念。勝者は敗者に最期を与える義務がある。……さあ、やりたまえ」

口では嫌だと言つてはいるが、一切迷い無い口調。

己の敗北に悔いを残さず、むしろ誇りとすらも思えるこの戦。

この美しい鬼神が己の生の終着点であるというのは、ああ、喜ばしくもある。

誇らしき戦の果てに得た、このなんともいえぬ感情。

この想いを抱いて逝けるなら本望。

ゆえに止めを、と。

しかし――、

「ごめんじゃな……っと！」

「なにを……!？」

”なにを”――その言葉が意味するのは、藤姫が陽炎を己の肩に引っ掛けるといふ行動を指していた。

「主を殺すのは止めじゃ。代わりに……妾の”もの”になれ」

「な、何を言つて——」

「敗者は勝者の言うことに従ふべきもの……じゃろ？」

「そなたほどの逸材、喪うは惜しい。失った角と槍を差し引いてもなお、そなたは妾にとって有益じゃと判断した。ゆえに——」

——妾のものになれ。

聞き様によつては、告白とすらとつて聞えるその台詞。
だが、本人はいたつて真面目である。

「共に目指さぬか？ 闘獄の果ての果て。妾の夢の果てを、共に？」

「あ——は、はは……鬼神を討たんとした者が、鬼神と共にある一振りの刀となる——ああ、ああなるほど、それも……面白い」

「では——」

「ああ——貴女の夢、その果てを共に目指すのも一興。貴女の所有物となろう」

鬼は戦つてこそその生。
刀は使われてこそその生。

戦を信奉し、人を愛し、闘獄の理を信仰する鬼神と。
戦を常とし、人妖を殺め、闘獄の理を当然とする付喪神。

二つの異なる生はその道を交え、今月今夜一つの道を歩み出す。
その行く先を照らすのは、ああ、その輝く月のみである。

ところで――

「……せめてこの体勢は勘弁してくれないかい？」

「い・や・じゃ」

余談

今月今夜の決闘から数えておよそ百年後の話し。

後に博霊大結界と呼ばれる、外界との隔絶を意味する結界敷設の
おり、それに反対し反旗を翻した妖怪たちがいた。

大妖怪を含む数多の妖怪が結界の構築の妨害の為に博霊神社へと
侵攻しようとしたが、そんな妖怪たちの八割近くを斬り伏せた大刀
使いの鬼神が現れ、それを防いだという。

その鬼神――角の無い美しい女人の姿をした鬼神の傍らには
常に一人の白衣の青年が付き添っていたとか――。

「臨むのは、遙か遠き闘源郷。目指す戦の時を詠み、永の時超え、

我らを別つ者は無し」

幻想郷縁起なキャラ解説#3（前書き）

本編はもう少し待ってくださいね。

幻想郷縁起なキャラ解説#3

山の哨戒天狗、努力する天狗

犬養・葉賢 Inukai - Youken

種族：白狼天狗

能力：千里先まで声を届ける程度の能力

危険度：低

人間友好度：普

遭遇頻度：普

主な活動場所：妖怪の山

妖怪の山の入り口付近を警戒するように飛び回る下っ端天狗。

千里先まで声を届ける能力 とは、呼んで字の如く、千里先まで離れた相手にも自分の声を伝えることができる。

白狼天狗でありながら純粋な実力では、鴉天狗以上・大天狗以下という実力者。

剣術、弾幕戦ともにそつなくこなすとか。

努力し続ける天狗という珍しい思考の持ち主であり、木端ながら天晴れだと言いたい（ 1 ）

昔に薄刃・陽炎氏と何やかんやあつたらしく、今でも仲はよくないとか（ 2 ）

その割によく一緒にいることが多い（ 3 ）

「椀に加えて何としても私の助手に……」

—— パパラッチな鴉天狗

「逃げてー！ 先輩逃げてー！」

—— 幸薄い白狼天狗の少女

「互いに切磋琢磨できるいい相手だと思います！」

—— 半人半霊の剣術少女

1 ほとんどの天狗は努力するまでも無く強い種族。

2 肝心の陽炎氏はそうでもないようだ。

3 修行と称して暇があれば付き纏っている。どちらが、とは言わないが。

付喪神、鬼神の懐刀

薄刃・陽炎 U s u b a - K a g e r o u

種族：付喪神

能力：見極める程度有能力

危険度：高

人間友好度：低

遭遇頻度：低

主な活動場所：妖怪の山、地下

千年も前に造られた刀の付喪神である。

普段から白い外界の憲兵服を着ているが、本体は刀であり七尺の長さを持つ大太刀（１）

見極める程度の能力　を持っており、どんな攻撃も防御も、回避行動すら見極めてしまうという単純ながら強力な能力。

色々と使い方があって、本人（刀）の趣向で闘いに関連したことにはしか能力を使わないが、やろうと思えば相手の器量を”見極め”たり、器物の真贋を”見極め”と言った使い方も出来るらしい。

元々は無銘の妖刀として様々な時代を駆け抜けてきたが、百年ほど前に妖怪の山の鬼神と対峙。紆余曲折あつて鬼神の愛刀として以後珍重されるようになったとか（ 2 ）

長年戦場を渡り歩いてしたこと、そして刀としての本質からか人や妖怪を斬らないと気が済まない時期があるらしい。こんな時は妖怪の賢者が用意した相手を斬っているらしいが、物騒な話である（ 3 ）

弾幕ごっこを子供のお遊びと言い張るが、その実遊びは遊びで楽しむものだと考えているらしい。

「そついや最近会ってないな……」

——　　なんだか寂しそうな焼き鳥屋さん

「厄いわね……　本当に、あれは厄いわ」

——　　厄神さまが見てた

「あの人の心はもう読みたいとは思いませんね」

——　　地底のさとりん

「うふふ、どんな刀も使いようですわ」

——にやにやと嗤う妖怪の賢者

1 普通の人間には使いこなせないだろう。と言つか何を相手にするつもりなのだろう。

2 見ていて甘い光景である。

3 外の世界の死刑囚や危険な妖怪が主らしいが。

闘獄の信徒、巖しき山の鬼神

巖木・藤姫 I w a k i - H u j i h i m e

種族：鬼、神（１）

能力：静と動を操る程度能力

危険度：高

人間友好度：普

遭遇頻度：普

主な活動場所：妖怪の山、地下

妖怪の山の主、鬼神。

鬼や天狗の頭領であり、最強の鬼であると同時に神でもある。

静と動を操る程度能力 は非常に曖昧な能力である。

鬼神曰く完全な脱力状態から最大速度までの過程をすっ飛ばして動けるようになる能力だとか。 逆に動いている状態から静止状態にすることも可能な模様。

自分だけでなく、相手にも能力を適用することも出来るようだが、自分で自分に能力を使用した時の方が強力だそうだ（２）

とある北の霊峰で神様の真似事をしていた事があるらしく、今でも外の世界では鬼神様として信仰されているとか（ 3 ）

普段は地底の旧地獄・繁華街に棲んでいるが、わりと頻繁に妖怪の山にも出没している。もちろんその傍らには件の陽炎氏も一緒に随伴している。

その様子はまるで逢引のようだと言われているが、案外乙女ちつくな面もあるのかもしれない。

鬼だけあつて強力な身体能力を持つているが、実は他の鬼と比べて特別強いというわけではないらしい。彼女が最強の鬼神と言われるのは、自身の能力をどうすれば最大限・最大効力で使えるのかを理解しているのが主な要因と思われる。

幻想郷でも珍しい宗教家であり、闘獄の理を広めるために人里にもたまに訪れる（ 4 ）

「お姫は丸くなったねえ……精神的にも物理的にも」

—— 飲兵衛子鬼

「地道な信仰活動が大事なんですネ！」

—— なぜか共感している現人神

「昔みたいに本気で喧嘩とかしてみたら面白いかもね？」

—— 妙に穏やかなフラワーマスター

「地元の信仰って根強いからねえ」

—— 昔を思い出してる崇神

- 1 鬼であると同時に神でもある。
- 2 ちなみに相手に使うと行動を無理やり静止させるらしい。強力だが鬼らしくはないのだろう。
- 3 神社まであるとか。
- 4 この宗教（？）簡単に言うと、人生は戦いの連続だ！と
いう教え。

幻想郷縁起なキャラ解説 #3 (後書き)

ちなみに陽炎&藤姫の必殺技は弾幕ゲーにあるまじき居合抜き。

第二章 生命再誕Ⅱ起源・氷獄（前書き）

何時になっ たら人類は誕生するんだろう？

第二章 生命再誕Ⅱ起源・氷獄

視点・????

——では次のニュースです。歴史の定説を覆す大発見か？
ユーラシア大陸で新たに見つかった隕石跡地についてです

「ふーん、大発見ねえ」

朝、大学に行く前になんとなく見ていたテレビでは、ユーラシア大陸で新しく見つかったという隕石のニュースをやっていた。別に興味はなかったのだが、今日は何だか早めに起きてしまつて大学に行くにもまだ余裕があつた。

この隕石跡地は年代から見て、一億年よりも前のものであると発表され、その範囲は土砂に埋もれているであろう場所を考えると別地域にまで広がっているものであると——

一億年前。

この星に今よりもなお大きな生物が活動していた時期だ。

ただこの現場に残された隕石の跡を考えると、この場所に堕ちた隕石は百から二百を超えると考えられており、更にほぼ同時期に多発的に堕ちたものと見られております

「……よく地球無事だったわね」

百から二百って……。

私みたいな普通の思考の人間からしたら、どう考えても地球滅亡

なイメージが付きまとう。

まあ実際には今の生活があるんだから大丈夫だったんだろうけど。

この規模の隕石が同時に落ちて来たとすれば、地球の天候はおろか、地殻深くまで影響を及ぼしていた可能性が高いとみており、現在の生命発祥のメカニズムや地形の形成の過程に繋がるのではと隕石跡地を発見した研究チームは会見しており――

「生命発祥ねえ」

確かにそれだけの規模の災害が起きていたのなら、説得力はあるかもしれない。

たった数十メートル単位の隕石でも、地上に勢いよく落ちたら巨大なクレーターを刻む可能性だってあるのだ。

それが百や二百も立て続けに起これば、なにが誕生しても可笑しくない……と思う。

まあそれ以上に絶滅する生物のほうが多かったんだろうけど。

さらに研究チームはこの隕石群が恐竜絶滅の鍵を握るのではないかと発言しており、これからの詳しい研究に期待が寄せられています。では次のニュースです――

――ピッ

私は黙ってテレビを消す。

結構面白そうな話題だったけど、お生憎様。

私ってば恐竜とかその辺りには興味ないのよねえ。と言うか、今時恐竜の話題なんて子供か研究者ぐらいしか喰いつかないんじゃない？

けどまー、

「メリーは案外好きそうな話題だね」

もちろん冗談である。

「さて——そろそろ行きますか」

この数十分後。

「冗談のつもり——だと自分で言っておきながら、まさか件の親友にこのニュースについての考察を延々と語られ続けるハメになるとは思ひもなかったが……」。

視点・闘獄

極寒地獄。

氷に閉ざされた大地と空。

海も凍りつき真白の雪が降り続く。

以前よりなお、その鋭さと厳しさを増した氷獄世界。

あの闘争——星の彼方よりの悪意との闘争から幾度目かの時を経た。

あの時。

奴が天へ消え去ったすぐ後、空の彼方から降り注いだ無数の流星。それらが大地に降り注ぐのを防ぐために迎撃しようとした。

数千などという数ですら生温いほどの隕石群。それらを全て撃ち落とすのは、如何に奴との戦闘で強化・進化したこの身でも不可能に近かった。

ましてや一匹である。

兄弟たちが健在でさえあれば、あるいは全て駆逐するのも可能だったかもしれないが、それも今更の話し。

その結果が――

「この有様が……」

かつて地上に生息していた生物の大半は、この時撃ち落とし切れなかった隕石群の衝突による影響で”ほぼ”死滅していた。

最も集中的に堕ちた場所である、”ここ”は特に酷い。

隕石群の衝突で大地は大きく抉れ、その時の衝撃が周囲の原生植物を根こそぎ消滅。さらに舞いあがった粉塵が完膚無きまでに空を覆い尽くし、いまや暗黒の時代。かつての炎獄とは正反対の属性。

生半可な生命では決して生き延びることが出来ない環境へと変貌してしまった。

生きる”戦う”ことさえ出来ずに死んだ生命達。
それを生み出してしまったのは我の罪。

我はそれを悔いる。

だが……だが、しかしだ――

「だが、それでも生命は生き続けている」

この環境の中でも生き続けている生命はいる。
死滅した生命は多かった……だが、決して絶滅したわけではなかった。

生命とはかくも強いもの。

生命は決して生きること、戦うことを諦める事無く、以前にも増して強く進化しようとしていた。

この環境に適応するために甲殻を、鱗を厚くしようとする者、または寒さを凌ぐために体表に毛皮を生やすようになったもの。あるいは生活場所を地上ではなく大地の下へと移したものなど。

生き延びるために、生命は以前以上に活発に活動する。

生きるために戦う——その輝きを我は賛美しよう。

「それでも我が罪は消えぬ。母なる星へ与えた影響は、大き過ぎた」

先にも言ったが……奴の攻撃を防ぎきれなかったが故の今の惨状。

”本来”辿るべきだった未来は大きくずれた。

いや、ずれとは違うか。

正史であれば、この地とは違う——遠い大陸に堕ちるはずだった隕石。

だが実際問題、隕石はこの地へと降り注いだ。

結果としては、大多数の生命の死滅と新たな生命の進化……という本来の道へ繋がったのは奇跡に近い。

だが現状だけでは判断できない事項も多い。そして、遠い未来までへの影響を考えれば、

「これだけでは、済まんであろうな——」

我が未来への影響を思案する最中、その声は聞えて来た。

「『……！！』」

獣の声——咆哮だ。

その咆哮は甲高く威嚇する響きの類。
氷の世界で逞しく生きる生命の声。

「……これは？」

その声に混じって、わずかに聞えた小さな何か。
物理的な音とは違う別の何かだ。
我はその声の元へと移動する。

闘争の気配。生命の気配。
なによりも——、

「この感じは——」

そこは吹雪によって全面が白く閉ざされていた。
音吹雪くその世界では視覚などなんの頼りにもならない。
辛うじて声を頼りにその声の主を探し出し、その者たちはいたのだ。

「竜、か……」

そこには真白い竜がいた。
恐らくこの極寒の世界に適応した結果なのだろう。
白い世界に溶け込むように甲殻が白く、凍てついた大地でなお機動力を損なわないよう翼に棘を生やした竜の姿——それが三匹だ。

兄弟か親子かは不明だが、その手足に生えた鋭利な爪と琥珀色をした牙をもつて、白い何かと対峙している。

「あれは――」

吹雪が弱まり、その姿が鮮明になる。

その姿は異形。

虫に似た容貌の白い陶器の如き甲殻を纏った巨体。一對の複眼と大角を持つ氷界の主。

我が感じた闘争の臭いと……我らによく似た臭いの主。

我はその姿に見覚えがあった。

(……………)

「我が兄弟……やはり生き延びていたか」

それは奴との戦いで、我らに先んじて戦闘を繰り広げていた新しい起源種。

真白なる氷の世界、凍てつく氷河の記憶から生まれた星の子。

我らの兄弟――氷獄世界。

そんな私の兄弟に対峙する三匹の白い竜は、威嚇を繰り返しながら氷獄の周りをぐるぐると廻る。

体格差は歴然としている。

白い竜一匹の大きさは、氷獄の大爪どころか中ぐらいの爪一本程度の大きさだ。

普通は襲おうとは思わないだろう。

だが――

「生き延びるためには、戦わなければならない時もある」

氷獄の甲殻は、よく見れば傷だらけであった。
恐らくは奴との戦闘で受けたダメージが完全には回復しきっていないのだろう。

白い竜たちが自らより生物として格上である氷獄に戦いを挑んだのは、その事も加味してのことなのであるが。

「「「「るうおおおおおおおん！！！」「」」」」

咆哮をあげ三匹一斉に飛び掛かる竜たち。
その動きはまさに氷上の狩猟者の如く。
だが、やはり相手が悪いと言わざるを得ないだろう。

（—————！！！！！！）

まるで金属を擦り合わせたような金切り声。
物理的にも精神的にも、冷たい刃が身を刺すような声。
氷獄世界の声なのであることは、その行動ですぐに見て取れた。

———バツ！！！！

その昆虫の如き外見を裏切らない、巨大な翅———氷の結晶にも似たそれ大きく展開し……それを震わせると同時に、吹雪が再び巻き起こる。

その勢いは先程までの吹雪とは比較にならない、物理的な暴力をはらんだ暴風だ。

「「「るうつうつうつ……！！！」」

吹雪は飛び掛かる竜たちを勢いそのままに巻き上げて吹き飛ばす。三匹中、二匹は地上へそのまま墜落する。が、残りの一匹は翼で体勢を立て直し、その琥珀色の牙を氷獄の陶磁のような外骨格へと突き立て――

「ぎゃんっ！？」

その牙は折れた。

その光景は氷獄の甲殻の硬さを示すものであったが、それ以上に興味深いのは、折れた牙がその先端から凍りついていることだった。

「氷獄……その外見は伊達ではないと言うことが」

恐らくはこの部位の甲殻も同じ特性を持っているはず。

極低温の氷の外骨格。

中身はどうなっているか知らんが、少なくともあの白い竜たちでは爪だろうが牙だろうが、どこに突き立てようと同じ結果……凍てつき砕けるだけだろう。

どれほど傷ついていても、起源種は起源種。

その身が担う概念は武器となり鎧となる。

(……………)

一言の会話も発生させず、容赦のない無慈悲な一撃を繰り出す。大爪の一振りはいとも容易く白い竜を吹き飛ばし、その脚を大きく大地に穿つだけで身が竦んで動きが取れなくなる。

単純な体当たりでさえ、その体格差と重量の大きな違いから生まれる破壊力は竜たちを粉碎するのに十分過ぎる。

その属性と名が示すような、氷のように冷徹な動作。突き刺すような冷やかな殺意。

「「「るうあ、があああああ……！！！！」」」

どれほど攻撃を喰らわせようとしても、吹雪が邪魔して近づけない。あるいは近づく事に成功しても、己の武器「牙と爪は通らない。逆に碎かれる」という始末。

もはや、三匹からは闘争心は消え失せ、この場を逃げだそうとじりじりと後退をし始める。

だが、氷獄はその行動を許さない。

（——！！！！）

頭部の大角が真中から大きく横に開いていく。

開かれた角の中心部には氷の結晶のような物体が鎮座し、痛いほどの冷気がそこに集束していく。

それは白の光。

永遠の眠りをもたらす氷獄の色だ。

そして——無音の光は放たれる。

「「「——！！！！？」」」

白い閃光が竜たちを包みこんでいく。

大地も空も、時間すらも凍てつけと言わんばかりの極低温の白光。三匹の竜たちは、その白の甲殻を己の血で染め上げた状態で、氷の棺に閉ざされた。

彼らの生命はそこで眠りについた。

氷れる世界の支配者は、そんな三匹の姿を一度だけ見て、なんら感情の籠らない動作で佇むだけであった。

「ふむ——そろそろ、良いか」

三匹の白い竜を一蹴した巨大な白き甲虫。
起源種としての力を振るった新たな星の子。
我が兄弟と、改めて対面するとしてよう。

(……………)

「久しい……と言うべきか？ 否、こうして会話すること自体初なのだから、はじめましてか？」

一度その姿を見ているとはいえ、氷獄までそうだとは限らない。
あの状況ではむしろ我のことなど見ていない可能性の高いであろう。

ゆえにまずは友好的……あるいは無難に挨拶する。

また炎や水のような状況になるのは、今の状況では厳しいのでな。

(……………)

「む、警戒しているのか？ 安心しろ、頭ではなく心で理解できるであろう。我らが同質なる者であることは」

(……………)

氷獄は警戒しているのだろうか？

我ら起源種は、姿形や属性の違いこそあれ、星から生まれた存在である以上は互いが互いを認識できる。炎や水も同じく、だ。

それは最も新しく生まれた氷獄も同じであろう。

だから、一度そのことを理解してしまえば、警戒する必要などないのだ。

(……………)

「……………」

(……………)

「……………おい」

なぜ何も喋らんのだ！

先に自分で言っておいてなんだが、理解できないはずはない。

我はしっかりと氷獄を本質的に同じ兄弟だと理解できている。氷

獄もそれは同じはずなのだ。

……………はず、なのだが。

いかん……………自信がなくなってきたぞ。

確かに我らが互いを互いに認識していても、炎や水のようなパターンも無くはない。だが、あれは性質が互いに鏡映しのように真逆過ぎたがゆえの行動。

氷獄と我とではそのような事態になるはずがない……………と思う。

そんな互いに無言の状態が数分続いて――

(……………あ)

「おお！」

やれやれ……ようやく声を出しおったか。

なんだか随分と小声だが、我にはしっかりと聞えていたぞ！
と言うか、なんだ。

見た目の割に随分とか細い声だ。

(……………あ、の)

「さあ、臆することはない。我が新しい兄弟よ。そなたの意思を、
その声ではつきりと示すが良いよ」

まるで、そうまるで幼子のように小さな声。

我はその様子を、恐らくまだ我のことを理解しきれておらず、警
戒しているからなのだろうと判断する。

だが、その必要はない。その心配は無用のものなのだ。
だから兄弟よ、そなたの声を聞かせておくれ。

そして――、

(……………はじめましてなの、お兄さま(は〜と))

「……………」

（……………お兄さま？）

「……………なん……………だど？」

我が新たな兄弟は、氷獄世界は——幼女であった。

第二章 生命再誕Ⅱ起源・氷獄（後書き）

特別ゲストとしてベリ○ロスさん登場の回でしたー

第二章 生命再誕Ⅱ氷獄考察（前書き）

凍土のうさぎはある意味癒し。
モンハンの意味で。

あと地味に今まで一番長くね？

第二章 生命再誕Ⅱ 氷獄考察

氷獄世界は幼女だった。

そう、幼女だった。

幼女だったのだ。

幼女……。

「幼女はもういいか……」

（……どーしたの？）

何故こうなった？

いや、何故もどーしたもないのだから。

世界は何を考えているのだ？

世界がご乱心でござるか？

「いかん……我まで混乱してきた」

（……お兄たまー？）

「ん？ ああ、どうした氷獄？」

（あのねー……ひょーごくってわたしー？）

「ああ……」

そう言えば、氷獄世界「氷獄と炎や水に倣って呼んでいたが、本人に伝えるのを失念していたな。

「その通りだ。凍てつき氷る起源世界。ゆえに、お前の名は氷獄世界だ」

（そっかー）

むう……反応が芳しくないな。

まあ我が勝手に名付けただけだしな。本人の意思が重要なのであるが。

（嫌じゃないよー……わたしは、ひょーごく……うん、ひょーごく！）

「ふむ、気に入ったか？」

（ありがとお兄たまー！ わたしは、ひょーごく……ひょうちゃんだー！）

ふむ、名前を貰ったのがそんなに嬉しいのか、氷獄はその場で何度も自分の名前を呼ぶ。

自分は氷獄だと、そうしっかりと認識するように。

（きゃははー！ ひょうちゃん、ひょうちゃん！）

「……………」

まあだからと言って、何時までも連呼されると名付けたこっちが

恥ずかしいのだがな。

あと嬉しいからってまた吹雪を巻き起こすのはやめい。

(……ねえ、お兄さま)

「む？ どうした氷獄……や、氷？」

(……えつとねー、一緒に遊んでくれるー？)

「……………ふむ」

……ちよつとだけ萌えたのは我だけの秘密である。

とある研究員の一日

ユーラシアの広大な大陸の、そのとある地域にひっそりとたたずむ研究所。

そんな研究所の中に設えられた、真っ白い清潔感のある部屋。

部屋に置かれたデスクの一つに、なんだかもつぼるぼるな男が一人、精神的に死んでいた……まあ俺なわけだが。

「うずあー……」

眠い。

ただひたすらに眠い。

気を抜けば意識が底なし沼に引きずりこまれるように落ちていくようだ。

目がもはや痛みを通りこして、ストライキを起こしているようだ。
ああ……俺はいつたい何日寝ていない？

そんな俺の様子に気付いたのだろう。
同じ研究室の同僚である男が声をかけてくる。

「へい、トーリヤー？ 眠そうだな。コーヒー……飲むか？」

「ああロブか……とびつきり熱くて濃いのを頼むよ」

「あいよ」

アメリカの男は気が利く奴が多いっていうが、あいつはまさしく
そうだな。

俺はこんなにも眠く、いつそ吐きたいくらいなのに、奴は割と元
気そうだ。

あいつはあれか。徹夜何日目かになると急に清々しい気分になれ
ちゃうタイプの男か。

「言ってくれるな……俺だってお前と同じくここまで貫徹なんだぞ
？ もうひゃっはーな状態さひゃっはー！……」

「ひゃっはーひゃっはーうるさいよ」

「——現実問題、こうやって馬鹿やってないと精神がもたん」

ロブ……なんて悟ったような目をしていやがる。
俺もやってみるかね？ いや……やめとこう。

いやしかし……ほんと、研究室に引きこもって何日経っただろう？
徹夜何日目……とか一々数える余裕もなかったが。

あの場所で ” あれ ” が発見されてから感覚的には大分たったよう
な感じではあるが……。

「ひい、ふう、みい……なんだ、まだ一週間しか経ってないのか……
一月くらいたった気分だよ」

「ああ……まだ七日、されど七日だ。特殊相対性理論的なあれだよ、
あれ」

「……まあ言いたい事はわかる」

俺たちは元々某国が設立した研究チームの人間であり、ユーラシア
大陸におけるある調査をしていた。

ある調査つてのは、まあ地質学だったり生物学だったり……まあ
色々だ。

分野分けが面倒臭くって細かいことは決めてないがね。

俺たちがこんな馬鹿みたなテンションで貫徹しているのには理由
がある。

話は一か月近く前にまでさかのぼる。

俺たち研究チームはこのユーラシア大陸における地形の詳細なデ
ータと、そこから導き出される生物の分布についての調査をしてい
た。

ユーラシア大陸と言っても、わりと中央部から南西にかけての山
間の地域でな。

人の足じゃあ調査にも限界のある場所が多い地域だ。
そこで俺たちは政府に依頼して衛星を利用して集中的にこの地域を調べることにしたってわけだ。

「そして、あの場所が見つかった、と」

「見つけたっつーか……今まで誰も気づかなかったただけだなあ」

偶然っちゃ偶然だが、俺たちが発見したのは大陸の広範囲にわたって広がる凸凹。

自然なようでどこか不自然な地形。

……まあ簡単に言えば隕石の落下跡だ。

「ほれ……出来たぞ」

「ありがとさん……ってクソ甘！？ 馬鹿かてめえ！？ 普通ブラツクだろう！？」

「馬鹿言っんじゃねえよこの馬鹿！ 考え事してる時は糖分の摂取が一番だと相場が決まってるだろう！！」

言ってることはもつともだが、砂糖の量が半端ないんだよ！
コーヒーに対して砂糖9くらいの割合じゃないのかこれ！
どろどろを通り越してでろでろだよ、でろでろ！！
飲みものですらないよ！？

「まあ落ちつけトリーヤー。コーヒーの好みに対する違いは理解してやる。俺は理解のある男だ」

「なんでお前が引く!？」

「しっかしまあ……隕石跡だけだったら、こんな馬鹿みたいな会話もしてなかったんだろうな」

「強引に話を戻しやがったな……」

ま、事実そうなんだろうが。

そう……俺たちが発見したのは隕石群の跡だけじゃなかった。確かにこれまでに各地で発見されてきた隕石の衝突跡と比べても、比較にならにほどに大規模・広範囲なもので、それだけでも歴史や地理の教科書に載っても可笑しくないほどだろうが。

「あれ」と比べちまったらなあ……」

「WD……」ホワイトドラゴン」か」

俺たちは隕石群の跡地を様々な視点で調査していく中で、地下に埋もれた隕石の欠片でも見つからないかと重機を持ちだした。

それが一週間前。

そこは周りと比較しても平らな面が多く、重機を使用するにも問題ない場所だった。

掘って掘って掘り続け……そして、地上からおよそ十数メートルという地点でそれが見つかったのだ。

「隕石の破片を見つけようと思ったたら氷漬けのドラゴンが見つかるとはねー」

「普通誰も予想せんだろうよ」

俺たちが見つけたのは、分厚い氷の棺に閉じ込められた三匹の白い竜。

白い体毛と甲殻、発達した琥珀色の牙にやたら棘々した突起をそなえた翼持つ生物。

最初にWD「ホワイトドラゴンなんて言い出した奴が誰かは知らないが、ああまさしく。その姿は俺たちが想像するドラゴンという想像上の生物によく似ていた。

「まあ年代的にも骨格的にも、恐竜って言ったほうが近いんだけどな」

「ロブ……浪漫のない男だ」

ロブが言った通り、このWDが発見された地質を調べれば、比較的恐竜たちが活動していた年代に近かった。それを考えると恐竜の近似であると言ってもいいんだろうが。

が、しかしだ。

かつての恐竜時代に生息していただろう巨大生物たちに、このような”極寒の環境”に合わせたような生物はいただろうか？

未だ本体の研究に着手されてはいないが、それでも外見上の特徴からある程度の推測は立てられている。

全身を覆う体毛と甲殻は恐らく寒さを凌ぐための進化の末に手に入れたものであり、その白色も雪の降る地域で活動していくための迷彩色であること。

全身に見える突起状の部位は現在のスパイクのような役割を果た

すと考えれば納得のいくものであり、さらに巨大な牙や爪はこの竜が狩獵に適した生物であることも推測できた。

だが……理解できるだろうが、今の我々の恐竜の常識としては、そんな極寒の大地に完全に適応した生物は発見されていない。

加えて、全長が10m以上の大型生物だ。常識という言葉が置き去りにされていくような気分。

まあ、こいつが狩りをする様子を幻視するのは案外浪漫が溢れていて面白いと思うが。

「ま、なんにしろだ——」

今この地上で生息しているどの生物体系とも違う未知の生物……いや、違うか。

今の生物と似ている部分がところどころある訳だから、未知というより未分類なだけ。

俺たちはこの生物を何科の生物に分類すればいいのやら。

それに——

「WDを閉じ込めてる氷の主成分もいまいち不明な点が多いしな」

「一週間徹夜して分つたのは、氷だけど氷じゃないって事だけだしな」

「……トリーヤー。それは全く調査が進んでないのと同じだぞ？」

「うるせーうるせー」

分ってるんだよそんなこと！

だが……実際問題、あの竜たちを閉じ込める氷の主成分は、氷で

はあるのだがそれ以外の何かが交ざっているような、そんな結果しか出てこないのだ。

最新の機材を使ってそれだ。色々と仮説を立ててはみるものの、遅々として進まない。

仮に地下で埋もれたままだったにしろ、何千万年も竜を閉じ込め続ける氷。

これはもうサイエンスというより、ミステリーやファンタジーの領域だ。

研究者としての自信が無くなるよほんと……。

「はあ——飯でも食いにいくか……」

「あー行つて来い行つて来い。俺はこのコーヒーさえあれば大丈夫だから」

「……………」

まあ……色んな意味で、考えてても埒が明かない。

こんな時は飯でも食つて脳みそに栄養をぶち込むのが一番さ。

飯食つてようやく眠気が少し冷めた頃。

俺は食堂から再び研究室まで戻るために、のろのろ廊下を歩いていた。

気が滅入る。

「仮眠……したほうがいいかねー？」

これからまた徹夜する日々になるかと思うと、仮眠も視野に入るわけだが。

小さく欠伸して、背伸びをする。
なんとも親父臭い。

「ふふ……」

「……………」

そしてそんな親父臭い姿を他人に見られた。
死にたい——いや嘘だが。

俺を笑うのは誰だー！……と視線を声のした方に向けると、そこには女性が一人立っていた。

金髪の美しい女性だ。

何というか、美しい女性だ。

……語録が少なくてすまんが、本当に美しい女性がそこにいた。

何時からいたのだろうか？

俺以外に廊下に人がいる気配はなかったんだが……と言いかいたら気付くだろう。

まるで今唐突に現れたかのような、そんな……

「何を馬鹿な……」

やれやれ……頭がまだばやけてるのか。

しかし本当にこの女性は誰なのか。

ここの研究員なら白衣を着るか或いはスーツ姿だから、恐らくは外部の人間だろう。

彼女は俺の姿を見かけると、小さく会釈をしてそのまま通り過ぎようとする。

俺もそれにならって会釈をするが——って、ちょっと待て！

「あー……ちょっとその貴女？　うちの関係者……ではないですよね？　ここは部外者立ち入り禁止の区画でして、なるべく早く引き返していただきたいのですがね」

その女——中華風というかヤパン風と言つか……なんともよく分らないセンスの服装の女は、あらあらと扇子を口にあてがい嗤っている。

まったく、迷ったのか何なのか知らないが早く出て行ってもらわないと俺が所長に怒られるんだ。

俺は無理やりにも連れ出そうと、その女性の腕を掴もうとして……

ぞくり——

「……う」

「あらあら、どうかされたのかしら？」

——なんだ？

思わず出した腕を引っ込めてしまった。

「ふふ……今時の人間にしては良い勘をしていますわ。最近捕食者に対して危機感の足りてない人間が多いものですから——」

「なにを……」

意味がわからない！

この女……なんなんだ！？

自分でも理解できない感情……いや恐怖だろうか？　それが全身を侵し思考を麻痺させる。

「安心なさいな。今日の目的は食糧の調達ではなく、貴方達が見つけた”竜”に用事があるのだから」

「な——！」

なぜそれを——！

あつさりとその研究所の最高機密を口にする女に、今度こそ言い知れない恐怖を覚えて俺はすぐに逃げようと——

「あ……」

「ま、今はお眠りなさいな」

——起きた頃には全て終わっていますわ。

そんな女の声を最後に聞いた気がして……目の前が真っ暗になっていく。

……こうして俺は、何日ぶりの眠りについたのであった。

とある研究員の一日・終

氷獄世界……氷と出会ってからほんの少しだけ時間は過ぎた。

冬の大地は昔に比べて穏やかになり、静寂の中にも生命の生ける鼓動が聞こえてくるようだ。

永い間閉ざされていた暗黒の空は、少しずつだが晴れ間を覗かせつつあった。

あくまで我らを基準とした時間計測ではあるが、少なくとも炎獄や水獄の世界が穏やかになるのに掛った時よりは遥かに早い。

その間我が何をしていたかと言えば、氷との情報交換……… と言う
な
の
共
同
生
活
で
あ
る
。

氷はその外見を裏切らない強大な力を持っている。

若いとは言え、その力は先に生まれた我や炎、水と比べても匹敵するほどの。

だが、なにぶん中身が幼すぎた。

持てる力と比較しても、その知能は幾分か足らず、星と共有するべき知識も存分に発揮できていない。

これでは幾らなんでもまずい……… そう思い、氷が一人でも生きていけるだけの智を得るまでの間、我は氷と行動を共にすることにしたのだ。

（あはははー）

「やっている事は保護者そのものだがな」

幼女と行動できて楽しそう？

ふざけるよ貴様ら（誰に言ってるのかはともかく）

ああ実際、中身は幼子そのものなのは確かだが、やる事成す事全てがその範疇を超えている。

一緒に遊ぼう——— という言葉とは裏腹に絶対零度やら氷柱の弾幕やらを撃たれる我の身になって考えるが良さ。

さらには、癩癩おこして駄々をこねる度に（もちろん極稀には

あるのだが）、我ですら飛行困難なレベルの大吹雪を巻き散らかされ、あげくその巨体で大暴れするのだぞ？

疲労……いや、物理的なものではなく精神的なものだが。起源種である我ですらこの有様だ。

それが永い間続いていたのだ。

それはもう、本当に――

「――永かったな」

（お兄さまー！ 今日も清々しく寒々しい雪景色ですね！）

「ふむ、そうだな」

ん？ ……ああ、今のは氷の台詞だ。

お兄さまから、お兄さまに我の呼称が変更された。

これも成長の証と言えるのだろうか？ 少なくとも中身はほとんど成長していないも同然ではあるのだが……まあ幼女から少女くらいには成長したということだ。

「……………」

（…………お兄さま？）

別に舌つ足らずな口調じゃなくなって寂しいとか思っていないぞ？

あれはあれで良いものだったが、こっちはこっちで中々乙なもの

であつてだな——我は一体誰に弁明しているのだ……。

「いや、なんでもない」

（……？ あつ！ あそこにうさちゃんがいる！ お兄さま、わたしあつちで遊んできますねー！）

「ああ、行つておいで」

氷は遊び相手を見つけたようだ。

すぐにふらふら何処かに行つてしまいそうなのは、成長しても大して変わらない。

まあ、うさちゃん（と言っても面構えが怖い、巨大うさぎだが）には気の毒だな。

……それはさておき真面目な話をするとしよう。

氷が起源種としては幼すぎるという点についてだ……それについて我なりに仮説を立ててみた。

それは、氷は本来あの時に生まれてくるべき娘ではなかったのではないか、という事だ。

「炎は炎熱と暗黒、流動する大地の記憶を起源に。水は荒れ狂う空と有毒高温の海の記憶を起源として生まれた」

そして我は、その二者の対立。

この星が刻んだ始めての闘争の記憶を起源として生み出されたわけだが。

氷の場合はどうか？

かつて星宙からの悪意がもたらした未曾有の災害。

最初の隕石落下は、この星の気候に変動をもたらした。それは一部地域では極寒の地を生み出す程度には影響を与えてはいたのだが。

（きゃはは！　うさちゃん待ってー！）

「――！！」

「しかし……その程度で起源などとは言えんわな」

氷と再開した後の世界なら理解は出来るのだ。

あの時は全世界規模……星全土にかけて凍てつく寒気が満ちていたのだから。

その状況下なら氷が誕生したとしても、おかしくはない。

「だが実際には、氷はあの時……奴が降りてきた時に誕生していた。これは星が奴に対抗するために、氷の誕生を予定よりも早めたのだという証拠」

我や炎、水の三体だけでは奴には勝てない。

我らでは奴の宇宙には勝てないと、そう判断したのだろう。

ゆえに、本来はもつと後になってから誕生させるはずだった氷をあの時、あの地に生み出した。

「しかし肝心の氷は、早すぎる誕生の悪影響ゆえか、未完成と云っていいほどに未成熟な状態で誕生してしまった」

恐らくはそれが正解。

あの幼い言動は、本来持つべきだった知能・知識が未完成ゆえに発揮できないでいるのだ。

外見は完成していたのだとしても、それではあまりにもお粗末すぎる。

「もつとも……仮に完成していた状態だったとしても、奴の宇宙には万が一にも勝機はなかったであろうが……」

（まてまてー！）

「――！！！」

しかし本来の正しい時間――氷獄の世界を経て、彼女は本来あるべき能力を手に入れている。

知能や知識にはまだ偏りや不足している部分はあるものの、起源種たるべき力を手にしているのだ。

「そして、氷はまだ成長過程にある」

起源種として最初から完全に完成した状態で生まれた我ら。

我は能力の都合上、自らをより戦闘に特化させる形で強化することが可能ではあるが……氷の場合はその意味合いが違う。

未完成・未成熟なままで生まれ、生き続け、そして成長し続ける存在。

星の記憶、起源種たる存在のイレギュラー。

不完全ゆえに生まれたその能力の振れ幅は我らの誰よりも高い。

「もしかすると――もしかするかもしれないあ」

(うさちゃんゲッター！)

「――！？」

必死に逃げ回っていたうさがとうとう捕まった。

まあなんだ……ご愁傷さまと言っておこう。

なあに、死にはしないさ。

氷漬けにはされるかもしれないが。

「これもまた――闘争、か」

色々間違っている気もしないでもないが、まあ闘争だろう。

色々真面目ぶって言うてはみたが、まだまだ幼い氷獄の支配者は、
今日も健やか元気にこの星で生きている。

233

そして――永かった冬はもうすぐ終わる。

冬が終わったその後は春がやってくる。

実際のところ四季がそのまま巡ってくるわけではないが……ま、
あくまで感覚的問題に過ぎない。

大なる生命も小さな生命も、等しくこの星で生まれ死に続け。
闘獄の輪廻は、正しくその歴史を刻んでいく。

そんな中で、この星に新しい種が誕生しようとしていた。
その命はまだ儚く形すらも、まだまだ未熟ではあったが……。

「さて――この先どうするべきかな」

新しい生命の種子は、もうすぐ芽吹こうとしていた。

第二章 生命再誕Ⅱ氷獄考察（後書き）

どっちかって言えば研究員が目立ってた。

第二章 生命再誕Ⅱ 疑問・懐古・回顧（前書き）

前回までの話しと違って変わって。

人の誕生はあっさり気味。妖怪も同じ。

当の本人たちとは別に、起源だけは自問自答で壊れていく。

第二章 生命再誕Ⅱ 疑問・懐古・回顧

我は思う。故に我は――

――痛い。

問おう。

人間の始まりは何時であろうか？

大昔の原始的な猿が森々を捨て大地を歩き、道具を使い始めた頃か？

はたまた、まだ生物として未熟極まりない、四足の哺乳類の頃からか？

――痛い……。

いやさいやさ、魚類の同属だったころまで遡るのが正解か？

単一細胞の生命体から進化と成長と退化と衰退と進歩と繁栄の堂々巡り。

繰り返し繰り返し、生まれては死に、死んでは生まれて死んでは生まれ……繰り返し繰り返し。

――ああ、痛い。

本来なら、正史において、長い長い闘争の歴史の果てにその生命は誕生するはずであった。

幾つもの生と死を超えて、この星の上で生き抜く術を手に入れて、やがては道具を火にする事で、この星の生態系に君臨するはず

であつた。

「だが、違えてしまった」

ただ野生の獣として在り続けていられれば、どれほど幸せだっただろう。

だが、それはない。

歴史が、過去から未来へ続くその歴史が、その事実を許さない認めない。

——狂ってしまうほどの痛み。

「在り得ざる事だ」

この星は人に野生の獣たることを許容したりはしない。

人は人として、歴史に誕生することが最初から義務付けられている。

そうなるように、仕組まれている。

朝と夜が幾度も幾度も世界を廻り、遙か昔に死んだ星の煌めきが地上に届くに至った頃。

——この脳髓を侵す激痛。

人の祖たるその生命は誕生した。

祖たるその最初の生命は、どこかおかしかった。

何がおかしかったのか？

その生命は己に疑問を抱いていた。

——己は何者なのか。

その生命は己に疑問を抱いていた。

——己は何のために生まれてきたのか。

その生命はこの星に疑問を抱いていた。

——此処はなんなのか？

疑問に思う……そのことがおかしかった。

生命は生きるために生まれて、死ぬために死ぬ。

生まれては死んで死んでは生まれて。

その永劫の輪廻。

自然の循環の中にあることが、生命の基本構造。

——我は何者か？

ゆえにおかしかった。

己の在り様を、この世界のことを疑問に思うことが。

その生命は、生命としてどこか外れていた。

——この痛みは何故だ？

疑問を抱くこと、疑問に思うこと。

獣にあるまじき思考。

知性の輝き、その宿り。

——闘えなかった。

かつて氷獄と共に時を過ごしてきた世界。

凍土と吹雪の支配する白い世界。

だが、永遠の冬などありはしない。

冬が終わったあとにやって来るのは、生命賛美の春の時。

我は旅をした。

この世界がどれだけ変わったのか、変わりゆくのかこの目で確か

めたかった。

我は旅をした。

この世界でどれだけの生命が息吹くのかを、この目で確かめたかった。

氷獄には泣きつかれたが、仕様がな

一度決めてしまったものは仕様がな

なに、長い生命だ。

遠い旅路の果てには、また会える。

「それに、いい加減に炎や水とも会いたいしな」

その世界は、今や植物が大地に根付き、数多の生物が自然に生きる、そんな世界になっていた。

豊穡と呼ぶのが良いだろうか。

幾つもの生命が常に互いに互いを糧として生きる世界。

弱肉強食と自然淘汰。闘獄の理を生きる生命。

そんな世界で、その生命と出会ったのは必然であつたか。

最初その姿を見た時、我はわずかながらに感動を抱いたものだった。

それは……まだ未熟極まりないその姿は。

なんとも”懐かしい”その生命は、そんな世界に生まれて来た。

その感覚”懐かしさに惹かれて、我はその生命を見守ることにした。

本当にまだ生まれて間もないのだろう。

いや、現実的に言えばそんなわけもないのだが。

だが、理解してもらいたい。
その生命は……人はまだ未熟なのだ、と。

「人は生まれた。幼いながらも、考えることを得た。知る事を知った」

人が人足り得るのは、疑問に思うこと。知りたいと思う事。
獣では、植物では、虫では、この闘争の輪廻が支配する世界で考える事をしない。

「否、考えることをしないと云うのは失言であつたな」

ただ必要がないだけだ。

その点で言えば、人とは不思議なものだな。

そうなるように、歴史が肯定しているとは言え、不自然な生命だ。

不自然で不完全で未熟で幼い。それが人間か。

「ならば……」

ならば問おう。

妖怪の始まりは何時であろうか？

人の祖先が生まれてより、幾度目かの朝と夜。

人の傍にあって、人とは相容れない、別の系統樹の生命が誕生した。

誕生した……と言うのはちと違うか。
彼らは最初から人と共にあった。

最初の妖怪が何だったのかは知らない。
今やこの星には人と妖怪とが等しい数だけ存在していた。
当然のことだ。

妖怪は、人の”恐怖”から発生したのだから。

「人は知性を得た。疑問を得て、知識を得て、そして……恐怖を得た」

知る事さえ無ければ、恐怖は生まれなかっただろうに。

人は知性を得た事によって、獣であった頃には気にも留めなかった様々な事象に興味を持ち、未知である事柄を恐れるようになった。

その恐れは、この星に誕生した最初の”知恵より生まれた恐怖”。
光に闇に、炎に雷、地震、竜巻、津波……理解し難き未知なるものへの恐れ。

知らなければ必要のなかった恐怖だ。

人は知るという行為を知った。

知性の海から生じたその恐怖は、自然の在るがままに生きる生命なら気にも留めない事。

光を未知として恐れる獣はいるか？
闇を未知として恐れる獣はいるか？

いやしない。

否、正確には違うかもしれない。どっちでもいい。

だが、人から生じた恐怖は、妖怪は誕生したのだ。

最初の妖怪がなんだったのか、我は知らない。

知らないが、今やこの星に妖怪という生命は存在するようになった。

この星が肯定した歴史だ。

「人にとっての恐怖とは、己らが逸脱した自然への恐れ」

人と妖怪の出会いが何時なのか、我は知らない。

知らないが、人と妖怪は、互いに互いが何なのかを本能的に理解したのだろう。

妖怪は人を襲い、喰らい、容ある恐怖として存在し……。

人は妖怪から身を守り、退治する、己の恐怖を乗り越えるために……。

我は、その最初から見ていた。

どちらか一方に加勢しようとは思わなかったのか？

ああ……思わなかったと答えておこう。

「当然だ。我は闘獄世界。闘争こそが我ならば、人と妖との闘争は、世界が定めた摂理なれば」

実に自然な事だ。

人は妖怪を退治し、妖怪は人を喰らい……殺し殺され、奪い奪われ。

繰り返すのだ。

何度も何度も……”これまで”繰り返してきたように。

世界最初の闘争として、我は彼らのその有様をただ傍観する。

眩く生きる、その生命を。

そして――疑問を抱いたのは、私も同様である。

人間の始まり。
妖怪の始まり。

疑問を疑問として覚えることは、知性の目覚め。
知性の目覚めは、新しい疑問の始まり。

ゆえに我は思ってしまった。

起源の――私の起源はなんなのか？

私の起源は闘争の起源。

炎獄と水獄の闘争波動を糧として、生み出された星の記録せし闘争。

闘獄世界。

「――違う」

我は、闘争を起源とする。

我は――この”器”は、闘争を起源とするだろう。
では、”我”とは何だ？

炎と水が生まれるその前より存在する、”我””コレ”という
意思はどこからやってきた？

我は何だ？

コレは何だ？

雑多乱雑に拡散したこの知識の出処はどこだ？

疑問。

疑問だ。

疑問を覚える。

何時からこうなった。

人が生まれた時。

その姿を目にした時。

我は何故、”懐かしい”などと思った？

「———っあ！？」

私の脳髓に痛みが走った。

激痛……逆痛〓快樂にも似たその痛み。

疑問があつた。

懐かしい疑問。我が生まれた時に抱いていた疑問。

かつてこの器が生まれるよりも以前、我にはただその意思だけが存在した。

何故だ？

起源なる存在として生まれることが予定されていた。

器もまだ誕生する以前、その精神だけがそこにはあったのだ。

何故だ？

記憶があつた。記録があつた。
星が辿るであろう歴史が……否、もはや辿ることのない歴史の記憶と記録があつた。

何故だ？

二重の感覚。二重の魂。

起源なる星の子として生まれたはずの我。

なのに、起源なる者としての記憶以外の要素が含まれている。
かつて”コレ”と我が呼んだ、その記憶は”誰”のものだ？

狂ってしまう。

壊れてしまう。

幾度も幾度も同じ疑問を繰り返し繰り返し……自問自答を繰り返す。

「ああ……………」

痛い。

痛い。痛い。

痛い。痛い。痛い。

「ああ……………」

——、軋む！ 軋む！！ 軋む！！！！

この脳髓を焦がす痛み。この魂を苛む痛み。
世界が宵闇に包まれていく。

否、現実には私の視覚が閉じていく。そして見たのだ。

その世界を。その記憶〃記録を。

幻視する。我は幻視する。

現実ではない。ただ現実にも思えるほどの真実味に満ちたその光景。

燃えて砕けていく世界の姿。文明の崩壊する姿。

「——ああ」

幾十幾百にも連なる巨大な高層建築物が、炎に塗れて崩れ落ちていく。

道という道全てが断絶し、逃げることの出来ない死地が生まれる。生きとし生けるもの皆、等しく死んでいく世界。

見た事がある。

既知感のある光景だ。

「誰の記憶だ……」コレ”の記憶……星の記録……我の……」

それは星の滅びの姿だ。

今とは違う歴史の果ての星の末路。

紅に染まる空、ひび割れ砕けた大地、紅蓮に干された海、破壊される文明。

黄昏に終わる世界。

——その影は誰のもの？

「――削除、不可能……」

シークエンスに異常発生。

削除実行、不能。

再度申請……不許可。

現行維持のまま待機。

「……………誰の記憶であろつと、我は我である」

この疑問は、我だけのもの。

例えば星であろつが、我のこの疑問は……記憶は削除など出来ない。

この疑問は、我だけのもの。

誰の記憶だろつと関係ない。いまや我は闘獄世界。闘争の起源であるのだから。

大いに、脱線してしまつたな。

では改めて語ろつか。

本来在るべきではない歴史のお伽噺を。

人の始まりの物語を。

生きるための闘争を怖がり、死するその生命を怖がり、逃げて逃げて逃げて逃げ続け……母なる星を捨てることを選択した、彼女ら彼女らの物語を。

生まれてくるのが早すぎた、彼ら＝彼女らの物語と――、た

だ一つの生命であることを許されなかった、人の罪の起源たる”原
罪”たる者の話を。

第二章 生命再誕Ⅱ 疑問・懷古・回顧 (後書き)

第二章 生命再誕Ⅱ旅は道連れ、世は無情（前書き）

タイトル考える疲れる。

またもモンハンからゲスト参加です。まあかませですが。

第二章 生命再誕Ⅱ旅は道連れ、世は無情

人と妖怪が誕生してから幾星霜……とはまでは行かないが、それ相応の時間が経過した。

まあ精々が数百年単位程度ではあるうが、人間にしてみればかなりの期間である。妖怪はどうだか知らないが。

我にとつてはどうか？

何億年も生き続けてきて、今更百年や千年程度ではどうとも思わない。

「気の長い話ですにゃー」

「貴様らの寿命が短すぎるのだよ」

「お星さまと比べるによは流石に無謀かと思えますにゃあ」

「いや、まったく」

我は世界を旅している。

のんびりしたものだ。

日が昇って沈むまでの間、ゆらりくらのらくらり……そうでもない、世界を何周も周る羽目になる。旅とはゆっくりと楽しむものだ。

「速く移動できるんにゃら、同じ場所を、余裕をもって何時までも眺めていられますにゃ。何時までも見てたい光景、何度でも来たい

場所つてのがあつて奴も絶対いると思いますにや」

「なるほど。貴重な意見をありがとう。が、我は違ふ」

「うにえーそりえは残念ですにえー」

もう一度言うが、人の誕生からおおよそ数百年。

人類が道具を有効活用し始め、そして火を扱うようになった。

人は群れを作り、一定の場所を住居と定めて集落を作り始めた。

「弱い者が群れを成して、強者へと対抗する。実に基本的かつ合理的だな。これは人間も動物もなんら変わらないか」

ましてや、己の天敵がうろろする世界だ。

集団を形成せず、独りで外を歩けば取って喰われるのがオチ。

そのくらいの知恵を付けるのは当然。自然の獣ですらそうなのだから、知恵を付けた生物がそうするのはもはや必然と言っていい。

「弱いのが群れても弱いものは弱いと思うけどにゃー」

「同じ弱小としてその台詞はどうかとも思ふがな」

「そりゃーご主人様と比べりゃーそうでしょーにえ」

それはそうだ。

我は、我の背に乗る一匹の妖怪……いや、元妖怪にそう応える。その猫のような、爬虫類のような不思議な容姿の少女に。

「今日はいいい天気ですにゃー」

「……ふむ、あの日もそうであつたな」

この妖怪と出会つたのは、今から数十年前まで遡る。
あの日、我は何時も通りに空を飛んでいた。
ゆっくりゆっくり……今ある風景を楽しむように、じつくりと。

（……………！！！！）

「……………！！！！」

「……………ん？」

その怒声と悲鳴が聞こえたのは、たまたまだった。
何時もであれば、より高度を飛んで移動するのだが、本当にたまたま低空飛行していたから、その声に気付けたのだ。

くどい様だが、妖怪は人を襲う。

妖怪が人を襲うのは、単純に食糧としての意味合いが主だ。

物質的な意味での食糧だけではなく、精神的なもの……つまりは恐怖を糧とするものもあるのだ。

妖怪は人を襲わなければ、その存在意義に矛盾が生じる。

そうして妖怪はその存在意義を満たすために、人に恐怖を与えるために進化していく。

より効率よく、その時代にあつた恐怖の形を成して進化していく。

その存在はまさしく人にとっての天敵だろう。

では、妖怪の天敵とは――？

（うるお おおお おおおん！！）

「た……助けてにゃー！」

我がその現場に居合わせたのはほんの偶然だった。

人が集団を形成し、集落のようなものを形成しつつあった時代。

人が群れを作る事で外敵から身を守るのとは逆に、妖怪は大概一匹で行動することが多い。もちろん例外はいるが、それでも大体は一匹だ。

恐らくは、その妖怪もそんな群れない一匹妖怪だったのだろう。

妖怪の天敵は、自然に恐怖を抱かない生命。

自然の猛威を恐れ退けようとする人とは違うもの。

自然の脅威を在るがままに受け入れなお生きるもの。

自然を恐怖するものと認識しない、あるがままの自然と共に生きるもの。

自然の猛威を生きる者――即ち”竜”だ。

そんな妖怪の天敵たる竜に追い回されている妖怪が一匹。

「……猫？」

まさしくその妖怪の姿は、猫に近いものだった。

まあ二足歩行のうえに、手には武器なのだろうか？ 棒つきれを持っているが。

そんな猫？ 妖怪が必死で逃げているその相手は、濃黒緑の皮膚の大きな顎の竜。

涎を撒き散らしながら、猛烈な勢いで猫を追いかけてまわしている。まあ見るからにあの猫？ 妖怪を餌にするつもりなのだろう。

が、その体格差はゆうに猫？ 妖怪十匹分以上ある。あれでは猫を食ったところで大した足しにもならないだろうに。

（があああああつ！！！！）

「いやにやああー！！！！！！」

要は口に入ればなんでもいいという事だろうか？

なるほど自然界的な意味合いでは、食べられるものがある時に食べるのは当然だろう。

まああんな小物を餌に追いかけて回す様は、悪食としかいいようがないが。

とは言え、餌として追い掛け回されているほうにしてみれば、そんなことはどうでもいいだろうが。

さて、肝心の猫？ 妖怪は果たして、あの竜から逃げ伸びる事は出来るだろうか？

率直に言ってしまうと、

「無理だな」

先にも言ったが、体格差があり過ぎる。

猫らしい容姿にたがわず機敏な動きを魅せる猫ではあるが、猫と竜との一步の差は大きい。

猫が十歩進む距離を、竜はわずか一步二歩で詰めてくる。さらには、

（があるああああああ！！！！）

「にゃ……にゃ、にゃああああ……！！！」

体力の差だ。

猫も妖怪だけあって体力はあるだろうが、到底、あの竜に太刀打ちできるほどだとは思えない。

妖怪と言えど体力は無限ではない以上、いつかは倒れる。

そして、その時はいま眼前で。

「ぶにやつー!?」

こけた。

足がもつれたのだろうか。猫？妖怪はすっ転んで転倒してしまった。

終わったな。

世は弱肉強食だ。無情だが、これも自然の摂理。

次に生まれる時はもっとマシな妖怪生を……

「……あ」

「む？」

猫の目が、我を見つめていた。

見つかったようだ。

「……………」

「……………」

「……………？」

「……………」

不思議な、不可思議な停滞。時間にしてわずかに数秒足らず。
我は当然のことながら空中にいるわけだが、猫はどうやってか我を見つけたようだ。

猫は疲労困憊といった表情だが、しかし、しっかりと我を見つめて……。

（ぐうおおおおおん！！！！）

「……………あっ！？」

吹き飛ばされた。

とつとつ追いつかれた。わずかに数秒足らずのあの停滞。

あれが致命的だったのだろう。

その小柄な身体は、濃黒緑の巨体に突き飛ばされて、地面をこすりながら吹き飛んでいく。

「……………あ、うう」

（ぐるおおおおおおん！！！！！！）

決着は着いた。

ある意味、予定調和。当然すぎるほどに当然の結果だった。

「無情よな。だが、これが真理だ」

闘争の摂理とは、こんなものだ。

あとは弱肉強食の理念に基づき、竜の捕食活動の末に大地に還るだけ。

——なのだが。

(…………ぐおおおおおおお!!!!!!!!!!)

「…………何だ？」

濃黒緑の竜は、自身が先程まで追いかけてまわし吹き飛ばした猫を無視して、我に咆哮する。

涎を垂らしながら、その巨大な顎を空にいる我に向けて大きく開いて威嚇する。

これは、

「我を餌と見なしたのか？」

……悪食だ。悪食過ぎる。

通常の生物なら、必要な餌を取ったら、他に獲物が居ても不必要な狩りはしない。

無駄な捕食行動は生態系を崩し、結果自らの自滅にも繋がりがねないからだ。

だと言うのに、この竜は目の前の餌＝猫を無視して、より大きな

「記憶も問題なし、と」

「……あたし、死んじゃうのかによ……？」

「であろうな」

「……………死ぬによ、いやだによお……………」

なるほど……………死にたくない、と。
当然だな。

自ら好んで死のうと思う生命は、そうそついない。
この猫の悲痛な訴えも最もだ。

「——だが」

闘獄の理に照らし合わせて考えてみよ。

この世界は弱肉強食。先の竜は行き過ぎだが——、弱き生命は強き生命の糧となり、再び輪廻の輪へと還るもの。

本来であれば、闘争の果てに敗れた存在である妖怪一匹、見捨てる（見なかった事にする）のが普通なのだが。
しかしだ……、

「肝心の勝者がこの有様ではな」

我が視線をそれに向ける。

そこにあつたのは、一匹の竜の屍骸。
ぼろぼろの表皮に無数の傷跡を付け大地に伏す、悪食の申し子。

無謀にも自らよりも格上の存在に挑み、そして闘獄の理に則り地に帰した一匹の竜。

食い気に忠実すぎるのも考えものだな。

本能を凌駕するその食欲は、己よりも遙か上位の存在にすら無謀にも食い付き、そしてこの有様だ。

結局元の獲物の猫一匹捕食することはなかった。

しかし……さて、どうするか。

このまま放っておけば確実にこの猫は死ぬ。

正直、我にとってはどうでもいい事だが。

「……………あうあ」

「……………ふむ。物は考えようか？」

確かにこの猫は、あの竜に敗れたかもしれない。

だが、こうしてまだ生きている（まあ瀕死だが）のは事実だ。そして、肝心の竜は我が殺した。

「運もまた実力のうち、と考えれば？」

今日、我がたまたま高度を下げて飛行していたのも。

我が、たまたまこの猫と竜との闘争（になっていたかは怪しいものだが）を見つけたのも。

猫が、この我を見つけたのも。

そして、我が竜を殺し、結果猫が生き延びることになったのも。

偶然だろう。

確率的にあり得なくはないが、決して高くないその確率。

それをこの猫は掴んだ。

その点だけを考えれば、なるほどこの猫はある意味勝者かもしれない。

それも、”星”を味方につけるほどの幸運。

(……試してみるか)

ふと思い出したことがあった。

遠い遠い昔の話し。かつて炎と交わした宴の場面。

竜人のことを。

彼らは炎と過ごし、交流を交わし、共に生活することで、生命体としては初となる能力保持者として覚醒していた。

当人たちも何時発現したのか気付かないほどに唐突に手に入った能力、きっかけとなったのは炎との交流の果てだ。

あの時、我はどのように考えていた？

闘獄、回想中

(炎を防げるように……進化の結果手に入れたのか？ あるいは元から能力を開かせる素養を持っていた？)

気を操る程度の能力、竜人の全員が持ち開花させている能力。進化か進歩か、どうやって彼らは能力を持つようになったのか。あるいは、

（炎と——我ら起源種と関わった結果、能力を得たのだとしたら？）

確かめてみたいところではあるが、あいにくとそのように都合の良い連中と我は関わったことはない。

第一やってみてそれが徒労だった場合を考えると面倒ゆえ。

闘獄、回想終了

「……………そう、そう考えていた」

確かめてみたいと当時思っていたのだった。

だが、結局はそんな存在はついぞ現れず、加えて星宙の悪意の脅威が来襲したのだ。

やっている暇なぞなかった。

だが、今ならどうだ？

時間は無限ではないが、有り余っている。

徒労になるかもしれない？ いまさらの話だ。徒労なら徒労でもよい。私の気分の問題だから。

猫のほうはどうか？ 猫の都合など知ったことではない。

いや……………が、まあ一応確認はしておくか。

「猫よ」

「……………う？」

「生きたいか？」

「……え？」

我は己の爪を用いて我自身の”肉体”を斬り決る。
溢れだす血液。

朱の液体は、ぽつりぽつりと地面に落ちる。

「なん、にや……これ……？」

「生きたいのであろう？ 死にたくないものであろう？ なれば……
我が血肉を喰らって生き延びてみせよ」

「食べれば……生きられるのかにや……？」

「さてな。成功すれば生きることが出来るだろう。失敗すれば死ぬ
だけだ。そこは貴様の運次第と言っていい」

「……………」

分は悪い……とは言わんが、我も初の試みだ。
まさしく博打。

猫の運次第だと言ったが、まさしくその通り。さて、この博打乗
るか猫？

「だが心せよ。それは死ぬよりも辛い道へ続く選択かもしれんとい
う事を。生き地獄を味わうに等しいという事を。それが嫌であるな

らば——」

「食べますにゃ」

「……………」

即答。

迷いのない声だった。

「簡単に決めるものだな」

「あたしは……辛いのも、苦しいのも嫌ですにゃ……でも、あたしはまだ”生きたい”のですにゃ……だから」

「……………」

「お願い、しますにゃ……………」

「……………」

単純だが明快な解答。

痛いのも苦しいのも辛いのも嫌だ。

けど生きていたい。まだ生きていたい。

認めよう。

その意思を。

——そして猫は、我を受け入れた。

もう解っていると思うが、我の実験は成功した。
我の血肉を喰らうことで、猫は妖怪としてではなく、また別の系統の生命体として再誕することに成功したのだ。

星の子たる我の血肉を受け入れた、星の眷属として。

まあ、問題があるとすればただ一つ。

「にゃ……にゃんですかにゃ、こりわーーーー！！！！！！？」

「…………ふむ、人型になったか」

直立二足歩行の猫が、直立二足歩行の人型に変わった事くらいか。それ以外の特徴と言えば、我の血肉を受け入れた影響か、猫以外の要素として我と似た鱗と翼が生えたようだが。

「まあ、気にするな」

「気にしますにえ~~~~~！！！！！！」

ああ、やかましい猫だ。

今日も今日とて天気が良い。

旅は続けよう。

一匹の竜と一匹の元妖怪は、旅をする。

「ところで……貴様の名前はなんというのだ？」

「うにゃ？ 名前つてにゃんですかにゃ？」

「……………まずは名前から与えねばならんか」

？？？の日記帳

○の月、 の日、天気は今日も快晴なり。

こうして日記を付けるようになったのは、いつの頃だろう。

この都市を作りあげてから、毎日が多忙だ。

昨日一昨日あったことを忘れないために日記を書くようになったというのに肝心の最初の日付を忘れるなんて…………私も歳をとっただらうか。

ふふ…………今さら年齢なんて気にするなんて、我ながら可笑しなものだ。

私は、目を閉じる

まだ私が若かったころの光景。

まだ私が人間だったころの風景。

東の果ての弓状列島。

そこにも人間は住んでいた。

大陸と比べればまだまだ少ないが、それでも人間はこの地にしっかりと根付くように生活していた。

大陸からこの列島に移り住んで幾数年。

もといった場所は妖怪や竜たちの往来が激しく、とても人間たちが住み続けるのは難しい場所。だから私たちは、時間をかけて山を越え、森を抜け、河を渡り、海を行き……そして辿り着いた。

その道のりはとても険しく、今よりもっと大勢いた仲間たちはその多くが道半ばで倒れて逝った。

日々はとても豊かとは呼べないが、そこそこに安定した暮らし。妖怪はこの地にも存在していたが、大陸に比べれば多くはない。それに私たちでもどうにか出来る程度の弱い妖怪たちがほとんどでした。

竜たちも何匹か確認していましたが、それも大概は草食であり、飼いならせば生活の役に立つだろうという程度の脅威。

私たちの一族は精々が百人にも満たない少数だが、子供たちもこれから成長するにつれ、やがては伴侶を得て子を成すだろう。

この地での生活はまだまだ始まったばかり。

急いては事を仕損じる。ゆっくりゆっくり……時間をかけてこの地に私たちの暮らしを定着するつもりだった。

私は一族の長として、一族を繁栄させる義務があるのだから。

豊かではない。

豊かではないが、実りの多い毎日だった。

大人も子供も皆、笑顔の絶えない日々。

ああ……こんな日々が永遠続くといい。まあ、永遠は無理だろうけど……せめて、私がこの大地に還るその時まで、ずっと……。

あの日、私が”あれ”を見つけるまでは。

「……？ なにかしら、これ」

それを見つけたのは、とても天気の良い日だったのを今でも覚えています。

確か私は、土地を開墾するために、竜の殻から作った道具を持っていたはず。

一族の長老衆に、よくもまあ毎度毎度、変なものを考えつく……などと感心のような、あるいは小馬鹿にされたような、そんな言葉を吐かれた。

自分の生活を豊かにするために、道具を作るのは当然のことだと思っただけだ。

年ばかり食って頭の固い爺さま方には理解できないのかもしれない。

なら、私が実際使って成果を出せば嫌でも認めることになるだろうと、——そんな事を考えていたはずです。

私が作ったのは、竜の硬い殻と骨を基盤に、それを強靱な皮で補強した……今でいう鍬のようなものだった。

今にして思えば、自分自身あんなものをよく考えついたものだ。長老たちの言う事も、今になってからだと身に染みる言葉だ、と。今となってはもう遅いですが。

開墾予定の土地に赴き、さていざ掘らんと道具を振るい。

そして、かつん……と硬質な音が響きました。

不思議に思い、その場所をさらに掘り返してみると、そこには今まで私が見たこともないような、不可思議な物体。

見つけたのは、紫の怪しい輝きを放つ石のようなもの。
当時の私にはただの綺麗な石だとして認識できなかったでしょう。
何故、そんなものが、たまたま自分の作った道具を試そうと思っ
た場所にあったのか。

偶然？ いいえ。そんなものはこの世には存在しない。

必然だったのでしょうか。

私が与えられた知識の”主”にとっての。

私とその石を手についた時、聞えて来たのです。

その、底知れない闇をたたえた声が。

（知識を与えてやろう。汝の一族全てを繁栄させるに足る知識を）

その声の主は、私にそう言い放った。

拒否を許さない声色。

拒めばどうなるか解らない。

恐怖。でもそれ以上に私は――

「――知識を得ることを選択した」

今にして思えば、なんて迂闊な行動をしたことか。

ただより怖いものはない。

代償のない行為より恐ろしいものはない。

私は新しい知識を使って、様々な方策や道具を考え、生み出しました。

本来なら、この時間にはない数多くの知識を使って、私をその全てを一族に……人に与え続けました。

ある時はより効率のよい、土地の開墾方法を。

ある時はより開墾しやすくするための、農耕具を。

ある時はより豊作を期待できる農作物を。

水を、火を、大地をさらに人にとって使いやすくするための道具を。

そのための知識を与え続けました。

一族は繁栄しました。

当然でしょう。

ですが、繁栄すればするほど、妖怪や竜たちの襲撃も激しくなりました。

だから私は、一族を守るために、今度は武器を作り始めました。

ある時は妖怪を殺すための術を考案し。

ある時は竜を殺す火砲を作り出し。

さらに効率よく両者を殺すための道具をさらに生み出し……。

気付けば、私は現人神として一族に崇められる存在になっていました。

あの日石を見つけた頃から、百年以上経過していました。

私は人ではなくなりました。

それでも私は止まりませんでした。

私の知識が、私が作った道具が人々を幸せにしていると思ったか

ら。

私は一族だけでなく他の土地に渡った人々を集め、さらに大きな集団を形成するようになりました。

ただの集落は村に、村から町に、町から街に、そして都市へと変貌していきました。

時間の効率を考えて、時間の経過を操るための術も考案しました。時間を操り一日を通常の何倍にもし、あるいは何分の一にしたり……何千年分もの文明の発展を、わずか百年程度まで圧縮したりして。

都市はさらに繁栄していました。

もう妖怪や竜たちを恐れる必要はどこにもなくなりました。

だから今度は、同じ人を殺すことになりました。

どこからそうなったのか、私には解りません。

気付けばそうなっていました。

愕然としました。

人のために、人の繁栄のために、人を守るために作りだし生み出した私の道具が、人を殺すために使われているのです。

ですがもっとも怖ろしいのは——この道具を作ったのが、他でもない私自身であったということ。

そして気付きました。

この知識の持ち主は、これをこそ待ち望んでいたのだと言う事に。

あの日、禁断の知恵の実さえ見つけなければ、或いは私はもっと

緩やかでいつそ下らない人生を送って生き、そして自然のあるがまま寿命を迎えていたのでしょうか。

今となつては、想像もつかない愚な思考。

ああ……どこまでも甘く、もう二度とは叶わない夢。

こうして、私は私のことを日記に綴るのは、これが最後となるでしょう。

一族の繁栄と引き換えに、受け入れる選択をしたこの知識。

新しいものを、もっと便利なものを、もっともっと繁栄のための道具を……作って造って創って、作・造・創り続けて！

楽しくなかったかと言われると、正直自分でも解らない。

手に入れたこの知識をもとに、今まで誰も知らない見たこともない道具を、この手で生み出せる喜び。きつと、作り出すこの楽しさだけは真実だと思いたい。

ああ……もう自分でもなにを書いているのか解らなくなってきた。きつと、私は自分の罪を誰かに裁いてもらいたくてこんな……。

この知識は——この知識の真の主は、私を蝕んでいる。早い段階でそれに気付けたのが僥倖だろう。

この知識の主には感謝しても感謝しきれないという想いはある。

一族だけでなく、大陸で妖怪や竜たちに怯え暮らすだけの人々をも救う力を、知識をもたらしたのだから。

だけど——それもここまで。

あなたの思い通りに、ここまで動かされてきたけど。

せめて最期の最期くらいは、抵抗してみせる。

人をなめるなど、その知識の主に直接言ってやりたくはあるけど、

それももう出来ない。

御休み私。さようなら私。

私は此処で死ぬ。

私が創った道具が人を殺めるだけの光景は二度と見たくないから。

ああ……けど、心残りはある。

私の……私たちの”罪”とは言え、あの子をそのまま放りだすような真似をするこの行為。

あの子はどうなるのだろう。

私が創り出してしまった、あの子は。

ああ……もしもこの日記を読む者がいるのなら。

そしてこの日記を読んでいるのが、私の友人である ■ ■ ■ ■ ■ なら、
お願い。

あの子のことを、頼みます。

ああ……知識が、深淵の暗黒よりも深い……紫紺の叡智が、私を
飲み込んで――

第三章 罪と穢れと人Ⅱ暴走特急その名は宇多（前書き）

今回のお話。あえて、一言でいえば……これはひどい猫。

今回完全にノリで書いてるので、もし誤字脱字とっ見つけましたら、報告をお願いいたします。

二月二十三日少し加筆&修正しました。

第三章 罪と穢れと人Ⅱ 暴走特急その名は宇多

視点・宇多

どうも。

ご主人さまの頭の上からここにやにやちわ。

宇多は宇多と言いますですにや。

”うだ”じゃやくて、”うた”ですにや。

……あ、誰だか分かりやにやいつて顔してますにえ？

前話もとい数十年前にご主人さまに助けられた、死にかけた一匹の可憐にや仔猫……それが宇多ですにや。

本来はただの小妖怪だったによですが、ご主人さまの熱い血潮とお肉で見事に大復活を遂げ、今ではご主人さまの旅に同行しての気ままな道楽行脚ですにえ。

え？ ご主人さまとの関係？

そんなにやみなまで言うあれでもにやいんですけどねえ！

ああん！ でもそんなにやに知りたいんにやら、教えて上げるが世の情けつて奴ですにやあ！

そう……宇多とご主人さまとの関係はあ……いわゆる飼い主と飼い猫つてゝ奴ですにやあ。

「エロい意味じゃなく文字通りの意味ですけどにえ」

「……頭の上でなにをぶつくさ言っている」

「お気になさらずですよ」

エロい意味でもいいですけどにえ……（ふひひ）

……そう、飼い主と飼い猫。

宇多は、ご主人さまの愛の奴隷……もとい従者……と言うかペットですにや。

愛玩動物（妖怪）って書くと、そこはかたなく背徳感による響きですにえ。

「もちろん、調教的な意味合いですにえ？」

「……………」

でもご主人さまってば、全然宇多に構ってくれにやいのにや！

こんなに美少女猫に手を出さないにやんで、ご主人さまはヘタレもいいところですよにや！！

白いつやつやの髪の毛に、同じく白いすべすべのお肌。

そんなにや白に一滴の黒墨を流したかによような、黒い角と尻尾、そしてエロい光沢を放つ黒鱗。

機動性と空力特性を最大限に活かし、かつ出るところはそこそこ出ている、すれんだ〜！にやばでいー。

男どもによはーとを驚掴みにする、威風堂々たるにやん耳と口リボイス！！

こんなに歩く萌え要素の権化とも言える美少女ににやにもしないにやんで……ご主人さまってば、意気地なしにや〜の」

「自分で萌えの権化とか言っかね？ それと鱗にエロいという表現は、どうかとも思うがな」

「でも実際工口くにやいかな？」

「さてな。あと今の台詞、途中から全部だだ漏れだったぞ」

「うにゃん！？ ……ご主人さまに隠し事は通用しにやいってことかによ」

「……………」

まあ総合すると、ご主人さまはすぐ傍でいつでもどんな場所でもどうこうできちゃう美少女が居ても手を出さない、ヘタレで意気地なしでちえりーな方ってことですよ。

え？ そんなにや不満たらたらにやら、なんで何十年も付き合ってるによかって？

にゃふふ……そんなにやの決まってますにゃの。

そんなにやヘタレで意気地なしでちえりーなご主人さまに何十年も付き添ってる、そんなに理由は」

「だから聞えておると言っているだろうに……………」

「———そによ理由は」！（聞いてない）

「……………はあ」

そう———宇多がご主人さまに恋をしてしまったっているからですにゃの！

……………うにゃっ！ こんにちは堂々と言っちゃうにゃんで、宇多って

ばおまゝせさんつにゃの！

にゃ？ 何時からこんな感情を抱くようににゃったのかつて？
にゃふ……そんなにゃの決まってるによ。

あによ日……ご主人さまによって宇多の命を救ってもらった、あによ日から、ずっと……。

あによ日、宇多はでっかいゴーヤ……もといアゴ……でもにゃく、
竜に追っかけられて死ぬ一步手前を走ってましたにゃ。

まあ、原因は宇多があいつのご飯をぶんどったからにゃんですけ
どにえ……まあ昔の話ですにゃ。そんなにゃこんにゃで、竜が怒りだ
して宇多をご飯にしようと追っかけてきたわけですにゃが。

まったく……そんな程度で怒るにゃんて理不尽にもほどがあるに
ゃ！ ましてやこんにゃ美少女猫を！」

「……お前が発端か。あと当時のお前は本当にただの猫だったろう。
二足歩行はしてたが」

「過ぎた過去は気にしにゃいのが宇多の美点ですにゃ」

宇多は逃げましたにゃ。必死に逃げましたにゃ。

可憐にゃ猫が粗暴な竜に追っかけられる光景……にゃんてテンプ
レにゃ悲劇！

そして死を目前にした宇多が目にしたのは、巨大な翼と黒光りする
雄々しい角が特徴的にゃ、三本の首と漆黒〃純白のちょーかつこ
いい（ここ重要にゃよ？）竜……つまりはご主人さまだったのにゃ！

その御姿を見て、にゃーのはゝとはしびれまっくす！

びびびつと電流が流れたのですにゃ！

一瞬後には意識が遠くにやって、動悸と頭痛が激しくなって、目の前が暗くにやって……」

「それはお前があゝの竜に突進を喰らったから……」

「そう！ 宇多は気付いたのにゃ！」

初めてのこの感じ。この感情。

確信してしまったのにゃ……これは恋だと……！！

まあ意識にやかったからご主人さまの戦闘シーンは見れにやかったわけですが……それでも宇多には解りましたにゃ。この方が宇多を助けてくださったのだと！

まあそこから紆余曲折あつて、宇多はいまやこんにゃに超絶萌え萌えにゃん耳（ほによかにエロい鱗と尻尾もあるよ）にゃ美少女へと……！！

「あくまで鱗は強調するか」

「ご主人さまとお揃いですにゃ」

「……………まあいいが」

そして、宇多はご主人さまの従者なペットとして生活を共にするようになつたのにゃ。

ご主人さまは宇多に名前もくれたのにゃ。

この世界でただ一つのご主人さまとの絆の証である、”宇多”っ

て名前を。

「でもまゝ絆の証って言ったら、やっぱりあれにやよ。チャイルドによ子供によ！ そっちの方が宇多の方としては嬉しかったり恥ずかしかったり？」

にや？ 全長百メートル越えの大怪獣相手ににやに言っただつて？

んにやもん宇多の知ったこつちやにやいにや！
愛があれば種族とか体格の差にやんて、にやんの障害にもにやらにやいのですよ！

まあ大き過ぎる（にやにがつてにやにですよ奥さん）のも考えものにやんですけどね。そこはあれにや。宇多も元妖怪にや。そんなじよそこらの下っ端妖怪とは再生力とか回復力とか比較にならないにや。つまりは裂けても大丈夫……」

「下ネタはやめい！！」

「たまのエロスは必要にやよ？」

「そのメタ発言もだ！！」

まあでも、やりようはあるのですによ。

宇多が人型ににやれたみたいに、きつとご主人さまも人型くらいににやつと変化出来るはずですよ！

そうにやれば宇多のこの魅力溢れる、にやんだふるぼでー（ワンダフルに非ず）でイチコロにえ！！

ま、まあゝ異種姦つてのも宇多は嫌じゃないって言うかゝむしろ

望むところって言つかにえゝ（うへへ）」

「……………」

「じゅるり………… おつとつと唾が…………（ふひひ）」

「宇多よ………… 妄想はいいが我の頭に涎をかけるでない……………」

「さーせんですにゃー」

ああん！ ご主人さまつたらいけずだにゃん！！

世の中には女の子によ涎に性的興奮を覚える紳士もいるっていうのに、ほんとに連れない方ですにえゝ。

あ、ちなみに宇多は御主人さまのものなら何でも嬉しいですよ！

………… 変態だと思いましたかにゃ？

仮に変態だとしても宇多は変態と言う名の淑女ですにえ！！ 訂正、ただの淑女じゃなくて、猫淑女ですにえ！ もしくは淑女猫！ シャム猫みたいな響きですにえ？ え、聞えない？ 知ったこっちゃないですにゃ。

「でもまゝあれですにゃゝ。そろそろ海の上も飽きてきましたにえゝ」

「まあここ数日ずっとだからな。手近な陸地にでも今日は降りるか？」

「そつですにえゝ」

にゅふふ……ご主人さまったら、陸地に降りて宇多ににやにをす
るつもりにやのかにゃん!?

宇多としては、やっぱりこう、ロマンティックでミステックで
そして仄かに香るエロスな場所がいいかにゃ……にゃふふ!

そんなにやわけで、宇多は猫の第六感を全力全開で働かせるのにや。
ご主人さまの血肉を戴いてから、宇多にはただの猫にも妖怪にも
無い、まさしくシックスセンス! とでも言うべき知覚能力が備わ
っているのですにゃ!

まさしく、星の眷属に相応しい驚異の能力!
ま、もつとも……全てはご主人さまとのらぶい一夜のためだけに
使わせていただきますけどにえ!!

「——おおう!?!」

びびつとキター——!!!!

あれぞベストプレイスにゃーの!!

「にゃふふ……これえはこれえは、なかなかにゃ」の

宇多が目にする先には、大きな湖とそれを囲むように広大な森が
広がる大自然の風景。

猫としてにょ本能と宇多としての願望が完全一致する理想の場所
にゃ!!

つまりにゃにが言いたいのかって言えば、そう——静かにや
湖畔と森にょ中ではははは〜ん! な感じ?

「ご主人さま！ あそこにや！ あの場所がいいですよ！」

「ふむ……湖か」

「はりー！ はりー！ 膳は急げによ桶屋が儲かるによ！」

「……意味がわからんよ」

静かで暗い森の湖畔で、月明かりだけが宇多たちを照らす……幻想的でエロティックなしゅえーしょん！

愛を語り合いにやがら、夜はご主人さまときゃっきゃうふふでにやんごろにやゝん（ふひひ）

御主人さまつてば、今夜は寝かせにやいからにえゝー！！」

「……だからまる聞えたとさっきから……」

「にゃっはふふふゝん」

にゃんにも聞えにゃゝい。

宇多の成分の九割以上は妄想で成り立ってますによー！！

視点・闘獄

「何故、ただ飛んでいるだけでこんなにも疲れるのだ……」

初っ端から猫が暴走しまくりだが、何時もこんな調子なわけではない。

もっすぐ陸地が近いからテンションが上がっているのだろっつ。…

…そのはずだ。

と言うのも、ここしばらくは海沿いを飛行しているだけで、見飽きた風景が延々と続いているだけだったからな。

我が降り立った場所は、私の器すら十二分に沈めることが出来そうなほどの大きさの湖。その近場の開けた森の一角だ。

我が降り立ったことで、鳥や動物が少し騒いでいるようだが。まあ何時もの事だ。

「うにゃ〜良い場所にゃ〜ね。お日様さんさん、ぽつかぽつかですにゃあ〜」

私の頭から降りてすぐに、宇多は日当たりの良い場所へととてと走りだす。

宇多も妖怪（まあ元妖怪だが）なだけあって、陸地が恋しいのだろう。猫的な意味合いも含めれば、森が恋しいというのが近いのだろう。

「にゃふふ〜……こんにゃ素敵な場所で、ろま〜んていつくな夜景に包まれて、宇多とご主人さまとの熱い一夜が幕を開けるのにゃ〜ん（ふへへ）」

「……………」

まあ、そうだと信じたい。

いや、本当に最初はこんなでは無かったのだ。

我が名付けるまでは、本当に猫そのものと言っていい奴でなあ…
…警戒心がちよつと強い感じで、何と言うか保護欲？ が湧くと言う感じと言うか？

「まあ宇多の演技なわけにやんですけどにえ？」

「……………」

「ちょっと臆病で人見知りにゃ美少女つてのも男にはびびつと来るものがあるらしいですよ？」

「……………ああ、そう」

……………まあ演技だったらしい。たった今本人にそうきっぱりと断言された。

「ちょっと悔しがるご主人さまの表情もそそりますにゃ」

「いま我は本気でお前に殺意を抱きそうだよ」

強引に話しを変えようか。

”宇多”と言う名は我が与えた。出会った当初は宇多に名前はなかった…………と、言うかその概念がよく分かっていなかったようだ、名付けるという行為は重要なものだからな。

由来について真面目に語ると、とある猫大好きな皇族から貰った。猫好きなら、元妖怪とは言え猫を守護するくらい喜んでするだろうとか思ってたな。メタ発言だと”最古の猫”で検索すればすぐ解る。まあそれ以外に理由は特にないのだが、本人が物凄く喜んでいたからな。先の発言さえなければ、名を与えた我としても素直に喜べるのだが。

「嬉し恥ずかしの話しかによ？」

「その話題から離れろ」

「振ったのはご主人さまにやよ？」

まあ、そうだが。

……それでだ。我のちよつとした好奇心と実験の結果、宇多は妖怪からより我に近しい存在となった。

具体的には星の眷属たる存在にだ。

起源たる我と比べれば星との接続は多用できないようだが、それでも妖怪という種族から一つ二つは先の存在へと進化したのだ。

いや、進化というよりは変化したと言う方がより正しいのだろうが。

「うにゃ？ あれなんにゃ？」

「……あまり遠くまで行くなよ」

猫らしくじつとしていられない性質なのか、宇多は森の奥へと入っていく。

まあただの妖怪なら宇多一人でも問題ないし、我も気にはしない。何よりも宇多の”能力”がある。

「ほうほう、これえは結構なお手前？ にゃ」の

宇多の”能力”は使い方さえ間違えなければ、俗にいう神にすら匹敵しかねない強力なものだ。

もっと正確に言えば宇多本人の生来持っていた気質の具現した能力と、我の性質……起源種たる気質が具現した能力の二つを持つ。

その二つとも上手く使いこなせば我の領域にすら届きかねない。

「ふむふむ……にひひ。面白いこと思いついたにえ」

「……さつきからお前はなにをやっているのだ」

我が真面目に考察ぶっている最中にまったく。

まあ宇多がこんな性格である以上、先の能力の危険性は極端に低くなる。

あの能力は秘めたる野心が強ければ強いほど強力になるからな。

まあ、宇多は宇多で厄介な使い方をするわけだが。

「にゃふふ……ねえねえご主人さま？」

「……なんだ？」

「ちょっと”これ”を口に含んで欲しいんですよ」

「”これ”？ まあいいが……で？」

「飲んじゃ駄目だよ？ それでえ……あれを見て欲しいんですよ」

「……？」

何なのだ？

”これ”と宇多が言って差し出したのは、一見水のようにも見えるが……味は、しょっぱいような辛いような……？

これを飲まずにどうしろと？

あ、ちなみに我が普通に会話してるのは、首三本ってことだから理解していただきたい。首が多いのは便利だな。

「それですにえ」

ちよいちよいっ——と指先で森の奥を指す。
何があると言うのか。
そう思って見てみれば、

「百足……か？ デカイな。我と同じか少し小さいくらいか？」

「びつくりにゃーの。それでにえご主人さま？」

ちよこちよこ……私の耳元に近づいて、宇多は一言、

「ご主人さまが今お口に含んでるのはにえ………宇多のら・・
じゅー・す（きやつ）」

「ぐぶふあああああああああああ……！！！！！！？」

口から勢いよく吹き出した液体が大百足に直撃する。
こ、こいつは何て物を飲ませるのだ！？
年頃の娘が恥ずかしくないのかまったく！！

「にやはっ！ 宇多はご主人さまが相手だったら喜んでやりますに
や？」

「我が喜ぶとでも？」

「喜ばないにゃ？」

「潰すぞ小娘？」

いや本気で。

そんな我的本気具合に気付いたのか、慌てて弁明する猫娘。

「にやはははは〜！ 悪ふざけが過ぎましたにや！ 本当はただの殺虫剤ですにえ」

「…………… 本当か」

「本当ですよ！ その証拠にほら」

宇多が指差して見せたのは、さっきの八百足が苦しみもがく姿。さっき我が吹き出した液体の影響だろう、徐々にその動きが鈍くなっていく。

「…………… ふむ本当らしいな」

「にえ？ 言っただでしょ？」

だが、主に殺虫剤なんぞ飲ませるような奴は本気で懲らしめてもいいと思うのだが？

「にやはははは…………… ごめんなさい」

「まあ、いい」

素直に謝る宇多の姿に流石に怒気も失せる。

いつもこのぐらゐに素直なら我も安心できるのだ、主に精神的に。八百足はほうほうの体で森の奥へと消え去っていく。

「致死性ではないのだな」

「無意味に命を奪うのはご主人さまが嫌いますからにえ。精々が身体中が痺れびりびりってするくらいですにゃ」

「まあ、今回はその心掛けで許してやろう」

「にゃは！ だからご主人さま大好きですにゃ！」

悪戯娘にも困ったものだが、猫だしな仕方ない。

そんな寛大な心で許す我。

自分で言うのもなんだが、どうにも我は宇多には甘いな。やれやれ。

「あ、あの――」

ある意味この何十年ずっと続けてきた関係。

嫌いではない――とそう思う我の聴覚にふと反応する声がつ。

それはさっきまで大百足が居た場所のすぐ近く。

「誰ぞ？」

「先程はあの大妖から助けて頂き、ありがとうございました」

すつ、と木立の影から姿を現したのは一人の少女。

歳の頃は十四、五くらいであろうか。

青と赤の相反する二色の服を身にまとった、銀の髪の少女で、大妖ってなんのことだ？

その少女から詳しく話を聞くと、どうにも我が先程退けた大百足。どうやらこの森一帯の主らしく、数百年を生き続けた大妖怪であるらしい。蟲なのに。

神通力を操り、その表皮は鋼よりも硬く、実際少女が住んでいるという街（と言うか、この時代に街なんてあるのか）の者も手を出しあぐねていた存在だとか。蟲なのに。

そんな危険な森にどうして少女が一人でいるのか？

薬師の見習いだという少女は、実験に必要な薬草を摘みに森に入り、そして運悪くあの大百足に遭遇。必死に息を殺して逃げる機会をうかがっていたらしいが、その最中に我が吹いた殺虫剤で退散させてしまったようだ。まあ蟲だしな。

「とは言え、そう大した事ではないぞ実際」

「いえ。是非、お礼を言わせてください」

「とは言ってもだな少女よ。我は偶然この森に降り立ち、たまたまあの大百足を退けただけだ。それもある意味、不可抗力に近い形だな。我が積極的になにかしたというわけでは……」

「いいえ。それでも助けられた事に変わりありませんから」

「以外と強情な少女だ。」

まああんな妖怪が出ると知っている森にわざわざ入って来るよう

な人間だしな。

まして我の姿を見て怯えるどころか、逆に我に話しかけてくる勇氣もある。

（こんな人間もいるのだな）

しかし実際問題、感謝されてもこちらが困る。

我がやったことは、本当に宇多の悪戯の結果のようなものだ。まあ眞実を話す気にはなれないが。

「是非とも我が家へいらしてください。我が街の住人も、あの大妖を退けた方ならばきっと受け入れてくれるでしょう」

「むう……だが、我のような化物を受け入れるような人間など、そうそうおるまいに？」

「いいえ。私が一見したところ、貴方様はどちらかと言えば妖怪よりも、より神々に近い存在とお見受けします。であるならば、我らが貴方様を歓迎こそすれ追ひ払うような真似はいたしません。第一、私がさせません」

そこから数十分にわたって、互いに譲らない口論が交わされる。

——来てください。

——いや、結構。

——一日だけでも。

——いやいや、遠慮しておこう。

——いえ、しかし……。

——いや、だがな……。

「——はあ、強情な娘であるな。仕方がない」

「では、来ていただけのですね！」

……まあ、なんだかんだで我が先に折れた。

なんだな、この娘。口先は非常に達者だと言っておこう。

結局丸めこまれてしまった。

まあ我としても、この湖畔でどうしても一夜明かしたいと思っているわけではないのだから別に良いのだが。

「……………」

「ん？」

ところで……宇多がさっきからずっと黙りこんでいる。

よく見れば、銀髪の少女をずっとじと目で睨みつけていた。
なにがしたい？

「自分で撒いた種とは言え……」

「……はい？」

「初っ端からライバルキャラの出現ですかによ……」

この猫娘は一体何をほざいていやがるのだ。

「ええと……あの娘なんだが目つきが怖いんですが……」

「まあ元が猫だからな。人見知りが激しいのだ、きつと」

しゃーっ!! とか威嚇しているが、気のせいだろう。多分。
銀の髪の少女もそんなに恐れる必要はないぞ。うん、多分。

「いえ…… なんだか肉食獣が獲物を狙ってるような、そんな不穏な
気配が」

「…………… まあ、馴れるさ」

「にゃふふ…… 他人の恋路を邪魔する泥棒猫はさつさと消すに限る
にゃ…… あ、猫は宇多のほうにゃね」

行く先の未来には不安しか待っておらん…… 主に宇多が原因で。

「あ、そう言えば名乗るのが遅れてしまいましたね。恩人に失礼な
ことを……」

「気にするでない。我から尋ねなんだのも悪いであろう」

「ふふ、お優しいですわね。私の名前は、そう—— 八意・永琳。
永琳とお呼びください。友人たちからは、そう呼ばれています」

我は、その名に聞き覚えがあった。

”コレ”の記憶に残った名前。

八意永琳—— 将来、月の頭脳と呼ばれる天才薬師。

起源なる存在はこうして、正史と交わり始めることとなる。

第三章 罪と穢れと人Ⅱ紫紺の暗黒（前書き）

文章量が多くなりそうだったので、切りのよいところで投稿。
今回は裏の話し。

次話の完成はまだ先になりそう（汗）

第三章 罪と穢れと人Ⅱ紫紺の暗黒

視点・白髪混じりの研究者

怖い。

私は怖い。

私は此処が怖い。

何時も誰とも知らない視線に見張られているようで怖い。
声にならない怨みの声が耳に聞えてくるようで怖い。

怖い。

私は怖い。

私は此処が怖い。

自分の犯した罪を自覚するのが怖い。

私が犯した罪が何時か私を裁く日が来るのが怖い。

怖い。

私は怖い。

私は此処が怖い。

今日も眠れない。眠れなかった。眠るのが怖い。

ああ……最近、原因は分らないが身体がとても重い。何かの病かと街に診察に出たが異常はなかった。

が、曰く疲労だとか心理的にまいっているのだとか——いまさらだ。

今日も嫌な一日が始まる。

罪を重ねる日々。生命を穢す日々。
私は怖い。

ああ、この暗い日常の隙間から、私たちが奪った生命が睨んでく
る……なによりも、その奥底深く……あの紫紺の闇が――、

――コンコン……。

「――！」

不意に部屋をノックする音が響き、私は意識を表へ浮かび上がら
せた。

「――失礼します、主任。実験結果の報告に参りました……主
任？」

「……あ、ああ。すまないね」

「いえ……お疲れのようですね。最近、あまりよく眠れていないの
でしょう？」

部屋に入ってきたのは、この研究所に所属してまださほど日の経
っていない若い青年だ。

いけない……いくら疲労が溜まっているとはいえ、仕事中に眠っ
てしまっていたようだ。

まだまだ若いと思っていたが、どうやら歳も無関係ではなさそう
だ。身体がとても重い。

「主任……報告は、後からにしましょうか？」

「いや……それには及ばないよ。私たちはこんな所でつまずいていられない。ましてや、私個人の事で仕事が遅れたのでは申し訳が立たない」

私はそう言つて、部屋の大窓から下の光景を見る。

私たちの罪の光景を。

広々と広がる薄暗闇——研究所の中には、大小様々な大きさのカプセルが置いてある。

蒼黒い水——生命の水で満たされた円柱状のカプセルの中には、妖怪や竜といった、かつて私たちが打破し捕獲した”サンプル”達（私自身はこの呼び方は気に言っていない）が入っている。

妖怪は人型から獣型、蟲型、爬虫類型といった各種を。

竜は、飛竜種から獣竜種、牙竜種、海竜種といった各種を。

おおよそ、私たちが把握している全ての妖怪・竜たち……その全てがここには存在している。

本体そのものが保管されている者、細胞単位で保管されている者、そんな些細な違いを気にしなければ、まさに異形の博覧会とも言えるだろう。

だが事實は博覧会などという生易しいものではない。

その手を、足を、脳を——生命を刻み、解し、晒し、観測して計測して把握して理解する。

人が自らの知識欲を満たすために生み出した地獄が此処だ。

「あまり言いたい言葉ではありませんが——壮観ですね」

「見ている分には、な。実態はただの実験用サンプル……我々に利用されるために捕まった哀れな、罪なき生命だよ。正直、気分の良いものではない」

「怨まれているでしょうね……彼らには」

「だろうな。だとしても、やらなければならない。私たちはそのために此処にいるんだ」

全ては人類の繁栄のために。

友のため、家族のため、人のため……そのために私たちは他の生命を利用している。

だが……それは本当に正しい事なのだろうか。

実に今更なことだが——私はこの光景を見るたびに罪の意識に苛まれる。

だが、止まるわけにはいかない。

「新しい素体の入手——壹號と貳號が成功しました」

「そうか——また忙しくなるな」

「はい。さらに伍號……柳星張が新しい妖怪の確保のために出向する予定です」

伍號……正式名称は柳星張。

飛竜種を素体として遺伝子調整を加えた生物兵器だ。

完成度は高いが、肉食性かつ極めて闘争心が高いため制御が難しい。だがその戦闘能力は並みの妖怪や竜を超え、軍レベルでの捕獲が困難な対象に有効だ。

最も……生物としての本能が強すぎて捕獲対象を捕食してしまう場合もあるため扱いには困難だが。

「また対象を喰い殺して捕獲に失敗した——などという報告は聞きたくないものだ。我々は無用の殺戮を求めているわけではないのだから」

「もつともです。制御に関しては新たに精神感応系能力者の協力と、所長自らが改良種の創造に着手する……との事です」

「……そうか」

所長——その単語は私に一人の女性を思い浮かばせる。

私たち研究者にとって羨望の対象であり、畏怖すべき現人神の姿を。

私たちが軍の要求に従って生み出した生物兵器……壹號、貳號、そして伍號も、元は彼女が提唱した生命操作技術の産物だ。

より効率よく妖怪や竜を——そして同じ人間を駆逐するための理論を構築した、私たち人間にとっての智慧の象徴。

「次に——”七號”の実験報告を——」

「経過は……あまり芳しくはないようだね」

「はい。今回の強化実験で付与した属性——主に氷や雷と言った現象を発現することには成功しましたが期待していた以上の成果

は見込めませんでした」

「発現自体は、成功したのだね？」

「はい……ですが、各属性が極めて不安定で制御が非常に困難であり、加えて自身の能力に対しての耐性も未だ不完全であることから、まずは基礎となる肉体の強化を進めていくべきかと」

「……確か七號は竜を——それも古龍をベースにしていたね？
それでも耐えられなかったのかい？」

古龍……現在この世界に現存する竜たちの中でも特に強靱な肉体と特異能力を有する種だ。

巨大なもので一つの山ほどの巨体を誇るものもいれば、小さな種であつても嵐を引き起こすほどの強大な能力を有する種まである。

生ける天災——七號はその古龍の細胞を基礎として遺伝子レベルでの改良を施している。単純に肉体の強靱度だけなら既存の竜種を凌駕する耐久性を持ち合わせているはずだ。

「より具体的には、属性の不意な切り替えに肉体が追いついていないと言ふべきでしょうか。七號は通常の状態では火属性をベースとして行動しますが、属性の不安定変換で反属性である氷が発現してしまうと、火属性の肉体が属性反発を起こして想定以上のダメージを受けてしまう……といった具合です」

「ふむ……」

「この解決策として、先に言つたように肉体の強化を推し進めると

という方針を取りました。根本的な解決にこそ成っていませんが、現状のまま実験を進めると七號の生命に著しい損害を与えかねない、と」

問題は思った以上に難しい。

肉体強化——それ自体は問題ない。

私たちの持つ生体操作技術なら、既存の肉体に処置を施して遺伝子レベルでの更なる変容を促すことが出来る。最も、それによって強化できる範囲には限度があるのも事実だが。

だが七號の問題点はその属性の多様性そのもの。

この世界の生命には属性——その種を象徴する概念が宿っている。だが通常の生物は一個体につき一属性。複数の属性をその身に備えた存在は未だ確認されていない。

だが七號は多種多様な各属性を一個体に発現させる事を目的に創造された生物兵器。

生命が備える属性という概念の限界を超えることを目的にしている以上、何処かで無理が生じるのは覚悟していたが、やはり難しいようだ。

「発現属性の制御に関しては、伍號に捕獲させる予定の雷狼竜や風翔龍のデータをから新しい制御方法を見つけ出すしかないですね」

「制御方法に関してはその方向で行くしかないか……。だが、恐らく現状のままでは無駄だろうな」

「ええ。複数属性の安定化——一番の問題はこれでしょうから。」

一属性ずつの制御には成功したとしても、それでは複数の属性を発現させることに何ら意味が生じない。軍の要求に応えられる性能を発揮できるとは思えませんから」

「——複数の属性を発現しつつも矛盾を生じさせない。あるいはその矛盾を許容してなお活動できる強靱な生命を見つけ出す事……全ての問題点を解消するには、そんな生物が存在してくれるのが一番なんだがな」

「……現実味のない話です。そんな生物が存在しては、生態系にどれほどの乱れが生じることが。仮に存在しているとしたら、それこそ”神”と呼んで良い存在だけでしょう」

全く……彼の言う通りだ。

私も自分の発現に呆れ果てている。やはり、疲労が溜まっているのだろうか。

あらゆる環境に適応し、火にも水にも、風にも土にも——あらゆる状況下・概念下にあつて微動だにしない強靱な生命体——
——そんなもの、やはり存在しないのか……？

「いいえ——存在するわ、その矛盾を押し通すだけの強壮なる生命は」

私と彼しか居なかったはずの部屋に、不意に女性の声が響いた。部屋の入り口に、何時来ていたのだろう……白衣を着た紫紺の髪と瞳を持つ、穏やかな微笑をたたえた女性が立っていた。

「しよ、所長——」

女性——それはこの研究所の所長にして、あらゆる栄華栄誉を手にしたと言われる智者。

現人神——そう呼ばれる希代の大天才の姿だった。

しかし……今、彼女は何と言った——？

「聞えなかったかしら？　今、貴方が言った存在……求めている生命体は存在していると言ったのよ」

「お、お言葉ですが所長。そのような生命体は我々の調査でも確認できておりません。何よりも、生物としての基準を超えるような存在……居るはずが——」

「あら……貴方は、私の言葉を疑うのかしら？　この現人神たる私の言葉を？」

「あ——い、いえ……」

所長の言葉に彼が小さく呻く。

信じがたい……私個人もそう思う。そのような生物が存在していることを。

だが——所長は一切の疑念の余地を持たせない、確固たる自信を持って存在すると言ったのけた。

「で、ですが仮にそのような生物が存在しているのだとしても、その所在が分からない以上は、存在していないも同然です。 magari なりにも研究者の端くれとして、まずは存在しているのだという事実……その証拠を御見せいただきたい」

そう——彼女が現人神なら私は研究者だ。
常に現実を見据え、事実のみを観測する。仮定や仮説だけで動く
つもりはない。

例えば相手が所長であれ、現物を見なければ私は引かない。

「ふふ——良い気概だね。それでこそ私が此処の研究を一任し
ているだけの事はある。安心なさい……もうすぐ、最高のサンプル
が手に入るわ」

「——う」

彼女はそう言って先程から一切変わらないその微笑を浮かべ続け
る。

まるで笑みだけで構成されている仮面のようなその表情——
その瞳の奥に、私は紫紺の闇を見た。

その色は、魂を貫く氷柱のように冷やかで……私は、怖ろしい。

「運命は須らく、”吾れ”の求めるがままに——」

怖い。

私は怖い。

きっと、彼女は私がなにを言っても聞かないだろう。

聞く素振りはしても……その瞳はなに一つ個人としての私を見は
しない。

彼女にとって私は——私たちはきっと虫けらにも等しくて……
…。

（――馬鹿馬鹿しい……！）

怖い。

私は怖い。

だが引けない。

彼女がもたらす知識と技術は私たちに、人類に等しく繁栄を与えてくれるものだ――そう信じるしかない。

ああ……でもきつと、そんなはずが、無いのに――。

「ふふ――期待しているわよ、永琳」

紫紺の暗黒が、微笑みの裏側で静かに嗤う。

第三章 罪と穢れと人Ⅱ紫紺の暗黒（後書き）

ところで……出して欲しいモンスターとか怪獣っていますかね？
今のところ、モンハンから何体か、他の特撮映画からでつかい蛾だ
ったり、亀だったり、超音波な鳥だったりを予定してるんですけど
ね。

第三章 罪と穢れと人Ⅱ虚実の門壁（前書き）

流石に今回は短いですが、
てか、ほぼ進んでない。

なるべく更新速度を早くしたいですが、今の現状だとこんなものです。

第三章 罪と穢れと人Ⅱ 虚実の門壁

彼の文明の話をする前に、一つ時と空間の話をしようか。

あれらを知るには、まず予備知識の一つでもあったほうが理解しやすいだろう。

まず時とは何か。

まあ広義の意味では、過去・現在・未来と流れてゆくものだとしよう。

それは空間と共に、認識のまたは物質界の成立のための最も基本的・基礎的な形式をなすものであり、いつさいの出来事がそこで生起する枠のように考えられているもの……だと我の内の知識はそう識っている。

では空間とは？

哲学的には、時間と共に物質界を成立させる基礎形式。もっと単純には、物体が存在しない、相当に広がりのある部分。空いている場。

色々と考え方はあるが、それらいずれも時と密接に関わりのある概念だと言っておこう。

時と空間。

常では意識せずとも、其処に確固とした概念として存在しているもの。

生命たちはそれら双方を合わせて、時空あるいは時間とそう呼んでいる。

だが、

「起源たる我らに時間などという概念、微塵も関係ないのはこの際どうでもよいか？」

「でも永遠にやわけじゃないし、わりかし有限だつてにょもどうでもいいですかにや？」

「生きているのですから、永遠なんてありませんよお二人とも。まあ、誤魔化すことは出来るでしょうけど」

さやか。まあ言つてどうなるものでもなし。

ふむ……我が言いたいののは、時間という概念……あるいは場に至るのは不可能ではないし、そも不可侵というわけでも無い。が、まづ真つ当な生命ではそれには至れないと言いたいわけだ。

それが人間であれ、妖怪であれ、竜であれ。
神などと呼ばれる存在ならいざ知らず、並みでは無理なことだろう。

「にやら、並み以上ならどうにやりますかにや？ 例えばご主人さまにやら？」

「それこそ知らんわ。試そうと思ったことはないし、試すつもりもない」

まあ……やれんと言つわけでもないだろうがな。

あの忌まわしい紫紺なら、児戯だとしても言い放ちそつな気もするが。

「謙遜し過ぎではないですか？」

「試したこともないのに、出来るなどと言ってやれなかったら恥ずかしがるう？ 生憎と我は身にあわぬい大言壮語など吐く気はないのでな」

「それを謙遜と言うのですよ。貴方は御自身を過小評価し過ぎですわね」

あまり我を持ち上げてくれるなよ。

調子にのって何をやらかすか分らんからな。

そんな事を暗に言い含めて我の頭の一つに乗る少女に言う。

「ふふ、その時は私達の力を存分に御見せしますわ」

「力、か」

「ええ。私達の力——時と空間……時間の概念を操作し、いまや辿り着けぬ場所など無いと豪語するわたし達、人間の文明の力を」

ああ——大分話しが脱線したが此処で戻るか。

そう、彼の文明の話だ。

少女——未来の天才薬師、八意・永琳が語るその文明。現在の世界において、唯一と言っていいだろう人間による人間のための文明。

いまや時間の構造の一旦を支配し、あらゆる概念を手中に収めんとする彼の文明。

人間であれ、妖怪であれ、竜であれ。

個体ではいずれもまず辿り着けぬ領域へ、人間は文明という名の群体にて到達した。

正史においてすら、確固たる記述なきその文明を永琳から（わづかばかりとは言え）聞き及び——人間はどこまでいけるのかと——
——我はふと、そんな事を考えてしまっていたのだ。

「にゃんだ、つまりはご主人さまは早くその文明とやらを見たいだけにゃんですにえ？」

「……ああ、そういう事だろうな」

「ふふ、もう少しで着きますわ」

移動してるのは主に我だがな……と心の中で呟きつつ——その片隅で、昔懐かしい嫌な気配を、ほんの少しだけ感じたような気がした。

闘獄と少女たち移動中

移動にかかった時間はほんの僅かだろう。

永琳と出会った森からはやや遠いだろう、そこは何一つない空間。ただただ、四方をひたすらに広がる広大な草原地帯だった。

「こちらです」

「うにゃ〜？ …… なんにもにゃいですにゃが？」

「……否」

見た目は確かに普通の草原。だが世界と直結する私の目から見れば”それ”は瞭然だ。

僅かに…… 本当に僅かにだが、空間に違和感を感じる。

この違和感をなんと表現するべきか…… そう、しいて言えば本来あるべき場所に、まるで別の場所を上書きしていると言つか…… 大きな絵画の上に別の絵を貼り付けているような…… そんな感覚だ。

「流石ですね。ええ、確かに”今”この場所には何を有りません。ですが、存在しているのですよ」

「空間そのものを歪めることで本来あるべき物を隠すか。なるほど時間を操作しているという言葉、偽りではないようだな」

完璧すぎるほどの隠蔽。

だが完璧すぎて逆に世界からすれば違和感しか残らないがな。

「ふふ。ですが、そちらの猫さんは気付かなかったようですね？」

「うな〜！ 宇多は猫だからいいんですにゃ！」

「どんな理屈だ」

「猫にやらなんでも許されるのですにゃ〜ん」

意味がわからん。

そんな宇多を微笑ましそうに見つめながら、永琳は懷から何かを取り出した。

取り出したのは一枚の紙片——符と呼ぶべきか、それを掲げ宣言する。

「産靈庁が長にして神産巢日たる神魂命が長子、八意・永琳が命ず。虚実の壁を解き真なる実を示せ——」

その言葉と共に、空間の歪みが徐々に増していく。

と言うよりも、これは本来あるべき場に戻ろうとしているのか。

虚実の壁と永琳が呼んだ、その不可視のベールはゆっくりと解かれ——巨大な構造物が我らの目の前に現れた。

「にゃは〜……でつかいにゃ〜……」

「人の技術も侮れんものだな」

永琳の放った言葉はいわゆる一つの暗号——パスワードのようなものだったのだらう。では、あの符は通行許可証のようなものか。

いまや真実の姿・場を晒したそこに存在するのは、我の全長をすら遙かに超える巨大な壁。

遠目に見たならそれがちょうどドーム型の形をしていると解るだらう。逆に言えば、遠目で確認しなければ全貌が分らないほどに巨大な構造物という意味だ。

それはどのような材質で造られているのか……その壁面は硝子の

ように滑らかでありながら、しかし硝子のような脆さを微塵も感じさせない頑強な印象を与える。

それは金属でありながら、金属にあるまじき事に、それ自体が”気”あるいはそれに類似した何かの力を宿した不可思議な物質だった。

まるで太陽の如き赤を持ちながら、金属としての光沢を放つ緋色の金属。

「日緋色金ですわ」

「ひひいろがねってなんにゃ？」

「人の持つ霊的な力……気や霊力と呼ばれるその霊質体を金属として物質化した物体……と説明するべきかしら？ 妖怪どころか竜ですら、この日緋色金で造られた壁を壊すことは出来ないでしょう」

「これも、人が作りし技術の一つか」

「ええ」

その顔は、自身の文明に対しての誇りに満ちていた。
なるほど……確かに。

この日緋色金とやらで造られた壁を壊すのは中々に難儀な事だろう。

「まるで城塞よな」

「いいえ、驚くのは中に入ってからにしてくださいな」

永琳は笑みを持って、その壁面の一部に触れる。

その部位から一瞬だけ光の線が壁を走り――————という仕組みか、壁は横にスライドするように滑っていき、そこに丁度我が通るにほどよい大きさの”門”が造られた。

「さあ、この門をくぐり抜けて参りましょうか、私達の文明の中枢たる”都市”へ。きつと皆、貴方様たちを歓迎してくださるはずですわ」

先導して歩く永琳に誘われて、我と宇多はその後をついていく。その”門”はまるで、最初から我にあつらえたようにぴったりの大きさで、なんとも言えぬ気分であつた。

?????視点

黒い暗い薄気味悪い森の奥深くで、のたうち回り身をくねらせ大地を森を軋ませて。

臓腑を腐らす大地を溶かす瘴気の中で、儂はただこの痛みに耐える。

熱い……熱い……燃えるように、この身が熱い。
焼けるように熱い。燃えるように熱い。

こんな熱さは初めてだ。こんな痛みは初めてだ。

ああ、儂の身体が……如何な妖怪の妖力も。如何な竜の爪牙すらも通さぬ儂の身体が、まるで幾千幾万本の針で突き刺されているか

のように痛む。

この世に生まれ落ちてより幾百千年。

人の恐怖より誕生し、人の恐怖を糧とする儂は、その生において始めて感じるその痛みに、我が住処を暴れ狂う。

おお……何故こうなった？ 何が原因だ？
そんなもの、語るよりも明白だ。

あれだ、あ奴だ。あ奴ら。

三本の首の竜と人の姿に酷似した妖怪。

あの時、彼奴目らに吹き付けられた液体が、儂の表皮を焦がし焼き苛むのだ。

己が生において、幾百幾千の生命を喰らい、恐怖たるその存在理由を闘争の渦に沈めてきたこの身が、なにをする事も出来ぬままに、ただ始めて味わう痛みを前にただ逃げ帰った。

おお……なんたる屈辱か！

おお……憎い憎いぞ！！

このまま放っておくものか……放っておけなどするものか……！！

自然と昂ぶるその衝動。

我が身より生ずる瘴気はより深くより濃く、森をどす黒く覆っていく。

毒の沼地へ置き換える。

大地を踏みしめ碎き進軍せし、百を超える足からは妖力からなる

妖しの焰が立ち昇る。

風すらも猛毒を帯び始め、立ち昇る妖力は雨雲を呼び雷を喚起する。

おお、生まれ落ちてより初めてだろう。

その生涯において初だろう。

これが怒りというものか……！！

——オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

！！！！！！

この怒りのままに、憎きあの怨敵へといざ、報復せん！

……

……

……

……

……

……だが、何故この身焦がす痛みの内側で、安らぎを得ているのは、何故なのか？

まるで我が胎たる恐怖の源泉に戻ったかのような気分は何なのだ？
闘争の渦へと身を投じるあの昂揚を、あの竜から感じたのは、何故なのだ？

何故……儼はあの時、あの竜を問答無用で喰らい襲おうとしなかったのだ？

憎悪はある、怒りはある。

だが、知りたい。

この疑問を……その理由を……その答えを、僕は知りたい……！
！！

その日、一つの森がこの世界から消え去った。

後に残るのは、百年程度では消して消えないほどに、腐れ落ち毒の瘴土と化した大地の姿。

その夜、幾百もの火焰が群れなし踊るように不可思議な光景……
おぞましく怖ろしい巨大な影が天を進軍したという。

第三章 罪と穢れと人Ⅱ虚実の門壁（後書き）

時間に関しての考察？

wiki先生任せさ……まあ後から個人的考えが出てくるようになりますがな。

それと、アンケート……てかオリキャラの投稿随時受付中です！

夜桜 癒月様、オリキャラの投稿ありがとうございます！

お知らせ、或いはアンケート

こんな書くくらいなら本編の続きを書けと言われそうですが…。

アンケートと言っても大したものではありません。これから本編や外伝に出していく人間や妖怪やその他生物（なまもの？）を募集しようかと。

活動報告にも書いていますが、作者は今回の大地震の被災地真っ只中で仕事をしています。

その都合上、これから先どうなるかも分からない以上は更新はさらに不定期になるかもしれません（や、今までもそうだったと言われればそうなんですけどね）

ですが、それを理由に作品に関して全く手を出さないのもどうかと思ひまして……。

ただまあ、自分で言ってしまうのもあれですが、作者は凡才なもので。なかなかアイデアが湧いてこず……。ならこの作品の読者さまに協力願おう、と（他力本願ではありますが）

アンケート内容は、オリジナルキャラ（種族でも個体でも）なわけですが、気軽に考えていただけると幸いです。

書き方としては、作品内のキャラ紹介か以前、【煌 焰】様から投稿頂いた【闇神】様を参考にしてください。

あとこの作品は現在、地味に他の版權作品とクロスしている部分があります。まあ名前や一部設定くらいですが。

現在の大まかなクロス作品は、

【モンスターハンターシリーズ】

【平成ガメラシリーズ】 【ゴジラシリーズ（新から旧まで）】

【無限のファンタジア】

等になります。まだ一部しか出ていないのがありますが。

そして予定としては下記の作品、

【クトゥルー神話】

【平成モスラシリーズ】 【ファンタシースターシリーズ】

こんな感じです。露骨なクロスと言うより、名前や姿を借りる感じになるでしょうが。例えば、東方の月の文明「ファンタシースターの旧文明とか（あくまでイメージですが）

もつとも作者の傾向からして怪獣系統がやたら出てきそうですが。

これからクロスして欲しい版權作品に関しても応募します。まああくまで、作者が知ってる範囲でしか上手く書ける気がしませんが……。

被災地での活動が治まり始めたら更新を再開していくつもりなので、皆さん宜しく願います。

幻想郷縁起なキャラ解説#4・前（前書き）

本編書いてない代わりに。

地味に中途半端なのは前編だからさ！ …… ってことぞ。

幻想郷縁起なキャラ解説#4・前

ネコ巫女ドラゴン、妄想マイスター

転寝・宇多 U t a t a n e - U t a

種族：化け猫？

能力：空想（妄想）を現実にする程度 of 能力

危険度：普

人間友好度：低

遭遇頻度：低

主な活動場所：闘獄の傍ら

闘獄世界が居るところには必ずいると言ってもいいくらいの頻度で遭遇する妖怪。実際のところは”元”妖怪であり、現在は妖怪と妖精の狭間のような存在となっているとか。

彼女の能力 空想（妄想）を現実にする程度 of 能力 は大雑把に説明すると、彼女が想像した物事を現実に生み出すことが出来る能力である。

物体だけでなくその気になれば現象すらも作りだすことが出来るとか出来ないとか？（ 1 ）

外見こそ猫耳で白毛の綺麗な少女だが、よく観察すれば頭には小さな角があり、鱗が生えてたり尻尾が竜だったり謎生物である（

2 ）

魏怒羅教では巫女として活動しているらしく立場上はトップ。も

つとも当人の性格が性格なのでちよくちよくいなくなるらしいが（
3）

「また変な巫女が増えた……」

—— うんざりだと言いたげな表情の紅白巫女

「竜でネコ耳で巫女ですか……露骨に萌えすぎて逆に萌えませんね」

—— 辛辣な口調の青巫女

- 1 基本的に本人の妄想力が物を言う。
- 2 やたらと毛並みとか鱗の工口さを強調してきて正直うざい。
- 3 それでも紅白巫女よりは仕事はしているのだろう。

忌み嫌われた蟲の王、蛇竜喰い

戦場ヶ原・嵩金 Senjouga h a l a K a s a g a n e

種族：大百足

能力：瘴気を生み出す程度の能力、蟲を支配する程度の能力

危険度：高

人間友好度：極低

遭遇頻度：極低

主な活動場所：地下（ 1 ）

億年単位で生き続けた百足の妖怪。人の異種（この場合は蟲）に対する恐怖心から生まれた原初妖怪の一匹であり、蟲などの妖怪を束ねる王のような存在らしい。

能力は 瘴氣を生み出す程度の能力 と 蟲を支配する程度の能力 という二つの異なる能力を持っている。前者は瘴氣（ここでは猛毒の霧のようなものだと考えておけばいい）を生み出し、ただ其処にいるだけで大地を猛毒の沼地に変えてしまふほどだと言われている。

後者の能力はどちらかと言えば蟲妖怪の最初の一匹であるという事実が能力として反映されたものだと思われる。ちなみに本人は毒蟲の類を使役しているとか。他にも鋼鉄の表皮を持っていたり、神通力を使いこなしたりと大妖怪としての貫禄を持った大妖怪だろう。

弱点は唾液だと言われているが定かではない。が、大昔に三本首の竜に唾を引つ掛けられたことが原因で変な噂をたてられたりしたらしく、それが未だに尾を引いているそう。

昨今の幻想郷では珍しい非人型である。と言っても相手は原初妖怪は大抵そんなものである。ちなみに現在は地下に棲んでおり滅多なことでは地上には出てこない（ 2 ）

意外なことに弾幕ごっこに興味津々な様子で、よく蟲妖怪相手に遊んでいる。擬人化して考えると凄い光景だろう（ 3 ）

余談になるが、外の世界にも幅広い地域で信仰される魏怒羅教の幻想郷支部の副支部長という肩書を持っているらしく、本人も非常に熱心な信者らしい（ 4 ）

「大爺さまもいい加減年なんだから自粛してもらいたいよ……」

――遊びに付き合わされたりらしい蟲妖怪

「スーさんと同じ毒友なのよー」

——可愛らしい笑顔で毒をまく人形娘

「私の花たちに近づいたらコロスわ」

——非常に珍しい警戒心たっぷりなゆうかりん

「懐かしいと言えば懐かしい顔ね。大分丸くなったみたいだけど」

——どこか遠くを見つめる月の賢者

1 じめじめした所が好きらしい。

2 当人は出てこないが使いの蟲はやたらと出現する。

3 少女と弾幕ごっこするお爺ちゃんである。

4 集会を名目に茶飲み友達と会っているそうだ。

ここから先は多少ネタバレ要素を多少含みます。
それらが嫌いな方はお戻りください。大丈夫ならお進みください。

——ここから先、多分二百由旬——

神魂命、零落の神産巢日

神命・創姫 Kamutamano—Souhime

種族：神、人（１）

能力：あらゆるものを生み出す（造りだす）程度能力

危険度：低

人間友好度：低

遭遇頻度：極低

主な活動場所：月の都

月の都の実質的な最高権力者。

かつて月の文明の前身となった人類最古の文明に火（技術や道具）を与えた最古神の石柱である。

彼女の能力　あらゆるものを生み出す（造りだす）程度の能力は創造の能力。文字通りあらゆるものを作り出すことを可能とする能力であり、生産神としての彼女の神力。

同じく系統の能力に月の賢者の能力があるが、神命の能力は彼女の能力と同じことが可能（２）

自分以外の生命には何ら関心はなく、使い捨ての道具程度にしか認識していない。と同時に、自分が造りだした道具の実験台にはもってこいという考えもある。

外見こそ優しそうな女性ではあるが中身は最低最悪。

しかし昔の彼女を知る者は、今の彼女とはまるで別人だと考えているものが多い。

「道具は使つてやるのが華なのだろう。なら事切れて腐れ果てて塵芥と化すまで、使い潰してやるのが慈悲というものだ。そうだろう？」

幻想郷縁起なキャラ解説#4・前（後書き）

キャラまだまだ募集中！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2917q/>

東方起源獄

2011年3月31日22時55分発行